部報

昭和41年度
第12号

北海道大学体育会馬術部

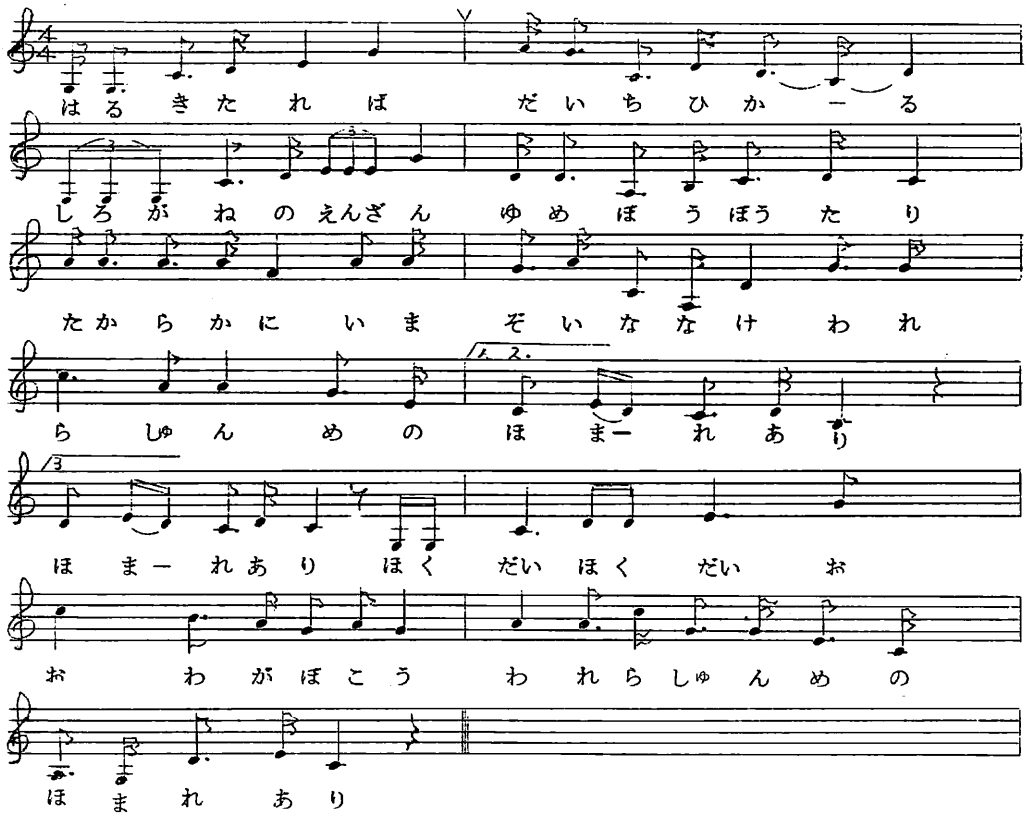
しんと静まり帰ったキャンバス
新雪をけって疾駆する数頭の馬
ど声が手稲に轟き
人馬共ますます気勢を喚起す

ある時は踏みならされた蹄跡を
ある時は未踏の広野を
至難なる究極を求めて止まぬ

悔いることなき青春を送らんがために
若き情熱と涙を　ここにそそぐ
我等が北大馬術部発展のために

北大馬術部讃歌

作詩　三浦清一郎
作曲　滝沢南海雄



北大馬術部讃歌

一、
春来たれば、大地光る
銀の遠山、夢茫々たり
高らかに　今ぞ嘶け！
われら駿馬のほまれあり

二、
時来たれば　旗をかざせ
青雲の旅路に　意気軒昂たり
高らかに　今ぞ嘶け！
われら駿馬のほまれあり

三、
雲流れて　旅路遙か
青春の孤杖　泥濘はばめど
凛然と　進みて行かむ
駿馬のほまれあるかぎり

北大！　北大！　おゝ我が母校
われら駿馬のほまれあり

目次

巻頭言　部長　半沢道郎　……1
「苦難を乗りこえ輝かしき馬術部の伝統を築いていこう」　主将　五十嵐章　……2
所感　監督　岡田光夫　……6
戦績及び行事報告　記録　斉藤勝雄　……7
会計報告　三年目　入江圭　……15
後援会事務報告　札幌地区幹事　三浦清一郎　……16
The Man—agers は御多忙　三年目　山本紘明　……18
飼育係より　三年目　高橋宏輔　……22
おチビ（北翔）さんのこと　三年目　五十嵐章　……23
北瓔号　四年目　加藤正昭　……27
北殿号　三年目　山本紘明　……30
北彗号　五年目　山村勝　……32
恋人　四年目　田中倬　……35
「離厩馬を惜しむ」　……37
朝清のこと　二年目　田中力　……39
北駒号の離厩について　責任者　近藤喜十郎　……40

卒業生のプロフィール　四年目　加藤正昭　……47
Eさんへ　五年目　近藤喜十郎　……48
回顧と希望　二年目　春田恭彦　……50
東日本馬術大会観戦記　二年目　角田卓彦　……53
全日本馬術大会傍観記　……54
四十一年度役員　……57
ずいそう　同好会幹事　佐合義弘　……58
思うこと—北飄に再会して—　三十九年卒　恩田正臣　……59
懐しき札幌の友への手紙　三十九年卒　小島武　……60
我が恋愛考　竜白馬　……62
無題　三年目　阿部勝彦　……64
馬丁道中記　一年目　橋口庸　……65
馬と英雄　一年目　本田徹　……66
「女子戦に出て」　一年目　吉田頌子　……68
「初詣」　一年目　佐藤潤子　……68
総合馬術について　五年目　山村勝　……72
伊太利方式と総合馬術との関連　岩坪徹　……77
「馬場馬術の教育方法」　卒業生　近藤喜十郎　……79
北海道大学馬術部名簿　……83
おわりに当って　……102

巻頭言

部長　半沢道郎

大晦日の夜、部室で残留部員数人とテレビを見乍ら歳を送り、ストーブの上の大きな鍋から部員苦心の作になる怪しげな雑煮で元旦を祝い、三日には早朝五時半からの初乗りに札幌神社に参詣し部の発展を祈つて新しい歳を迎えた。久し振りに零下十七度の寒気を衝いて新雪を踏み爽快であったが手足の冷たいのには改めて年令を感じた。午年と云うことで希望に燃えて迎えた昨年の正月から早くも一年が経過し光陰の年毎に速くなるのも寂しいことである。部員諸君の熱心な活動、先輩諸兄の温かい支援にもかゝわらず馬術部の昨年は残念乍ら躍進の歳であったとは云い難く、自ら顧みて甚だ慚愧に堪えない。高い理想に向って、硬い団結の力で困難に打克って欲しいと部員諸君に望み共に努力をしたつもりであったが、経理の面で大きい障碍に突き当り、正月早々三頭の愛馬を失った上に、部員諸君にはアルバイトを強い、先輩諸兄には特別の援助を仰ぐ羽目となって希望も理想も何処へやら誠に申訳け無い次第である。学生部の配慮によって、馬籍の問題は未解決乍ら、兎も角乗馬五頭の繋養が確保されることになったが、今までの最小の頭数で活動することを余儀なくされた部員諸君のこれからの苦労は本当に大変なことゝ思う。一日も早く健全な状態に立ち直つて、少なくとも自馬繋養頭初の頭数を確保して歴史のある北海道大学馬術部の面目を保ち、更に一層の充実を期し度いと念じている。

現在は或いは部の最悪の状態と云われるかも知れない、然し馬の頭数だけが問題ではない、少ない馬を大切に使って効率のよい練習方法を見出し、困難を打破することが大事である。こゝ暫くは雄飛のための雌伏であり、前進のための収縮であると考え、馬術部讃歌に唱われるように、行くてをはばむ泥濘も、大きな障碍もやがて時来れば易々と越えんとする軒昂な意気に燃えてこそ我が馬術部の伝統であり、駿馬の誉であると思う。馬術の修練によって培われる不屈の精神と、自ら求めて困苦に当る若く逞しい力と一丸の団結によって一日も早くこの窮状から脱して、高らかに嘶く日の来ることを望んで止まない。

しかし如何に駿馬の群を挙っても、自由に馳駆する天地に導くことが出来なければと顧問教官たる者の責任もまた重く辛い事である。

先輩の配慮により後援会から借用していた北驤号は部員の県命な飼育管理にもかゝわらず、遂に欠陥の快癒が見られなかった為に廃馬とした事は誠に申訳けのないことで深く御詫びする次第である。原稿締切りの日を明日に控え、纒まりの無い劣文を記し巻頭を汚したことを許して頂き度い。

「苦難を乗りこえ輝かしき馬術部の伝統を築いていこう」

主将　五十嵐章

一、この標題に見られる如く今、馬術部は経済的に先ず今までの歴史でそう遇した事がなかったであろうような最大の危機に立たされている。さらに馬匹数に於ても長い間維持してきた八頭という数字が遂に五頭に減ったのである。否、減ったのではなくて変わったといった方が先輩諸兄にとっても又、現役部員にとっても適当な表現かも知れない。それ程我々は八頭という数字に、全国の大学の馬術部の中でも決して少なくはない、むしろ多いと云った方がよい頭数に慣れ親しみ、無意識の満足を抱いていたのではないかと思う。即ち我々は昨年の十月二十三日この状態を予測しての悲しむべき離厩式を行って以来このかた、五頭を擁しての毎日の練習、毎日の飼付け、ボロ出し、試合を必死になって想像したが常にその想像は曖昧もことなり頭の片隅に消え去るのみであった。正直なところ努めてそういう情況を考えまいとするのが部員の偽らざる気持ではなかったろうか。しかしこの事態に当面し主将として次の世界を切り拓くべく新しい道すじ、明確な指標を呈示していかなければならない。以下はこの事態を乗り切り新しい栄光へと進む為の反省と展望である。

二、昨年の成績を振り返って見ても北大馬術部まだしもの感を抱くのを否めない結果に終った。シーズンに入ってからの各試合を検討しながら今後の指針にしたいと思う。五月、第一回の対酪農大定期戦、まずこの定期戦に言及するならば自馬戦に於る現在特筆すべき大会の開催と云えるが、中央の様子を見るに遅きに失した程の開始である。即ち東京勢に於ては馬事公苑に参集するに数時間、生田にある明大、日大においては丸一日かけて馬を歩かせているのであり関西に於ても然り、その中にあって野幌札幌間三時間は決して遠いとは言えないと思う。今後この定期戦を続行することは我々にとって調教上又技術的にも、試合一般に於る精神面の自覚、意識の昂揚などに測り知れない益をもたらしていくだろう。勿論酪農大の受入体制が整えば我々が野幌まで出向いて対戦する用意がある。そのような事にも対処すべく又、巾広い馴致をも兼ねて今円山その他の方面への外乗をやっている。その成果は除々にではあるが上がって来ているが行く〳〵は単騎に於て然も恰も馬車馬のような物に動じない逞しい馬にしていかなければならない。試合そのものは学馬連の講習会に出ていて見ていないので内容は分らないが成績をみるに北晟の複合二位は喜ばしいことである。北晟、北彗は伊式にて調教しているが北大馬術部の目指している試合は学生自馬大である事に鑑みこれからも馬場を踏んでいかなければならない要求を課せられているが、学生自馬大を含めての総合馬術競技の項で詳述したい。結果は総合得点に於て勝ったもののその後調教が出来、学生王決パルクール・ド・シャッス優勝のシーザーライト号、及びディリー号を擁しての今年の酪農大はあなどり難いものがあり上昇機運に立つ酪農大と定期戦をもつことは良い刺激となるであろう。

六月、第一回東日本大会　北晟、北翔、北飄の三頭が出場したが北晟＝小栗兄がパルクールで四位（満点でゴール）は特筆すべ

きことであり小栗兄のそれまでの努力には頭を下げるのみである。イコールで結んだのはそれ故である。ここで一つつけ加えたいことは北晟の成績が伊式の調教の為のみであると単純に我々は考えてはならないことであり競技に勝つには何にも増して努力が大切であり基本にのつとり慎重、細心にして大胆なる上での一層の努力である。伊式については後述。大胆ということは馬術についての深い造詣から生まれた行動であってそれなくしては単なる無謀と言いうべきであり部に於て決して許さるべきでない。造詣を深める為には広く馬術書を読み経験者の言葉に耳を傾けそして常に謙虚に自分を戒めて乗ることである。馬を調教するということは人間性の陶冶とも云える。

北翔はゴール持したものの着外に去ったが裂蹄より雌伏一年、前途に明かるい光を投げかけたに見えたが総決算と云うべき道大会で振わず、例年春は調子が良いが夏の道大会までの持って行き方に難しさを見せられた。なお詳しくは私の北翔の報告を参照されたい。

北飆、この馬は難かしい。この馬に乗る者は他の馬よりも余計早くに北飆を把握することが必要である。北飆の結果は芳しくなかったが今年は期待したい。

東日本大会は昨年より新しく開催されたものであるが主催が日馬連であり全日本への出場権を得るためにも（東、西両大会で三位まで。大障碍等は五位まで）又、その出場人馬をみても、さらに引続いて行なわれる指定馬選考会をみても極めて重大視さる大会である。シーズン初めに行なわれることより我々は冬期間からこの大会に第一目標を定め調教上差しつかえなければ北飆、北晟、北翔に加えて仕上がりつつある北彗さらに北瓔と五頭揃って出場出来るよう努力していく。指定馬選考の昨年の基準は一落下までであったが、指定馬としての補助を受けることは部の経済状況にプラスになること大であり、一頭でも多く指定馬となるよう努力しなければならない。

次に道大会であるがその前に春より夏の道大会に到るまでの練習を含めた調教に言及せねばならない。

例年、部馬は春は調子が良い、歩度もよく伸び障碍も嫌わず飛ぶ（全馬とは云い兼ねるが）。この原因を分析してみると気候の所為とはいえ冬期間の内容に起因していると考えられる。即ち冬期間においては練習出席者が少なく技術的差異のある幾人もの部員が乗るということが少ない為、又積った雪の制約のため高度及至複雑な運動課題の要求が出来ず従って単純な課題の反復練習を繰り返すことによりジックリと確実に人馬が育っていくのであろう。さらに馬場が使えないため必然的に外を走り回ることが馴致に好い効果をもたらしていると思う。

しかしこのことは反面雪が解けてからは以上述べたことが逆になってくることを物語っている。つまり新入生を加えての多数の部員で部馬を練習に使用せねばならないこと。今年からは今まで練習馬として使ってきた北楊、朝清それに北涼の三頭がいないという状態でやっていかなければならないので八頭いた時と同じやり方では調教の維持、向上は計れない。まず馬が少ないということを逆に利用して各個指導を徹底させる。今までにも各個指導はなされていたが考え方の方向として単に下級生の指導ばかりではなく馬をくずさない為にも考えるべきである。勿論部班運動の有利性を調教上に積極的に取り入れていき、その上での各個乗りであり、各個指導である。今年は少ない馬匹しかもいずれも試合用

馬として今まで大事に使われてきた五頭でやっていかなければならない。もはや新馬以外は試合用馬として特別視することは許されず毎日の練習に併用していかなければならなくなった。だからこそなお一層馬を大事にしていかなくてはならないのである。それ故下級生の乗る時間が少なくなるのは忍ばねばならない。どんな悪い条件であろうとこれからの競技は馬が主となることを考え馬をくずさず向上させていかなければならない要求を最上級生は克服していくことが必要である。部班運動に於てはともすれば人間の注意に目が注がれていたがこれからは馬を見る目を養いどんな僅かの動きでもそれが調教上まずい点であれば厳たる態度で臨むべきである。尤も我々のような馬術部にあっては調教ということは新馬も含めて練習に使用してくずれたのを直していくことも指すのであるが、又そうでなくては調教者とは云えないだろう。とにかく上級生は元より下級生の一人〳〵に到るまで馬を調教する心構えで乗ってもらいたい。

又、雪が解けて馬場を広く使えるようになると色々なことをやってみたいと思うのが人情ではあろうが冬のことを想起し調教とは単純なる積み重ねであることを銘記しなければならない。外を自由に走り回れなくなることよりの馴致不足は定期的に、最底一週間に一回馴致訓練をすることにより解決していくが通常練習日の時間を馴致に割くことは馬匹数と部員数を考え合わせて控えるべきであり日曜日もしくは月曜日を当てていく。

例年の夏休みの合宿は、道大会を控えているのであるから又、馬匹を考えてその内容、形態を改める必要がある。即ち合宿の考え方が新しいことを教える、から普段の練習の足りない所を補うという後向きの姿勢に変ってきておりそこにあっては必然的に馬そのものよりも人間本位の運動になっている。従って当然馬のくずれが予想される。この解決策としてなるべく馬を疲れさせずして人間をつくつていき障碍経路及び紅白試合のような競技は普段の練習並びに記録会へ振り向けていく。道大会は全道での覇を競うばかりでなく一昨年の旭川大会より帯畜大、酪農大との三校で予選をして学生自馬大会の出場馬を決めるようになった為、現在の我部が学生自馬大会を最大の目標にしている以上極めて重大な大会である。一年の総括としてばかりでなく国体、学生自馬大会への第一関門として是が非でも通過しなければならない。昨年の札幌大会は複合競技にて出場権を争ったが北海道の割当数の七頭のうち五頭を克ち取るつもりで全馬一丸となって臨み団体チームを組んで本大会に出場するのが最大の目標である。昨年は骨瘤の為北晨が欠場し、道大会には間に合ったものの北彗も骨瘤の為一ケ月近く休み調教が遅れたのは痛かった。この為ひ弱な北瓔に出場権獲得の重荷を負わせざるを得なかったのは部にとっても大きなマイナスである。結果的には北颯ただ一頭が団体、自馬大会の出場権を得たがその後の部の盛り上りを見ても対外試合のときは常時厩舎が空になり部員の目が全て試合地へ向けられている、という状態にしていきたい。

出場権をかけた大会であるから目標を設定して出場種目、人馬を決定していく。

又昨年から従来の王決に代って始められた自馬での王決は馬場が新国際綜合馬場、サンショルジュ、障碍がパルクールとピュイサンスの四種目で馬場、障碍両部門での総合優勝を各校が競うのであるが我々としては当分種目別の優勝をねらう、さらに出場に関しては調子をみて判断するが目標はあくまでも直後に行なわれ

る自馬大である。

又、学生選手権大会は参加しない方針でいく。学馬連理事長の青山氏も云っている如く（昨年の前記学生馬術三大会のプログラム参照）王決も廃止された現在、いかに伝統ありといえども貸与馬での試合である学生選手権は早晩廃止されるか自馬形式に移っていくであろう。旧七帝戦は後援会報で触れた通りだが自馬戦が重大視され且つ増えた現在財政的にも参加が困難な状況になってきている。ただ注意せねばならないのは昨年最下位という隠れもなき事実を卒直に受け取め技術的未熟さを反省しなければならない点である。我々は貸与馬廃止を叫ぶ一方ではなく貸与馬不参加によるエネルギーをより一層自馬戦へ注がねばならない。

総合馬術競技（学生自馬大）

我々が現在最大目標にしている学生自馬大は五キロ余の野外騎乗のある総合馬術競技であり正規のコースのスチープルチェスが経路となっている為、約十分間の持続駈歩が必要である。その為人馬共充分な体力が要求されるがその対策として日頃からの基礎体力作りが必要不可欠である。北瓔を除く四頭は肺心訓練に努め除々に持続駈歩を長くしていく。人間に関しては野外騎乗はもとより僅か一、二分の障碍経路で消耗することのないようトレーニングを重ね体力と柔軟性を養っていかねばならない。馬場に関しては東京オリンピックを一層の機会として旺盛な前進気勢が要求されている。即ち運動の正確さよりもより豊かな前進気勢、流動性、柔軟性が求められるようになった。外国ではグランプリ馬においてすら大勢衝をかけるのは競技のときだけでその前後は小勢衝であるという。即ち前進気勢を殺がない為であろう。総合競技の調教審査においておやと云えるが残念ながら我々の馬場馬術の意識、技術はそこまで論ずるまでに到っていない。先ず人馬ともB馬場なら運動課題を間違いなくやれるようになることである。馬に関しては障碍調教が終ったならばB馬場程度をふめる位の柔順性、口むきがほしい。この意味からも北晨、北彗は今年は馬場も意識して調教を進めていく。北翔、北飄、北瓔は馬場調教に集中することを努めて避け飽迄も障碍にゴールすることをまず目指すが今日のレベルが年毎に上がり優勝が一落下で決まることを考えれば甚だ心許無い目標ではあるがこれは人間の調教上及び技術的未熟さに起因することを銘記すべきである。

自馬制に関して。現在しいている自馬制の弊害は以前から上げられているが各馬のチーフは定期的に馬に乗り合い相互理解、相互批評批判を加え最終的には試合に於ての相互乗り換へも可能な段階にしていく。現状は各馬の調教段階、個性に差があり又、それを凌ぐ騎手の技術の未熟さ故一足飛びに最終段階には達し得ないが。

馬の入れ換へに関して、数年来かかって漸く全くの新馬は存在しなくなったが最早次の入換へを考える時期にきている。調教、年令等を考え合わせると北瓔は体力の面から今年度一杯最大限見積ってこの先二年以上おくべきでない。又北飄、北翔も十三才を数え総合で使えなくなればそのあと障碍に良い見通しがない限り出すことに躊躇してはならない。北晨、北彗にしても然り。しかしその過程における単なる人間の未熟さ故の結果にならぬよう調教者と呼ばれねばならない部員は注意すべきである。我々は第二のグレースを出すべきでない。以上の点を踏まえて新馬購入に当っていく。

今シーズンの試合予定は五月対酪農大定期戦、六月東日本大会へ向けての札幌自馬大（五月下旬）八月、北日本大会（札幌で開催予定）道大会へ向けての記録会、昨年より始められた太奏杯は道自馬大もしくは北日本大会の中で行いたい。その他市民大会（七月）十月札幌自馬大会、五月部内競技会。その他期日を定めずに馬場、障碍（五、六個）を記録会形式でやっていきたいが公式試合の合い間であるから色々制限があると思うので特に下級生は普段の練習の積み重ねで上手になっていってほしい。

その他に関する考え、方針は役員交代のとき述べた通りであるが一人〈がかけがえのない部員たるよう努めてほしい。

所感

監督　岡田光夫

今年も新しい年を迎へた。よく輝しい新年を迎へてと云う言葉を使うがこの一年間を輝しいものにするのもしないのもその人の努力の如何にかゝっている事で、年頭に当り輝しい年にしようと云う新たな覚悟を表現しての言葉であると思う。私も一昨年は大水害、昨年は露店対策等であっと云う間に一年を過ぎ、部に対して何も出来なかった事を恥じている。今年こそは何んとか閑を見つけて少しでも部のためにお役に立ちたいと覚悟を新たにしている。今年は馬が減ったと部員諸君は歎くであろう。しかし「無事是名馬」と云う言葉をもう一度味わってもらいたい。何頭繋養していても絶えず故障馬が絶えなかったら意味がないのではないか。曽て八頭養なっていたと云うけれど、コンスタントに練習に使へたのは何頭であったろうか。部員諸君、馬の少いのを歎くなかれ、現在残った馬を充分飼育管理して一頭の故障馬もなく毎日練習に使へたならば、八頭繋養していた時よりももっと練習にはげめるはずである。故障は病気と外傷の二つに分けられると思う。特に外傷は不注意から来るものが多い。繋養中に蹴り合った、放馬してけがをした、不注意に障碍の逆飛びをやって馬を倒した、深雪に突込んでふみかけをした、馬装が悪くて鞍傷を起した腹帯擦傷をした等々算え上げればいくらでもある。特に練習中蹴り合いをさせた等に至っては馬乗りとして最も恥づべき事であろう。これらのいづれもが管理する人乗る人の注意如何で絶無にさへする事さへ出来るのではなかろうか。又病気にしてもその馬の先天的体質によるものでない限りこれを早期に発見する事によってある程度避けられる事ではなかろうか。馬はめったに病気しない等と思っていたら大間違い、今年は是非定期的に馬の健康診断を実行する事を御すゝめする。そして諸君の努力によって五頭の馬でも充分部は成立って行くものだと云う事を立派に示していたゞきたい。

戦積及び行事報告

（41年4月～42年2月）　記録係

4日16～22日　新入生講習会

5月1日　対酪農大定期戦　於：北大

5月9日　北大、帯畜大、酪農大　三校対抗親善試合　（於：帯畜大）

シニア戦　1位　酪農大　　ジュニア戦　1位　酪農大

2位　北　大　　2位　北　大

3位　帯畜大　　3位　帯畜大

6月10～11日　東日本馬術大会　（於：淵野辺米軍キャンプ馬場）

○パルクールドンャス

1京産大　荒木　豪健　　北大出場選手

2福島馬連　佐藤　サイクロン　　小栗（北農）4位、首藤（北翔）

○中障碍飛越競技

1　振興会　小川　ダンディー　　田中（北飄）

2　帯畜大　板橋　雲　霧

○六　段

1　振興会　白井　レラーニ　　小栗（北農）

近藤（北飄）

6月13日　指定馬選考会

小栗（北農）
北翔（加藤正）　共にゴールしたが選考されず。

7月5～11日　七帝戦のための強化練習

7月14～15日　国立七大学体育大会　（於：馬事公苑）

予選リーグ戦

	北大	九大	名大	
北大		×	×	2敗
九大	○		×	1勝1敗
名大	○	○		2勝

	東大	東北大	京大	
東大		○	○	2勝
東北大	×		○	1勝1敗
京大	×	×		2敗

北 大 関 係

	北 大	馬 名	九 大
池 田	—4	幸 早	0
田 中	—17	東 鬼	—3
加 藤	—3	東 荒	—158
近 藤	—199	稲 武	—19.25
五十嵐	—195	城 雲	—195
	—418	計	—375.25

	北 大	馬 名	名 大
近 藤	—12	東 扇	0
池 田	—6	幸 早	0
加 藤	—4	東 鳳	—9
田 中	—199	城 雲	—175
五十嵐	—3	淡 青	—3
	—224	計	—187

1 東 大　2 名 大　3 東 北 大

7月20～23日　日高牧場見学旅行

7月24日　札幌市民大会　（於：北大馬場）

○婦人少年障碍

1. 北大　仙波（北翔）　—3（48）　北大　阿部（北瑛）

○パルクールドンヤス

1. 北 大　加 藤（北瑛）　0（67″）　北 大
2. 北 大　五十嵐（北翔）—93（83″）　池 田（朝清）
3. 札 鉄　田 中（立山）—97（87″）

○標準中障碍

1. 北馬連　岩 坪（山透）　0　北 大
2. 光星高ＯＢ　長 田（キングフレーム）　0　小 栗（北晟）
3. 北 大　田 中（北飄）　—3

○六 段

1. 光星高ＯＢ　長 田（キングフレーム）　150cm完飛
2. 北馬連　岩 坪（山透）　130　〃

○小 障 碍

1. 北大ＯＢ　八木多（山透）　0（38″）　北 大
2. 北 大　村 井（北瑛）　0（39″）　斉 藤（朝清）
3. 光 星 高　斉 藤（洋考）　0（41″）
4. 北 大　春 田（北楊）

7月25～31日　2年目対象合宿

8月4～10日　1年目　〃

8月14～16日　北日本馬術大会　（秋田県角館）

北大出場選手　山本　北晟　失権

8月28日　太奏杯相撲馬術大会　（於：北大馬場）

○複合馬術

1. 北 大　田 中（北飆）　北 大
2. 北 大　山 村（北彗）　村 井（朝清）
3. 北 大　道 藤（北翔）

○小 障 碍

1. 北 大　山 村（北彗）
2. 北 大　五十嵐（北翔）
3. 北 大　池 田（北飆）

○中 障 碍

1. 北馬連　岩 坪（山透）　北 大
2. 北 大　首 藤（北翔）　田 中（北飆）
3. 札 鉄　田 中（立山）

○六 段

1. 札 鉄　田 中（立山）
2. 北馬連　岩 坪（山透）
3. 北 大　田 中（北飆）

9月10～11日　北海道馬術大会兼国体予選（於：札幌競馬場）

○複 合

1. 鎌田　北大同　セントベル　北 大　田中（北飆）　加藤（北瓔）
2. 中島　酪 大　シーザーライト　春田（朝清）

○壮年自馬

北大同　半 沢（北 翔）
　　岡 田（北 晟）

○選抜中障

1. 帯畜大　板橋（クモキリ）　北大出場選手
2. 北馬連　岩坪（ヤマトール）　田中（北飆）
3. 北大同　鎌田（セントベル）

○小 障 碍

1. 旭川乗馬　佐藤（旭峯）北 大
2. 北 大　仙波（北翔）　五十嵐（北翔）池田（北飆）高倉（北彗）
3. 北 大　村井（北瓔）　田中（朝清）斉藤（朝清）

○六 段

1. 北 大　田 中（北飆）
2. 旭川乗馬　神 岡（旭峯）
3. 帯畜大　板 橋（クモキリ）

9月12日　役員交代（主将五十嵐　以下別記）

9月17日　役員交代コンパ

10月13日　学生選手権第一予戦

近藤選手出場

10月16日　札幌自馬馬術大会　（於：北大馬場）

o B馬場馬術

1. 光星高　馬　場（洋考）　北　大
2. 札幌女高　布　施（洋考）　加藤正（北瓔）
3. 北　大　五十嵐（北翔）　田中力（朝清）

o パルクールドンヤス

1. 北大同　半沢（北翔）
2. 北　大　加藤正（北瓔）

o 中　障　碍　北　大

1. 北乗連　岩坪（山透）　阿部勝（朝清）
2. 北　大　加藤正（北瓔）　五十嵐（北翔）

o 大　障　碍

1. 北馬連　岩坪（山透）　—16（75″）

o 六　段

1. 北馬連　岩坪（山透）　150cm完飛

10月23日　雛厩式をかねた騎乗会

北駒、北楊、朝清

10月23～27日　国民体育大会　（大分）

o 複合馬術　北大　田中（北飄）第一予選で失権

o 六　段　〃　第一試技で失権

10月24日　北駒号雛厩

11月1～5日　関東北女子戦のための強化練習

11月5～6日　全日本馬術大会

11月8～9日　自馬王決　杉谷馬事公苑

o 総合馬場

1. 関大　若原（千鵬）　77.4　北　大
2. 早大　川人（セントレコード）　71.0　加藤正（北瓔）
3. 中大　小出（白翔）　70.25　田中倖（北飄）

o サンジョルジョ賞典馬場

1. 明大　佐伯（明旗）　107.50
2. 早大　久山（稲城）　103.92
3. 京都産大　山脇（ライト・スピリット）　95.83

o標準中障

1. 酪　大　　中島（シーザーライト）—4（127）北　大
2. 帯広大　　吉井（柏雄）　　—4（136）　加藤（北翠）
3. 岡　大　　原（旭彗）　　—4（138）

o選抜中障　（カッコ内は同点決勝3回目の記録）

1. 名　大　　植松（端帯）　　0（0）　　北　大
2. 早　大　　久米（稲蛍）　　0（3）　　田中（北麟）
3. 学習大　　髙橋（嶺桜）　　0（4）

11月12～14日　学生自馬馬術大会

田中　余力審査にて失権

1. 同志社大
2. 学習院大
3. 京都大
4. 帯畜大

11月12～13日　関東北女子馬術大会（福島競馬場）

団体戦

1. 岩　大　A　　北　大
2. 福　大　A　　北大　A　　阿部、遠藤
3. 立　大　B　　北大　B　　佐藤、吉田

個人戦

北大．阿部．遠藤．佐藤．吉田

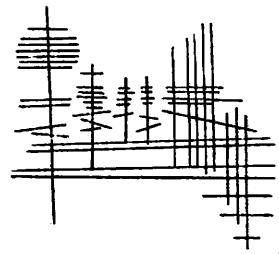
11月17日　学生選手権大会

12月13～18日　一年目強化練習

42年1月19日　北凉・北楊・朝清・離厩

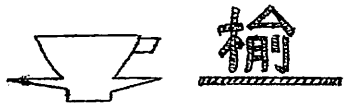
2月1日　ダンスパーティー　（グランドホテル）

3月4日　追コン



COFFEE

喫　茶



TEL 71—2031

サッポロ北6西6

画　廊　喫　茶

タ　マ　キ

札幌市北18条西4丁目

TEL ⑦③—4890

☆新しい事務機・事務用品・文具と印刷

☆どんな事務機．事務用品でも
☆どんな文具印刷でも

まず御照会下さい

心から御満足いただけるように私どもはいつもつとめております

株式会社 ㊀ 染　谷　商　店

本　　店　札幌市豊平5条10丁目　電話 ㊸7156-7157
㊸0623
第一支店　染谷紙店　札幌市豊平3条8丁目　㊸8552
第二支店　染谷豊平文具　札幌市豊平3条4丁目　㊸8456

太田蹄鉄店

札幌市菊水北12

電話 (81)－0851

中華料理　みそラーメン

味の大王

札幌市北14条西5丁目

北大病院前 (71) 7847

NIKKA BAR

MABŌ

北13西4

一般医薬品

ホシ伊藤(株)

本社 札幌市北一西三(時計台前)
TEL (24)1216(代)
支店 札幌・帯広・釧路・北見・函館

札専・札信販加盟店

吉ナカタ

本店 北14.東1.
Tel (72)1331

支店 グランドホテル
Tel (26)3311 内線 263

大小宴会承ります

北都寿司

出前迅速

TEL 24-5770
札幌市南3・西5

馬具・鞄
製造販売修理

中野馬具店

札幌市北13条東1丁目 石狩通
TEL (3)-7876

会　計　報　告

3年目　入江　圭

月	収入 摘要	収入 金額	支出 摘要	支出 金額
1	先月より繰越	58,129	飼育	1,260
	書籍	1,550	通信費	300
	部費	13,700	雑費	2,500
	計	73,379		5,060
2	部費	13,800	馬具	1,010
			通信費	745
			雑費	2,880
	計	13,800		4,635
3	部費	11,250	備品	70
	新年会	4,090	雑費	3,821
	計	15,340		3,891
4	部費	35,500	装蹄	8,750
	試合援助	45,000	馬具	435
	雑収入	11,500	飼育	875
			備品	7,301
			連盟費	3,000
			通信費	773
			書籍	1,250
			雑費	6,662
	計	92,000		29,046
5	講習会	18,400	馬具	610
	部費	12,000	飼育	540
	競馬場バイト	50,800	備品	15,554
	雑収入	6,651	試合参加費	10,000
			東京講習会	10,000
			雑費	3,520
	計	87,851		40,224
6	部費	9,100	飼育	600
	競馬場バイト	109,750	備品	2,353
	雑収入	19,000	通信費	570
			試合参加費	14,000
			遠征費	61,289
			部報代	41,800
			雑費	7,200
	計	137,850		127,812
7	部費	11,100	飼育	930
	雑収入	5,300	備品	4,069
			試合援助	54,400
			通信費	650
			雑費	4,100
	計	16,400		64,149
8	部費	6,600	飼育	360
	体育会より	52,432	備品	13,322
	雑収入	6,000	通信費	1,010
			道大関係	33,000
			北日本 〃	28,440
				9,919
	計	65,032		86,051
9	部費	6,200	備品	330
	学馬連より	20,000	連盟費	2,500
	広告費	12,000	雑費	3,000
	計	38,200		5,830
計		539,852		466,698

◇後援会事務局報告

札幌地区幹事　三浦清一郎

昭和41年度後援会活動の概要を御報告申し上げます。結成以来2年有余、有志各位、先輩諸氏の温い御協力、御支援を賜わりまして、わが後援会も着実な発展を遂げつつあります。ここに記して厚く感謝の意を表する次第でございます。

後援会報などですでに御存知かとは思いますが、現在、北大馬術部は大きな転機に立ち至っており、現役諸君の決意も新たなるものがございます。なにとぞ今後とも会員の力を結集して、北大馬術部の発展に御協力の程お願い申し上げます。

◎活動経過

一、一九六六年三月・北大馬術部報に年間活動報告
二、　六月四日・後援会報第四号発送
三、　六月二十七日・後援会報第五号発送
四、　十月十日・後援会報第六号発送
五、十二月二十三日・会費納入依頼発送
　　並特別募金活動趣意書案発送
　一九六七年
六、　一月二十四日
　　一月三十一日　特別募金活動趣意書発送
七、　二月・後援会名簿作成（部報に掲載）

◎会計報告（別表の通り）

◎後援会名簿について

今年度も部報巻末に掲載の通り、後援会名簿を作成致しました。昨年のものはミスプリントなどひどい間違いが多く、また色々と不備もございまして、御迷惑をおかけ致しました。その後事務局へいただきましたお便りを参照しまた事務局が部報編集委員会に出席して、更に正確を期したつもりでございます。しかしながら、現在なお若干の不明な点もございます。つきましては何かお気付きの点がございましたら、お手数ながら、事務局まで御一報下さいますようお願い申し上げます。さらに、転勤や住居表示の改正などの場合には、その旨御連絡をいただけますれば幸いに存じます。なお最近住所変更になった方を『広場』の欄に御照介致しておきました。

◎今後の会報発行について

二年間の活動の結果、事務局運営の一つの「型」が経験的に定着致して参りました。左に記しますのが、後援会年間活動予定の概略でございます。

年間活動予定

・五月～六月・・・当年度会費納入依来
　　会報発行
　　（部の年間行事予定・後援会役員照介・その他ニュース・）
・九月～十月・・・会報発行
　　（部の戦績一覧・部の新役員招介・その他）
・十二月　・・・会報発行
　　（新年会・初乗案内その他）

◎ 昭和４１年度　北大馬術部後援会会計報告

収　　入	支　　出
昭和４０年度繰越金並利子 ○○○４２,１４５－ 小樽貯金局への直接郵送分 ○○○４８,５００－ （３９名） 事務局への直接納入分 ○○○１８,０００－ （１２名） 北 駒 号（ジュピター）払下代金 ○○○５０,０００－ 総　計　１５８,６４５－ （但し、東京ＯＢ会扱い分については未定。）	66. 6. 4.　後援会報　才４号　発送経費 ○○○４,４５５－ 6. 27.　後援会報才５号 ○○○１,７２０－ 10. 10.　後援会報才６号 ○○○８,７８０－ 12. 23.　会費納入依頼書並特別募金活動趣意書案 ○○○１,８６９－ 1. 24.　特別募金活動趣意書（東京Ｏ.Ｂ会分） ○○○５,６７０－ 1. 31　特別募金活動趣意書（全国） ○○○１,５６０－ その他振替用紙　○○○○３２０－ 総　計　２４,３７４－
差　引　残　高	１３４,２７１－

（昭４２.２.１０現在）

・三月・・・・・・部報

（年間活動報告・会計報告など）

なお会報には事務局ニュースの他に、随時OB・現役の原稿を掲載して、良き交流の場にしたいと考えております。各位の御協力をお願い申し上げます。

◎事務局幹事一部交代について

札幌地区幹事・小山毅（37卒）・三浦清一郎（39卒）に代り小栗紀彦（42卒）・近藤喜十郎（42卒）・加藤正昭（42卒）が新幹事に就任致しました。

以上まことに簡単ながら、後援会の活動を御報告申し上げます。

一九六七年　二月十日

The Man-agers は御多忙

三年目　山本紘明

ザ・マネージャーズ。これは決して、その辺のチンピラ楽団の名前でも何でもない。れっきとした北大馬術部の、それも経済的、外交的屋台骨を支える集団に冠せられた称号である。以下ザ・マネージャーズは御多忙と題して、拙文を綴る。

才一部　プロフィール

ザ・マネージャーズは多忙である。学内外に於ける渉外、部内外の金銭問題、不足しがちな部財政のための金策、更に今年度は一番重大にして且中心的な問題である学生部問題と部多年の累積的結果である赤字の解消問題等々。ザ・マネージャーズを構成する五名の頭を悩ませる題材には事欠かない。事欠かないはかりか、事を欠かなすぎる。欠かなすぎるが故に多忙である。だからこそザ・マネージャーズには頭脳明晰、容姿端麗と自らが認め他人からは認められない野郎ばかり五人が群をなしている。

ザ・マネージャーズの仕事は決して華々しくはない。むしろ地味で、苦労の多いものである。精神的疲労、肉体的疲労、金銭的疲労が常に伴なう。しかしそうした条件にもめげず精一杯働いている五名に、ここでスポットをあててみることにした。別に他意はない。それが才一部の主題であるからである。

最初に登場する男、牛肉、羊肉、鶏肉、兎肉に魅せられ、昨年秋に獣医入りした二年目田中力。この男入部以来実に数多くの異名悪名を頂戴して来た。それらを一々数え上げ、紹介するにそれだけで、才一部を完結しえるのではないかと思われる。そしてそれだけで才一部の完結をみることができるならば筆者の苦労は半減、否、すべて失くなるかも知れない。しかし悲悲深い筆者はそうはしない。そうしたことは御仏の心にそうものでもなく、聖キリストの思し召しでもないからである。けど、ちょっとだけ悪魔の心をもつ意地悪な筆者はここで一例をあげることにするのである。それは去る日、去る時、練習後の寛いだ一時の話である。彼は今度新調した長靴が足に合わないと、散々ボヤキ、不平を言い、グチリ、喚いた後に、いとも満足げに誇らしげに、次なる言葉を発した。

「靴屋の親爺が言ってたな。『これまで、こんな長い長靴を作ったことがない』って。するってえと、俺の足はとびきり長いんだな。きっと。」

これを聞いた部員は、声を大にして笑った。彼は噴然とし、怒り狂った。なぜならば、彼は常日頃彼に冠せられる、〝座頭市〟

ならぬ〃座高一〃なる称号に、右の語句をもって、見事に而も堂々と、反撃しえたと考えたからである。しかしこの彼の反撃は空しかった。彼は心中密かに思ったに違いない。「彼らすべてに呪いあれ。」と・・・・。

てきにも書いたように、田中力は数々の異名を頂戴している。他ならぬ部員諸々から。だが、ここでそれが何故であるかを考えねばならない。そしてそれを考える時、それは一重に彼の個性ある人間性に根ざすものであり、そして、その個性がこよなく部員に愛されるが故であることに考え到らねばならない。そこまで考え到らねば、彼が可哀想である。然り!! 彼は、その個性ある人間性をもって、ザ・マネージャーズの一画に厳として存在している。今日も彼は、実に飄々と馬に乗り、実に飄々と後援会関係の仕事を片付け、そして時として、飄々とコンパの司会などやるのである。

余り一人について長々と書いている訳には行かない。原稿締切は、数時間後に迫っている。次に照介する畜産二年、春田恭彦の顔が、怒りの形相ものすごき顔がチラチラする。何故か? 彼が現在、この原稿を集める親玉であるからである。この親玉も又、前記の田中力と同じく、動物性蛋白源の不足から、畜産を志望、見事(?)パスしたのである。この男、種々なる特技を持つ。一銭も持たずに毎日を食って行く。E・H・エリックなみに耳を動かす。試験の答案をまともに書きながら不可をもらう。学校に行かないのに出席はしている。などなど。これ又、不可思議なる特技、数え上げればきりがない。彼は高校時代、バレーボールをやっていたとか。ために、昨年冬、学内バレーボール大会に於て、我が馬術部に栄誉ある、この上なく貴重な一勝をもたらし、ビールの小瓶をもたらした。

冒頭にザ・マネージャーズは金銭的疲労を伴なうと書いた。彼はこの疲労の極度な進行に侵され、今やそれは病的でさえある。故にチーフとの間で次なる会話が交されることも稀ではない。

「春田、どこそこへ行ってこい。」に「金がありません。出してくれますか?」 幾何かの交通費を期待して彼はこう答える。しかし、チーフはケチンボウである。彼も金銭的疲労が、病的ではないにしろ、極度に進行している。彼は困惑の表情を浮べ、いとも面倒くさげに、そして重々しく、「ん、じゃまあ、しようがあんめえ。俺が行く。」かくしてチーフは、自分の定期を可能な限り利用することになる。その当然の結果は、市財政に目に見えぬ損害を与えているのである。これは一つの由々しき社会問題でもある。

彼、春田恭彦は学外関係を担当する。道馬連との連絡、広告取り、その他諸々。特に今度、二年ぶりのダンスパーティー開催に当って、チーフ組織の一画に入り、大いに活躍した。そして今は、部報編集の親玉として全部員脅威の的となっている。彼も又、その活動力をもって、ザ・マネージャーズを根底から支える一員である。

水三の男、機械工学三年、浜岡秀洋。四国生まれである。黒潮で産湯を使い、黒潮と共に育った。この限りで判断するに、彼を知らぬ人には、逞しき海の男性的な、くろがねの肌をもつ偉丈夫を想像するかも知れない。しかし彼は違う。可愛い(この表現が適切かと思う)のである。彼は、南国の男必ずしも雲つくような大男、もしくは頑丈な男ではないことを、健気にも、一身をもって証明してみせているのであろう。表面上で彼は南国に反抗しなが

ら、内面的にやはり彼は南国人である。彼は陽気、それも底抜けに明かるい。南国の太陽のように。彼の行く所笑いが絶えない。彼に対する揶揄や皮肉は、すべて疲の一言〝イケズ〟により打ち消されてしまう。そして彼の横顔紹介も、この〝イケズ〟によって、短かきをもって終りとせねばならない。い憾である。が致し方がない。いくら「書きますわよ。」と頑張って見た所で所詮彼は〝イケズ〟なのである。彼はザ・マネージャーズに於ては、これと定まった任務を持たない。いわゆる〝泳ぎ〟である。だから、忙しくなると駆り出され、コンパがあるというと呼び出される。皆が陽気に騒いでいるとき、渋い顔をして、請求書とにらめっこをしている彼の横顔を見かけた人は少ないであろう。

最後は御大、衛生工学三年、入江圭。潔癖な彼は、札幌市の余りの汚なさに憤慨し、大いなる野望をもって衛生工学入りをした。彼は一時、口の悪い同輩から〝殿下〟と言われ、〝陛下〟と敬まわれた。彼の人徳と貴族的風ぼうがなせる技ではある。しかしこの殿下、実に腰が軽い。余り軽すぎて、自分の下宿にめったに居たことがなく、外泊の絶えない不良貴族である。かくなる不良性を有してはいるが、彼の一言は千金に値する重みを部内に於て持つ。その訳は、何ということはない。彼が部の会計面を担当し、部の運営資金をガッチリと握っているが故なのである。彼が、「金がない。」と一言のたまえば、我々は金作りに奔走しなければならない。彼の出す支出予算書に従って、収入予算に競馬場アルバイトを組み込み、時にはダンスパーティーを企画せねばならぬ。そして、部員は乏しい財布の中から、彼によって部費なるものを徴収される。しかるが故に彼は部員にとっても、ザ・マネージャーズにとっても悪魔的存在となる。だが、賢明なる部員は知っている。彼という人間が悪魔的なのではなく、会計という任務が彼をそうさせるのであることを。彼は貴族的なのである。だから決して悪魔的ではない。いささか不良的であるとは言えようが。。。。。。。

以上をもって、ザ・マネージャーズを構成する人間の横顔を一通り眺めてきた。文才の無さの故に、少々冗長にすぎたきらいはあるがお許し頂きたい。只、この中で一人欠けていることに、賢明なる諸兄姉は気付かれるであろう。確かに一人欠けている。チーフと称する経済学部三年、山本紘明が。。。。だが考えてみるがよい。自分で自分を賞める阿ホがいるであろうか。ましてや自分で自分をけなす馬鹿が。。。変人の多いこの世の中、一人や二人は居るかも知れない。しかし気の弱い筆者はできない。断じてできない。他人をとやかく言いながら自分について一言も述べぬのは卑怯であるとおっしゃる方もいよう。そこで計画に従い、次の一文をもって我身を紹介しておく。現在、学生部問題に取り組み、今まで紹介してきた四名すべての仕事を総括し、指令を下すのを任務としているのであるということだけを。そしてこれでやっと才一部を完結する。まずはメデタシメデタシ。

（才一部完）

才二部　経過報告

次に才二部として役員交代以来今日迄取組んできた主要問題について述べて行こうと思う。

四一年九月十三日役員を引き継いで、まず競馬場アルバイト。引き継ぎがうまく、スムーズに行かず、二年目部員をはじめ多くの部員諸兄姉に迷惑をかけた末に何とか無事に終ることができた。これによる収益の細かい数字は会計報告をみてもらうことにして、

近年実施の度毎に物議をかもすこのバイトに関して、一言を付しておきたい。このバイト、必ずしも学校が休みの日に行われるものでもなく、むしろ、授業のある日に行われる方が多い。従ってどうしても部員に一～二回から多ければ三～四回授業をサボることを強制しなければならない。従って、学生である我々にとって、不健全な、不愉快なものであるかも知れない。事実、不満、批判の声も強いのである。そして、それのみを考えるならば、当然廃止しなければならない性格のものであるとは考える。しかし、馬術部の現状を鑑みるに、その財政の約三分の一を占める財源であることは事実であり、又部が毎年これを含んだ相当額の金額を必要とすることも事実なのである。否、必要とするばかりか、往々にして不足をさえも生じるのである。だから、今後確実にこれに相当する金額、或いはそれ以上の金額の入る目当がつかない限り、廃止は困難であろうと予想される。毎年、矛盾を感じ、頭を悩ま廿ながら、現実には抗すべくもなく、解決されぬのである。

競馬場バイトが始まった時、学生部移問題の具体化として馬匹頭数の制限が具現さるべき問題となった。調教者会議、役員会、部員総会などで決定した朝清、北楊、北涼、それに後援会所属である北駒号の処分という問題に、いやでも取り組まねばならなくなった。前記三頭に関しては、農場と籍の問題で折合いがつかず、その後の有利な条件に期待し、赤字累積を覚悟の上で、先づ北駒号の処分を急いだ訳である。結局北駒号は従来より様々な面でお骨折を願っている後援会、小野氏のお世話により、十月二十五日、離厩が決定した次第である。

その後は遠征で忙殺された。特に今度は、国体が大分、全日本が大津、学生自馬、王決が大阪と、三ケ所を転々とし、又期間も約一ケ月間の長きに亘るものであっただけに、飼料、資金などの面での準備不足や、見込み違いが出、飼料は遠征帰途購入、資金に関しては一時的に部に一銭も残らないといったような状態をも呈した。又、日程調整の連絡にも苦労し、貨車積人員を集めるにも一苦労し、とりわけ苦労の絶えない貨車積であった。貨車付添人としての人間を一時的に要した数に於て、今回の貨車積は空前のものではなかったろうか。それだけに無理に授業をサボってもらったりした諸兄も居たであろう。ここに誌上を借りて、協力をお願いした諸兄に改めて感謝致します。どうも御苦労様でした。と、実際あの時を想起するに、そう言わずに居れない状態ではあったのである。

十月二十三日より二十七日まで、大分で国体、十一月五・六日大津で全日本、同じく八・九日大阪は和泉府中の地で王座決定戦、十二・三・四と同じ地で学生自馬と、華々しく全国的な大会が展けられている中で、会計と共に、慣れぬ数字をあっちへやったり、こっちへやったり、ああでもない、こうでもない。と積み合わせの分担、費用の計算に余念がなかったのである。

そうこうするうちに、遠征も終り、決算にとりかかったのも束の間、遠征中、御無沙汰していた学生部問題が活発化し、学生部にお百度を踏んだ末、とりあえず、四一年度後半期分（十月以降三月迄）の飼料補助が認められるに到った。現在はすでに学生部支払いの飼料によって、馬匹を養っているのである。それと同時に馬匹の頭数削減も急がねばならぬ現実的問題となり、赤字問題も十二月を迎えて計画もその一部を実際に着手していく段階に入り、加えて、補正予算捻出を目的に企画したダンスパーティーもグランドホテルを会場として獲得できたことから動き出し、かくし

て年末より年始にかけて身辺多忙を極めるのである。

迎えて一九六七年、先ず馬籍の問題で折り合いがつかず延び延びになっていた三頭の処分が決定される。何回か交渉を重ね、話し合いを持ったにも関わらず、遂に力及ばず、最低の条件で、北楊、北涼、朝清を手放という結果を招いてしまったことは、前記三頭に対し又、部員すべてに、後援会の皆様方に対し、何とも申し訳ないという気持が先に立ち、何とも形容し難い悲しい気持ちにさえ見舞われた。

しかし、感傷に浸ったり、くよくよしたりする暇もなくダンスパーティーの仕事が待っていた。ダンスパーティーについては当初の計画を変更、その後の部財政に臨時収入があり、それと共に今後の見通しがついたこともあったので、赤字の解消に役立てることを目標にした。

結果として十万程の収益があったものの、企画者と部員全ての甚大な努力と犠牲を考え合わせると決して満足しうるべきものでもなく、種々の課題もしくは、反省事項を残した。少なくとも今後の開催に関しては、余程のことがない限り企画するべき性質のものでもないように思われる。又、開催を意図するにしても充分に慎重な打ち合せと部員全ての協力、全部員が一丸となって当るといった素地の下に企画を立てることが必要であろう。いずれにしてもできるかぎりは避けた方が賢明であるように思われる。なにはともあれ、今回のダンスパーティーに関しては、チーフとなってくれた池田君、そして大いに活躍してくれた春田君、ブウブウ文句を言いながらも、最大の努力と犠牲を惜しみなく発揮してくれた部員諸兄姉すべての協力が赤字を出すこともなく、むしろ十万という少なからぬ黒字を出してくれたものであることは感謝に耐えないものであり、マネージャーとして改めてやり甲斐というものを感じた次第である。

以上が大体今まで取り組み、行ってきた主な問題である。しかしこれで終ったわけではない。馬籍の問題はまだ尾を引いており、北瓊、北晨、北彗号は未だ無籍で、農場にも学生部にも所属しておらず、四二年二月六日の学生部、農場、馬術部三者の話し合いで、本年三月末日までにいずれかの籍に入ることを確答はしてもらったものの、実現するまでは不安な感も否めない。今後、まずこの馬籍問題を解決し、現在進行中の赤字補塡のための募金も三月一杯が目途となっており、その結果については、一重に後援会諸兄姉のお力にお縋りする他はないのであるが、とにかく、すべてそれらを三月中にば解決し、四月新会計年度よりは、経理上、新しい、後顧に憂いのない、健全な馬術部として出発したいと思っている。今後も、多年馬術部が苦慮してきた経理面の問題にピリオドを打つべく、そして然る後の馬匹の充実などといったことを夢みて、ザ・マネージャーズは東奔西走する覚悟でいることを付記し、かくも長々しき、くだくだしき拙文を終えることに致します。

（第二部完）

飼育係より

三年目　高倉宏輔

学生部移管等の話は飼育とは非常に関係がありますが、マネージャーより詳しい報告があると思いますので、別の事（全く別ではありませんが）を述べる事とします。

十月の北翔号の離厩に続き、馬籍問題解決次第、あと三頭の離厩のやむなきにいたりました。北楊、朝清は永年の間、部を背負い、特に下級生の練習に故障もなく頑張ってくれていたのに残念でなりませんが、周囲の事情が許さず離厩ということになり本当に残念です。それにまだどの馬というのは決定していませんが、（近々決まると思いますが）あと一頭出さねばなりません。九頭から一挙五頭になってしまいます。この五頭で練習し、試合に出ねばならないので、絶対故障馬を出すのを避けねばなりません。ですから飼育係として、今までよりその点に細心の注意をしてゆこうと思っています。今までの故障馬というのは、大体人間の不注意によって起った事が多いので、これからは特にそういうことがない様、全部員が馬の状態をよく知り、異常を発見出来る様になって欲しい、いや絶対にならねばと思います。

飼料については、今年十月より来年三月迄は、学生部より支給されました。（まだ少し残ってはいますが）五頭分と限られてはいますが、来年度も五頭分は確保出来そうなので安心です。が現在八頭いる為、十分な事が出来ず残念です。やはり馬達に十分な飼料と、十分な寝ワラを与えてやれる状態が、早く来て欲しいものです。

それからもう一つ。今年の王決（十一月）に北瓔号が出場しましたが、この北瓔が試合にもハッスルし、帰札後も別に故障もなく、普段と変らなかった事です。御存じの通り、北瓔は肢が弱く、又内臓も弱い為、以前貨車積みで非常に危険な状態に陥いったことがありました。その為、皆、非常に心配しましたが何事もなかったので、本当にうれしい事でした。これは北瓔も十分注意さえすれば、貨車積みに耐えられるということです。

この様に、馬達の健康について、飼育係のみならず、全部員が気をつけること。これが馬術部員として、一番大事な事と思われます。

部員の皆さん、馬を可愛がりましょう。

おチビ（北翔）さんのこと

三年目　五十嵐　章

部馬の調教原稿を書くのに、こんな甘ったれた題を付けるものでもあるまいと思われる人も多いだろうが現在の北翔を思う偽らざる気持であるから先ずは許してもらいたい。というのは北翔に乗り始めたのが約一年前の昭和四十年十二月、それまでの約二年間チビにはほとんど接する機会はなくそれ故余り好意はもっていなかった。むしろ嫌いと言ったほうが真実かもしれない。それは何も僕だけの全面的な責任でもないと思われる。それまでの北翔には十分そんな要素があったのである。即ち昭和三十九年鎌田さんの調教を受け高橋さんの騎乗により白馬大を完走したことによりそれまでの名馬の呼称の片鱗を示し増々部の大事な試合用馬として扱われ我々下級生の容易に近ずける馬ではなかった。加えて純血のアラブ、神経質でツンと澄ましこみ自の雑種人間を呪ったものである。おまけに北楊や朝清ばかり乗せられたまにチビに乗せられると全然動かないで下からは怒鳴られっぱなし。こんなことが積み重なって嫌いという気持を生ぜしめたのであろうがこれは多分に下積みの優遇されるものへの嫉妬もあったのだろう。とにも角にも四十年十二月から乗り始めて一年余、今ではすっか

りチビを目に入れても痛くない程可愛く思うようになってしまった。正に「人には添ってみろ、馬には乗ってみろ」である。前口上はこの位にして現在の、これからのそして先ず今までの北翔を振り返ることにより考察をしていきたいと思う。次に北翔に乗る人は引き継ぐときにこの文を批評して一層の向上を計ってもらいたい。

冬（去年）

一年前の同じく冬にやった裂蹄もすっかり癒え運動内容は平常に行う。主に水勒騎乗、冬休み首藤兄帰省の為一人で乗る日が続き北大構内を走り回る。歩度が良く伸び軽速歩を取りにくい程である。駈歩を出すと直線特に中央道路では中間を過ぎるとそのまま襲歩に近くなり馬格が小さいだけに馬体の動きが直に伝わり時に鐙がはずれそうなこともある。休み中障碍は一個も飛ばず只構内を走り回るだけであった。外へは円山まで部班で一度だけいったが部班と馴致不足の為帰路例のチョコチョコした速歩をしてすっかりまいってしまう。首藤兄帰部してより触媒研究所の横で、五、六十㎝の単一もしくは平行を繰り返し飛越する。この時が北翔で障碍らしきものを飛んだ最初である。しかも速歩で歩度が伸びないままにピョコンと飛ばれるので遅れっぱなし。一度として合ったことがない。この頃になって毎年冬になってやる繋靫をおこし暫くの間駈歩を控える。

春

馬場も使えるようになり午前、午後の二被になる。雪解けの時期で道路、馬場ともに増々運動しにくくなり一層水勒騎乗、特に三月中は朝の練習はまるで氷上で行っているようである。この頃酒樽障碍を飛んだが乗り手が沈静を欠く為馬も興奮し飛越時の馬上感覚全然なし。只歩度だけは例年の春と同じく非常に伸び外に出た時と同様の歩度を示す。

四月に入り新部員誕生と共に北翔は二年前とは打って変って練習にも普通に使われる。即ち新馬扱いから一挙に古馬となった訳である。だが障碍飛越に関しては全く適さずむしろ人馬共に害を及ぼすと思われる。六月の東日本大会、チビには二年振りの遠征、指定馬選考大会も程度は非常に高かったと聞くがとにかくゴールインして帰札。続いての北海道自馬大会はバルクールで自然木平行で拒止、この障碍は道大会にも出てきてやはり止まっている。見るからにゴツイやつである。この頃より右駈歩出にくくなり甚だしき時は右手前の輪乗中でも手前を変えてしまう。又背中にイボ状のものが目立つようになる。

夏

七月五日より七帝戦の強化練習が始まり主に北翔に乗るが随伴できず相も変わらず遅れるばかり、おまけに中間にやった経路では逃否、拒止をくらって三不柔順の失権の憂き目を見、すっかり自信を失う。七帝戦後の市民大会、B馬場とバルクールに出場、北翔での初出場である。馬場を北翔で踏むのも初めてであった。

馬場は六歩後退よりの駈歩発進で右駈歩が出てしまい伸長駈歩と右駈歩を出す為B点にきてから内方の拍車を不用意に入れて走られ偶角で回転しきれなくなって外へ飛び出し場外失権、不様な馬場の初陣を飾ってしまった。続くバルクールに出る前に小栗兄より「貸与馬のつもりでいけ」と云われスタートを切る。程度も低く経路も難かしいものではないがほとんどの障碍でつまり、近くから踏み切る。九十㎝の単一を落下し、右回転からのカマボコで反抗し左へもっていかれる。同じ所で前競技の婦人小障碍に出

た仙波さんもやられて注意していたのだが。この右衝への反抗はこれ以後も二年目、一年目の合宿、道大会などで現れ現在も表面には現れないが少々みられる。

背中のイボ、家畜病院ではっきりした原因、病名分らず一応鞍腺と診断され外科手術で取ってしまう以外に根本的な治療はないとのことで手術は道大会後にやることに決める。

道大会前の太秦杯大会ではすごく調子が良く道大会の活躍を思わせたが複合の障碍、中障でいずれも失権し結局国体、学生自馬大の出場権を得られなかったことは障碍がいかに全国大会への道を左右するか、又春から夏へのもっていき方、特に練習使用による最も崩れやすい期間の調教の難しさを目のあたりに見せられた。道大会が終って鞍をはずすと背中の鞍腺から血がにじみ出ていた。

秋ー骨瘤ー空白ー冬

道大会終了後すぐ役員交代、主将となるや否や学生部移管問題馬を減らすこと、試験とまたたく間に九月が終りほとんど北翔に乗らなかった。その間首藤兄が退部した為北翔のチーフとなる。

十月に入り心新たに乗ろうと思った矢先、鞍腺の一番大きなやつが破づれの為ウミをもち十月三日に家畜病院でカサブタを取りウミを出すとその部分は五十円玉大の噴火口のような穴がポッカリあき一週間馬休としその間放馬、引き馬をする。十月十六日の札幌自馬大会に間に合わせるべく十一日より常歩騎乗を始める。女子部員に鞍腺の部分に合わせた小さな座布団をつくってもらいゼッケンの下に置く。馬場を集中的にやり右手前駈歩を強引にやる。結局十六日の札幌自馬大会は僅か一週間しかも雨などのため六鞍の調教期間で臨む。馬場は伸長速歩で歩様を乱し駈歩は心配が逆に出て左手前の伸長より尋常へ移るK点で右手前にかわられてしまう。手綱だけで歩度を縮めようとしたからであろうが今後の騎手の課題の一つである。バルクールには半沢先生が出られ最終右に切られはしたものの優勝された。最後の中障碍、今まで小障碍程度しか経験していないので騎手の方が焦り馬上でガタガタして馬の動きを邪魔していたようだ。才一障碍から止まるのではないかと思われる程つまり非常に近くで踏切ってしまう。才六障碍一m十cmの平行横木で左回転より後で考えれば不用意に何となく向けてしまい右へ二回逃否され三回目に拒止され失権、騎手が障碍に呑まれたのも原因している。

この十日程前より左後肢内側の管部が少し腫れて熱があり触わると痛がるので管骨瘤ではないかと思っていたが札自大が終ってから病院へいく予定にしておいたので札自大終ろや翌日の十七日（月）連れていく。その日のことを飼育ノートより。

十月十七日（月）　十日程前から左後肢管のあたり、骨が一部突出しているのに気が付いた。熱があり十六日の札幌自馬大が終ったら家畜病院へ連れて行く予定であったので今日連れていった。ハレは自馬大が近ずくに連れ目立ってきていたのだが。結果は管骨瘤の傾向ありと小池先生より診断される。傾向ありとは管骨瘤になってしまってはいずまだ骨膜炎の段階であり削蹄のとき内側を少し削ってもらえばよく、ブーローで冷やして一週間は休ませよとのこと。焼烙の必要はなく腱にさわる箇所でもない。一週間後に又こいといわれる。今日よりブーロー湿布開始。

ということでこの後休ませたり使ったりで症状は一進一退を繰り返すうち却って骨瘤は大きくなり役員会で話してから焼烙したのは実に一ケ月後の十一月十五日であった。この日から最低三週間馬休、予定の十二月五日になっても熱引かずあと一週間馬休。

晴れて騎乗許可がおりたのは焼烙後四週間経た十二月十二日であった。一面銀世界と化しチビはすっかり冬毛になっていた。

が喜ぶのはまだ早い。常歩から始めて徐々に運動量を増やしていったものの使用直後には熱が引かず日中も有る日もあった。この頃は長い馬休からの馴致不足のせいで一歩厩舎を離れるや帰りたがって興奮し常歩を持続せず又、速歩もすぐ駈歩になって人間が精神的に参る。骨瘤の再発を恐れたオッカナビックリの練習が続く。この間円山方面へ部班もしくは単騎での野外馴致にいく。

そして完全に騎手の責任である追突をやってしまう。

十二月三十日、右前肢蹄冠部分追突、三日間馬休、円山へ街乗に行き往復速歩二十分余り、初の連続速歩、しかし熱はむしろ常歩のときよりも出なかった。追突部分リバノール湿布、明日は跛行するかも知れない。三日後跛行もせず押さえて痛がらなければ平常練習量に戻して良し。

という訳で又常歩が一週間続き裂蹄の心配なしの診断が下りて速歩を始めたのが年も改った一月十日。繋蹄を恐れてオワンを使用しないでいたのが不覚の元。早速靴下などを利用して繋ぎのサポーターにする。恒久的なサポーターをとゴムでつくるがこれが裏目に出て止め金ですり傷をつくってしまう。

この間構内の馴致に時間を割き一月末にはほぼ落ちついた運動をする。常歩が多いときは大勒を使い速歩の増加とともに水勒で障碍を飛び始めるが繋蹄のため駈歩余りやれず。結局、全道大会終了以来まともな運動をやるのは約四ケ月振り、この間馬休、常歩を繰り返しこれは北翔の甚だしい体力減退を招き騎手も覿面に膝をむいた。

現在ー春遠からじーこれから

昨シーズンを顧み、又部の現状に直接影響することを鑑みて競技に於ては障碍に全力を注ぐ。この為北翔のもっている馬場の調教、能力を充分引き出せないかもしれないが全国大会に出てからも又出る為にも障碍が関門となり、騎手の技術程度からも馬場を伸ばすよりその分だけ障碍に意を向けたい。いかな名馬と言われようとも公式戦の成績欄が空白ではいながらにして伝説の名馬となってしまう。国体、全日本には未出場、自馬大出場二回中完走一回、道大会の正式記録なし。今年で明け十三才、指定馬選考対象の最終年令である。総合馬としてもこの先長く望むのは無理と思われる。現在右の口、馬体が少し硬く又右駈歩もまずいので右の側方運動を多くやっている。水勒で乗っていると大低左駈歩をやり右駈歩で障碍へ向けると直前で必ず左手前に変えてしまう。単一バーは必ず踏切で一歩踏みこみ過ぎてしばしば前肢で落下をする。これらの点を留意して騎手が北翔を御す方向で練習していく。その他の点で以前より変ったのは神経質なチビが大分俗っぽくなりタオルで顔をふかせるようになったことである。

障碍にはよく向かうがその日初めて飛ぶときはどんなに低くても歩度がつまって覗き込むようにして通過する。

そろそろ繋蹄もなおり衰えた体力を取り戻しスタミナをつけるため肺心訓練を始める予定。学生自馬大会が最終にして最大目標でありそのために能力ある馬に負けないようチビを凌ぐ御術を身につけていきたい。

北瓔号

四年目　加藤正昭

北瓔号の昨シーズン中の感想で特に気づいた点について。

昭和四十一年の正月すぎてすぐ、馬場に七頭を放馬、この時蹴られ負傷この後しばらく休ませる。この頃北瓔というといつも怪我をしていてまともに乗れぬという気が部員の中にあったようです。冬期間は特にそうだったのでしょうが、とにかく手入れがうるさくなんとかならぬものかということ。この簡単な疑問は後で考えるところとなる。雪融けのころ一時良かったのですが部班で又もや朝清に蹴られしばらく休む四月に入ってなんとか直り初心者講習会ではもっとも喜こばれていたがどこかの雑誌社から広告の撮影を頼まれその準備中下水溝に落ち負傷又も馬休となる。五月より乗り始め初めての競技会が札幌馬術大会で競馬場にて行なわれ馬場。障碍に出場それと婦人障碍、練習においては部班もしくは各個乗りで普通の運動を行う唯二蹄跡はほとんどやらず又駈歩も肢の方を見ながら行う。障碍飛越も部班で行う程度とし大きなものなどは全く練習せず。ドラムの通過を少しいやがる懸念があったが十分にせぬまま競技に向う。馬場は乱れてしまいどうにもならず中障で十五個で中半にドラム横木がある、これは気をつけなければと誘導にも気を配って思い切り推進したつもりだったがぶつかるようにして拒止、ドラムそのものに恐怖心をいだいていたものと見え三角点からその気配を見せる。二度目は通過するが荒い息使いになったがなんとかゴールする。これからの練習ではドラム・自然木のことを考え又ある程度の持久力を養うことを念頭におく。

今迄にときどき部班運動中に朝清に蹴られるということを防ぐために部班での馬順を朝清の後方とし北飄・北涼・北楊・北瓔・北晟・北翔・朝清・北彗の順とする。

六月の東日本馬術大会には出場せず北海道自馬大会にそなえる。しばしば大勒を用いるが人間の方が安定せず巻き込む事を教えたようなもの、日課は特に定めず部班の運動にほぼ合わせ駈歩はひかえ目とする。もう気温も高くなってきているので左前肢の腫れが著しいときは薄いブーロー氏液もしくは冷水にて湿布する。気休めであったかも知れぬが続ける。北海道自馬大では馬場、中障に出場馬場においては特に駈歩の安定が欠けていた。中障Aは経路複雑で回転むずかしくスピードについてより確実さで行くことにする。練習においてはほとんど十号程度の拍車を用いているがこの時は五十号を用いる。出番は後半で畜大、吉井君の乗る拍雄が満点で帰ってきているがむずかしい回転をやっているので慎重に向かう、この前よりずっとよく出て行く、とにかく邪魔せぬことをモットーに進める後半やや無理な回転もあるがどうにか無過失でゴール。この時はさほど息も乱れず少し前進したかに思われる。

夏休中に市民大会が北大馬場にて行なわれたが出場人馬が少なく大きなものでもなかったがホームグラウンドだったせいか馬場でも落着いていた。しかし落ちつきというのは騎手が馬を掌握できぬからそのようになるのであると思う。

八月中旬それまで北涼に乗ったり北瓔に乗ったりしていたのを北瓔のみとする。太秦先生を記念する大会を初めて行うのでその

準備に忙しかった八月中頃、練習中なんとなく跛行するので中止し傷をしらべるが外傷はなく腫れも熱感もなく疲労とも思われずただ湿布をして様子をみるが夕方にはひどくなり腫れと熱を伴いひどく跛行、蹄丘部にさわるとひどくいたがる左前肢はまったくつけず右だけにたよっている夕方六時過ぎていたが家畜病院へ行き宿直だった井上さんに看てもらうがはっきりわからずペニシリンを打って様子を見る。翌日小池先生が往診に来られ挫拓の場合と蹄骨骨折の場合とがあるとのこと。携帯用X線装置がないのではっきりはしないとのこと。ところが三日目の朝蹄丘部がぬるっとしてナイフで切ったような蹄がある。すぐに報告をして処置を聞く夕方には更に傷口が大きくなり膿がどんどん出る跛行は軽いものになり、ようやく快方に向い人馬とも緊張がほぐれるがフレグモーネになったようでもあり化膿止の薬をのませる。一週間もするとほとんど全快したが傷口だけがパックリと口をあけていた。北瑛に親密さを特に感じたのはこの時であった。ところが裸蹄にしておいたので獣医の支持で装蹄してもらい手入れをして蹄油を塗ろうとしたら今度は左後肢にさわるのを極端にいやがる。この傷が峠をこしてから彼女も僕になれおとなしくなりめったにけるようなことはしないのだがこの時は触れるのをいやがる。しかしこの時はあまり気にしなかったが、しばらくしてもやはりおかしく跛行する、蹄鉄が原因かも知れぬとのこと。又休ませ様子を見るが道大会を十日後にひかえた頃ようやく騎乗、二、三日は逍遥騎乗程度その後で速歩をおりませてやってみる運動は単純なことばかり障碍はほとんどやらずに道大会に向かう。

雨のひどい日で競技の進行が危ぶまれ準備運動のころあいがよくつかめずあせるが複合の馬場より開始、北瑛の場合今日の出場種目が多いのでそのことも考えねばならない。準備運動中駈歩で一度ぐっとひっかかってきたので強く推進して受けなおそうとしたがダメなので停止からやっていると呼び出しベルが鳴り乱れたまま入場運動が不正確で人間の気持もしっくりせずにいて後退より駈歩発進のところで反抗的になり気をとられていたら前の方に注意が行かずラインを越してしまう。いくら雨のためめがねがずりおちて見えなかったとは言不注意であった。この障碍は馴致もあると思いオープンで参加する。小障では村井君がバラージュに残り三位入賞す。中障で最も心配だったのが垂直H一二〇cmのバーである。スタートしたのは雨上りの西の空のきれまに夕焼けが映えている頃でした。たのむぞ北瑛よ。元気よく出てくれたが才一から力のない飛越、才二、才三の垂直バー。これを前肢にて落とす、これで決ったゆっくり行こう北瑛よこの時空も急に暗くなったように感じたのは気のせいだったろうか。競技での疲労について検討する必要がある。一週間休ませたら後肢もよくなり練習に参加できるようになる。手入れの時にけったりかんだりする時に徹底的にしかるようにする唯ほめることを忘れてはいけないが、そしてできるだけしかる回数をへらして行かねばならない。

練習中にしっかり歩度を伸ばすことを忘れていた、それが表われたのがその次の競技会である。馬場で又ひどい失敗をして中障の準備運動をやるが前に出て行かないそして試越用の八十cm位のバーでピタリと止まった、この時顔が青くなった感じを今でもおぼえている。やはり競技中H一二〇cmの三段横木を二回止ってしまう。午後の出場はまようがやってみる。時間は短かかったが準備運動はガリッとやるとやはり前に出るようになる結果はヤマトールとバラージュをやったが午前中と異りとにかく前に出るよう

になった。この時の反省は多いに役に立つ所である。

王座出発までの間も特別な事はやらず唯各個乗りを多くしてもらい基礎を行う。大阪行きの貨車には4頭乗るが北瑛の輸送中の事故等を考え僕も上乗りすることにきめる。卒論の準備もあり先生に話をするのも気がとがめたが勇気を起こして許可を求める。貨車積の注意として以前に失敗した話を聞いてまず飼樋を膝にぶつけないようにする、この為前脾部にプロテクターをつける。（飼樋のつり方を工夫することによりこれは必要なかった。）次に下痢にならぬように、これには家畜病院より胃薬をもらい飼付にまぜてのませ又、青草・乾草を多く与えて濃厚物は極小量とする（燕麦一日一ℓ、ふすま一日三ℓ）。これはうまく行き貨車の中では一度も下痢などせずにする。四肢についてこれは肢巻を巻いて必要あらば湿布するつもりであったがかえってむれてしまうのですぐとってマッサージをする程度であったが大阪の和泉府中駅より会場まで約四十分ほどひき馬をしたらひいてしまった。立ち腫れのみならばそれほど心配はいらぬもののようだ。競技までの十日間位はまず十分休ませ徐々に乗る障碍はせいぜいドラム程度のものとしたが時間的にもある余裕をもって少し大き目のものをとぶことも必要と思われた。当日まず午前中に馬場これは比較的おちついていたなと思っていたが審査の主眼は正確さは当然ながら前進気勢にあった。飼付を早目にし午後の標準中障碍にこれはバラージュを行なわず同位の場合時間により順位を定めるのである。準備運動に時間が十分あり楽にやっていて出場の四、五人前になった頃きらりと輝いてとんだものがある、すぐとびおりてみると落鉄、愕然としたがすぐ審査員席に行き事情を話したところ最後にまわすとのこと。装蹄師不在のため大阪府大の人が打ってくれる彼らは皆簡単な装蹄道具を持っていて落鉄なら一時に自分達でうつとのこと。北瑛は意味がわからずきょとんとしている肢になじませるためにひき馬したが人間の方にまったく力が出ない。村井君がすぐに替ってくれたがこの時廐舎に入れ鞍をはずしてやった方がよかったのであろう事実人間の方もそうだったから。四時過ぎにいよいよ入場十五障碍、十八飛越今迄の中では最も多い前半は平凡なものが多くなんなく進んだが中半より疲れがでて力がなくなり乾壕バーH一一〇cmW一二〇cmでのめって落下し次の三段横木でも落下、あおるようにして走り出すそして十四のトリプルはなんなく通ったが最終のレンガ横木H一二〇cmW一〇〇cmこれを右にきるようにして止まる。気をとりなおし思いきって向けるがこれも同様になる。最後は反対側に回って拍車を思っきり使ってぶつけたがやはり彼女は止ってしまった。みじめな気持。側にあった小さいのを一つとんで帰ったがとびおりて首を撫でると彼女は頬をすりよせてきた。なんとも愛らしい奴この時ほど己の技術の未熟さを知らされたときはない。村井君のバツの悪そうな顔を見て何も言えない僕であった。大阪までやってきて得たのは失権ということであったが自分自身には非常に得る所があった。それは馬への愛情ということそして彼女（北瑛）を深く知り友達になれたことその他様々な事がある。学校のこともあり後を村井君にたのんですぐすぐと札幌に戻る。

彼女が帰ってまもなく雪が積もり構内で騎乗するようになり細かいことはなかなかできなくなる。冬期間行っている主なる運動は基礎運動（勿論障碍飛越を含む）でありその素直さをますます伸ばしできればもう少し強くさせることである。唯この点について村井君にもよく話をするのですが馬は生き物けっして感情を無

視してはならない。

長々と書きつづってきましたがこれが僕の書いた騎乗日記（或いは調教日誌）の一部であり概要でもあります。唯肝心の点つまり根本方針等につきましては今一層の修業と勉強とが必要で今ここに書くことはできかねます。もしお聞きになりたければどうぞおいで下さい。

終りにあたって特にこの一年間北瓔号に感謝するのは無論でありますが、いろいろと無理なことを通して下さった部員諸兄と御指導下さった諸先輩特に八木兄山村兄に心から感謝いたします。

最後に、彼女が益々皆に可愛がられ活躍することを祈っております。

北晨号

三年目　山本紘明

北晨号と自分

入部当初、北晨号は小栗兄のもとで新馬調教を受けていた。イタリー式のイの字も知らなかった自分にはそれは他の馬達と同じ〃馬であったのを覚えている。只少々暴れん坊で手入れをてこずらせるが故に大いに嫌な〃馬であった。そして身の安全を守るために（？）余程のことがないかぎり近ずかぬことにしていたようである。その頃の自分には朝清が居り、北飄が居た。当時夢多き少年であった自分は、北飄号での将来の活躍を夢見、又、健気にも、誠に健気にも、若しそれが許されぬならば、朝清号と四年間を暮そうと思っていたのである。

しかし、余りにヒョンなことから、何故にそうなったか自分は知らない、とにかくヒョンなことからイタリー式に興味を覚え、北晨号に興味を覚えたのである。何時の頃かも定かでない。興味を覚えたことは覚えたものの明確な意識はなかった。むしろ、その時にやっと北晨号は他の馬と同じに置いてやってきたのである。それまでは遠い遠い所にいて自分には見えなかった。いつのまにか二年生になっていた。この頃はすでに北晨号も度々手入れをし、思っていた程憎らしい馬でもなくむしろ可愛くさえ思えるようになっていた。そして、イタリー式を本のみでなく実地にこの馬で習いたいという欲求が強くなり、小栗兄に習いはじめたのがこの馬とのそもそものなれそめなのである。それから後は小栗兄の帰省や遠征の際に預かったりし、益々北晨号の魅力に取りつかれ、調教助手として自ら志望するのに何らちゅうちょをも要することがないまでになったのである。解して計りがたきは人の心と秋の空である。

現在までの北晨号

昨年、六月頃、それまでまだ衡に重るとはいうものの、先ず順調に仕上ってきた北晨に膠着癖が生じた。がその後、普段の練習に於いては、別に支障もなく、この頃前に出ることを先ず念頭においてきた北晨号は、停止の際衡に重ってくることが解決されねばならず停止、後退、更に左右の柔軟性を求めての、山形乗り、半巻き、旋回を繰返した。無論、障碍通過の繰返しは忘れずに行なった。そして合宿である。この時に前記の膠着が再度、表面化した。その膠着には、特殊性があった。決して経路走行中の障碍をきらっての膠着ではなく、それは必ず準備馬場のある辺での回

転時に生ずるものであった。とりわけ神経質なそして群集癖の強い彼女であったが故により強力な脚とそしてそれに対応する挙の関連がこのことを解決してくれるものと思いその解決に馴致を看過したことは責められてよいと思う。障碍飛越の際ばかりでなく、馴致の効用は、北晨号について、かくなる場合にも表われてくると信ずるが故である。よしんば、その効果がさほど期待に値するものではないとしても、当然やっておかなければならなかったことなのである。ともあれその後も殆んど馬場から離れることのない練習を続けた結果は必ずしも良かったとは言い切れない。騎手の脚力の不足そして衡との連関が悪かったせいであろう。北晨号は益々口が固くなってきた。加えて自分がその頃全く自信を失くし、従って練習も又惰性的に行なわれる日が続いたこともあって、北晨号は口が硬く、脚に反抗し、拍車にも反抗し、前進気勢を喪失し、下級生の練習には全く適しないという最悪の状態に陥いったのである。

ここに至っては、もはや応急修理だとか、矯正だとかは問題にならず、又丁度よいことにシーズンも終り、長い冬が始まろうとしていたこともあって始めからやり直してみようという気になった。先ず馴致と肺心基礎訓練（内臓強化、筋肉強化）、前進気勢の養成、単騎による行動で人間への注意力（馬の）を養成する。といった何をおいてもまず必要とされるべき目標をもち、頻繁に外へ出はじめたのである。その行動範囲も、構内から北大周辺、更に円山公園、幌見峠、その進歩の度合により、四丁目、すすきのといった繁華街をも予定したが、未だ市電、バス、大型トラックなどに相当な恐怖を示す現在実現はしていない。この運動の際、馬が要求されることは騎手が要求した歩度での運動、歩度の伸縮、物件に対する騎手への信頼と勇気であった。最近は以上のことを持続しながら停止、山形乗り、障碍通過を交へ、更に、不得意であった右駆足、並びに右手前の運動を相当の時間課している。

今後の北晨号

積雪期間一杯は、馬場使用の不可能もあって直線運動、肺心、馴致に全力を傾むけるつもりである。それと共に自分は無論のこと、下級生の練習は騎坐ということに重点を置きたいと考えている。従って持続駈歩、障碍飛越が練習の中心となるであろう。無論徐々に、人間の進度と馬の進度に合わせて、個々の運動を課していくつもりである。目指すところ総合馬であり、誰にも乗りやすく、従順な馬である。従って、それだけに土台は堅固でなければならぬ。先を急ぐ余りに土台を又作る過程をおろそかにしてはならない。そう自分に言いきかせながら、今後やっていくつもりである。基本的な態度に於て試合はあくまで、その過程であることを自戒しながら、慎重にその時に参加の是非が決定さるべきであると考える。無理、困難、束縛を排することが全面的に通用されねばならぬ、とにかく、一歩一歩の努力が必ずや良い結果を生むものと信じて今後やってゆきたい。

総合馬として、課せられる運動中、北晨号として先ず目標とされる所は、持久力審査、余力審査である。そして、現在これらを完走する、完走しえる馬ということに全力を傾けて毎日の練習を繰り返しているのである。しかしながら、総合馬には調教審査が課され、従って新国際総合馬場を踏まねばならぬ。口のうるさい北晨号にとってとりわけ馬場運動は一つの大きな課題となっている。とりあえずB馬場を目標として随時馬場運動課目を[illegible]ていくつ

もりであるが、決して先を急ぐことなく、自分の技倆によりなしうる所までやるつもりでいる。北晨号にとっても自分にとっても馬術、総合馬術という塔の頂きは遙かに彼方である。否作ろうとする塔、理想とする塔の頂きは高い。

北　彗　号

五年目　山村　勝

まとまりのない文であるが、日誌の抜き書きから、北彗の責任者として一応報告としたい。

一月二十三日、十三条で急に走り出す、中央道路でもトラックとすれ違う時むりをしすぎたようだ。最近慎重さが足りない。馬場は凹凸が多くて駈歩やれず。今日はうまくゆかず、去年から全然進歩していないのではないかと不安だ。

・脚の使い方・反抗し、ハネるようではまだ覚つかない。推進と回転の時の脚。

・外方の仰え・回転がまたうまくゆかないので補助手段として用いる。

・緊張・これが判らず、暗中模索だがまず飛越の邪魔だけはしないよう。

以上の事がらを考えた。

二月一日、右回転、右手前を多くしているが果して馬にとって負担にならないだろうか。下が硬く滑るがよく動く。しかしいつも後半になると脚に鈍くなる。人間もバテて来て怠慢になるのではないか、もっと強力な脚で推進せねばならない。

二月十三日、滑る。鉄さいをやはり尖ったのをつけてやろうかと思う。岩坪氏に乗って戴く。ようやく飛越馬らしい飛越をするようになったとの事、うれしかった。しかしまだ脚に不従順との事である。最近だいぶ前に出るようになったと思っていたのだが、まだだめなんだなあ。

この頃ようやくブルで除雪してもらい、馬場が使えるようになったがまだ狭く思うように運動はできない。三月に入り下は硬い雪と泥んこの状態。重くなって来たような気がしてならない。下が悪いせいもあるのかも知れない。

三月十一日　昨日鉄が割れたので、前肢に無理がかかったのではないかと思い、気のせいかはれているようだが跛行はしない。彼は硬い雪の上は苦手のようだ。右手前の駈歩を輪乗りで行う。大分続くようになった。

三月十三日　部班で準備運動を行ったがよく前に出て他の馬が遅く感じられる。障碍前で脚を少々強く使うとすぐ駈歩になってしまう。これをおさえようとして踏切が合わなくなる。

四月十七日　雪がなくなったせいか歩度がよく伸びる。しかし、岩坪氏にはまだ脚が足りないと指摘される。駈歩で右輪乗をより多くした、左脚をより多く使わなければいけないのだが後半脚が弱くなるとすぐ歩度がつまる。

四月二十日　初めて枕木固定を飛んだが障碍上に着地して又跳下りるのには驚いた。あとで何と愉快な奴だ、と彗の顔をみたが、彼は真面目らしい。

なるべく部班に入るようにする。大分他の馬に向ってゆくこともなくなった。

四月二十四日　喉はカラカラに乾き、心臓はドキドキ、自分の

初めての試合の時を想い出し、それよりひどい緊張ぶりでこんなにアガったのも久しぶりだと思った。部内の記録会であり、小障碍なのだから満点でこれるだろうしそれが当然であるが、それがかえって重荷となったのかも知れない。しかし自分が調教した馬で初めての試合に臨むこの緊張感は・・・。それだけ当然ながら、減点〇でゴールした後、種々のこまかい点に不満足の点もあるが一つの段階がうまくいった喜びは大きい。しかし彗はケロリとしてニンジンにかぶりつく、馬は試合で上がるなどという事はないのかな、などと考える。人の気も知らずに・・・。しかしむしろデビューは遅すぎたのだ、これからの中障碍への壁がものすごく大きくなって見えるようだ。口向き、脚えの従順性、飛越力などあらゆる点がよくならなければならないだろう。

その後鞍傷が思うように良くならず、休ませたが思わしくない。そして対酪農大定期戦、強化練習、部内競技会等で経路を回ったが、しかしその間必ずしも満足できる事ばかりではない。部内競技会の準備運動で一度切られたのは痛かった。全く人間の油断であるが、まだ右回転のまずさは否めない。そして特に速歩で頭頸が高く、これが逃避の原因となるのだろうが、これも鞍傷のせいではないか、などと考える。こうなると、どうも遠慮しがちで決断をもって扶助が出来なくなるのでこれも原因の一つであろう。

五月二十二日　札幌馬術大会

小障碍では満点だったが、人間が夢中になって回転に手綱だけに頼ってしまうようだ。これを八木先輩に指摘された。いつも練習のときにはやれるのだが・・・。それで一応申し込んだバルクールではあるが、駄目だったら潔く棄権しようと思っていたので迷ったが、思い切ってやって見ることにした。バルクールは本来ならば時間で争うのがその競技の目的だが、中障Bより障碍の高さが低いという事で、練習のつもりで出ることにした。勿論時間などを気にせずに障碍減点を零にする事にのみ専念しようとした。しかし径路をみるとどうしても大きく回って向け直す余裕のない所が五ヶ所あり、果して斜めに向けて飛ぶだろうかと懸念した。小障碍の時より鎧を一穴つめた。今更こんな事にこだわるのかと自分で考えながら・・・。七番のドラム平行の前でつまった。これは駄目かなと弱気になったが彗はその時、つまりながらも前肢をあげてくれていた。もう一度十四番でこれを飛越する。止られてはたまらないとあせったのが悪かった。体勢は遅れ、そしてすぐ目の前に三段がある。夢中だった。その時の写真を見て冷汗が出た。結果は一落下、一〇九秒　ゴール後、もうこんな無理はすまいと考えた。彗は落着いて良く飛んでくれた。高くなると慣れないためにためらうのだろう。この時、脚が必要なのだ。回転を心掛けて脚でやったせいか無理な回転もせず、飛び終った後、すぐ速歩にして回転に入れた。落下は残念だった。人間が悪いのだから。すまないと思う。

結果は以外だった。北晟、北瑛をも敗り、勝ってしまった。全く無欲なのが良かったのだろう。考えてもいなかったラッキーだった。聞いた瞬間信じられなかったが本当だと判った時の嬉しさ。

五年目にして始めて自馬の名前の入った賞状を手にした時、いかに大きな大会での勝利よりも小さいながらも自馬の大会でのそれの方が大きいかを、又自馬というものの良さを感じた。彗は相変らずトボケた顔をして飼樋を漁っていた。あいつはもっと遠大なものを望んでいるのか。時々頸を上げ、耳を立ててじっと遠くを見つめていた。

その後、破傷にも拘らず試合に出たりして無理をかけたと思い逍遙を多くした。四肢には充分気を使っていたつもりだったが。

六月十一日　右前肢骨瘤に気付いた。とうとうやってしまった。蹄鉄のせいではないかと考えられるがそれにしても…。獣医で診断の上、ブーロー氏湿布を続けたが思わしくない。

六月二十六日蹄鉄をはずす。そして七月六日焼烙。獣医の設備が整わず、大分時間を喰ったのが惜しまれる。七月二十一日常歩騎乗。七月三十一日小池先生の診断で許可が下りたので装蹄。常歩でも、気のせいか跛行するような気がしてしようがない。

八月三日　昨日から速歩を入れ始めた。岩坪氏に騎乗して戴く。跛行さえなければ駈歩許可との事。

八月十二日　馬場悪くそのせいか重い。一年生を乗せ蹄跡上に横木を置き通過させたが、何となくまだ肢をかばっているような気がする。果してもう完全になおったのだろうか？。右回転が不得手の為これを極端に多くしたのが右前肢の故障となったように思え、右前肢の負担を考えるとこれを余りやれない。道大会が迫ったが極力これを考えまいと努める。そして外を歩き回るようにした。その後少しずつ飛越を入れて行った。

八月二十八日　太奏杯大会

小障碍は減点零。漸く以前の調子に戻りつつあるような気がして嬉しい。他人にはもう小障はやめろといわれるがまだまだ練習の意味で出たい。初めてB馬場に出場する。X点を示してある石灰を見て横に避けるのには驚いた。後退は重り、各点のけじめをつけるのがまずかった。今のままでもっとうまくやれたのではないだろうか。右駈歩、反対駈歩は何とかできたが短縮がうまくいかない。まだまだ先は遠い。障碍の方は減点零。いつも試合では準備運動が不足しているようだ。何故なら後の方が調子が良くなってくる。今までいつも初め小障に出て、その欠点を直すようにして中障に臨んだが、いつもこうはいくまい。一発勝負なのだ。

九月九日　いよいよ明日だ。経路を見て愕然とする。やはり中障は大きい。百三十、百二十がズラリとある。不安がつのる。彗はこのコースを乗り切ってくれるだろうか。彼に頼るほかない。

九月十日　北海道馬術大会

興奮して駈歩になろうとするので困った。振返って見て、準備運動で三つの失敗をした。初めから、自分が乗って競馬場に来るまで沈静させなかったのが一つの失敗だ。次に興奮して引っかかった時挙で引いてしまった事。馬添えが悪いのだが、これを先入観として持ち過ぎた為他の馬が近ずくと固くなり沈静させえなかったのが第二。最後に伸暢の足りなかった事。これが複合の惨めな結果だ。勿論調教過程における不充分さはあるだろうが、若い新馬には充分な沈静の下での充分な準備運動が必要だ。馬添えが悪いのならこの対策も考えるべきだった。試合前日までも少し油断した。太奏杯でまあまあの線を行っていたので…。口向がまだまだ長くなっていない事を痛感した。そしてとうとう複合の障碍で失権した。これは我ながら情なかった。種々考えられる事はある。しかし全て調教者の責任だ。慰めになるのは中障碍が一落下だけであった。結果は六位であった。最大の目標がこんな結果に終った後、しばらくボンヤリしていた。彗にただ申し分けなかった。むしろ手術の故障或はその他の難関を乗り越えてここまで来た事に感謝すべきなのかも知れない。

十月一日　口向がまだだめだ。自分の努力不足からくる。逃れようのないあせりだけが残る。

十月十六日　札幌馬術大会

高倉がバルクールに出た後で中障碍に出るつもりで準備運動中、三回逃避された。これは大変だと思い迷ったが、結局棄権。手入の時左後肢の蹄に釘がささっていた。跛行せず。気がつかなかった。やめて良かった。何が棄権を決断させたのか今もって判らない。

十一月九日　テレビで王決を観戦。選抜中障のバラージュに百六十が二つあった。うかうかしてはおれない。新聞ではシーザーライトが優勝、拍麿が二位を報じていた。大分先を越されたがあせるな。去年のようにもう一度順致をやり直すつもりで、競馬場或いは幌見峠へ出かける。雪の中でも比較的良く動く。

雪で滑る所もどんどん前に出る。去年の冬に比べ小さいながらやはり進歩はあるものだなあと感じた。そして冬季、順致不足を補う事が必要だ。飛越馬の半分は順致だという事を最近改めて感じた。

北彗については、主観的なものかも知れないが、個性の強い馬でありこれを、乗る人は良く知って欲しい。良い面悪い面とも。そして馬に障碍を嫌わせない事が最も主要であろう。それに加えて、これからは扶助調教をもっと進めなければならない。

恋　人

四年目　田　中　倬

ラン／＼ラン／＼楽しいなあ
風がびゅう／＼吹いてます
あなたは私の恋人よ
あなたは単純性脳膜炎
・・・・・・・・・・
ラン／＼ラン／＼楽しいなあ
ウソよ、本当は悲しい
風がびゅう／＼吹いてます
（嵐のため狂った一少女より）

×　×

今や馬とも別れなければならぬ。四季それぞれ趣を異にするポプラとも、又手稲の山とも。僕の学生時代は馬に明け馬に暮れた。悔いはない。禁煙の合宿、吹雪の中での練習、馬場をチョロチョロ流れる楽しい雪溶けの水、異様な嗅気を発するベット、×××君の顔の如きすゝだらけの部室、継ぎはぎだらけのボロ厩舎、アホらしいやらバカらしいやらのアルバイト等々思い出はつきない……と書くべきところ、僕はこう書けない。まだ卒業しないから。決して数学的計算が合わないからじゃなくて医学部だから。

×　×

最初は部員との継りによって部生活を送ってきたのだが、次第に部とか部員とより馬との継りが深くなってきたようだ。その頃退部を考えた。部の雰囲気が面白くないから、運営がまずいから、練習がつまらないから、作業があるから、部にとられる時間が多過ぎるから、他に興味のあることが出来たから、何となくとか、彼女がやめなさいと言うからとか　理由はいろ／＼あるが、要するに飽きがきたのだ。その時救ってくれたのが馬だった。僕の場合馬というより馬術だった。もし僕がもう少し強い人間ならばやめていたであろう。又もう少し弱い人間ならばそれでもやはりや

めていたであろう。

× ×

北飄号、この一年間苦しめられてきた憎っくき馬、可愛い馬、鈍い馬、伊式と大勒方式とを調教されてきたやっかいな馬。

彼女との思い出は数々あるが、あの日のことが強烈だ。六月二十日、北海道自馬大会、於競馬場馬場、それまで半年ばかり乗ってきたにもかかわらず相変らず得たいの知れない、特徴のつかめない、何がなんだかわからない馬だった。この試合の少し前、やはり試合があったのだが、その時はわずか三個飛越したのみで失権していた。この試合に勝てる自信はゼロ。ゴールできるかどうかも奇しいものだった。出場を取りやめようかとも迷い岩坪氏にも相談した。「もしこの試合に出ないのならその後の試合も全て放棄しなければならない。二年か三年、君一人で乗って調教できるのであれば出ない方がよい。それが不可能だったら出てみろ」。

試合に勝つ負ける、馬をこわす造る、そんなことは一切自分の頭から棄て去った。とに角出て、何かしら把むのだ。余りにも無茶苦茶！

試合当日、口はから〳〵、×兄の「しっかりやれよ」。という言葉が耳の遠くに聞える。試合場に入った。後は自分と馬のみ。こゝで僕は驚ろいた。準備馬場であれ程カッカッとしていた彼女が以外に落ち着いている。こゝで幸いにも僕は一息入れることが出来た。ゴタ〳〵馬のいたところから急に彼女一人になりオヤッと思ったのではなかろうか。才一障碍、速歩通過、まだ落ち着いている。右に鋭角回転してすぐ才二障碍、単一、落下！後で聞いた話しだが、誰かさんがその時、僕の実に残念そうなため息を聞いたという。冗談じゃない、その時の僕にはそんな余裕なんて全なかった。その後我ながら順調に行ったのだが、才七障碍トリプルにおいて、三個目で右の手綱がぱらりと挙から離れた。完全に遅れたためだ。真直ぐ行けば準備馬場に出てしまう。馬場はバー、馬場柵などでこしらえてある。これで一貫の終りか・・・・と考える余裕もなかったが、とに角右の手綱を引きに引いた。馬場柵一メートル手前、ようやく彼女は向きを変えてくれた。今から思ってもゾッとする。その後は例の調子ですっとんで・・・ゴール！

何がなんだかわからない。喜んでいゝのか悲しんでいゝのか。これが彼女に乗ってからの最初のゴール。疲れた。

結果は一反抗二落下、ある人は良かったと言い、ある人は残念だったと言う。が問題はそんなことではない。こんないいかげんな気持ちで出てしまい、部員の皆にすまないと思い、それ以上に彼女にすまないと思う。が何かを把むことはできた。その頃からだったと思う。彼女に乗っていても調教しているのだと思えるようになったのは。

それにしてもその後の試合はおそ末でしたね。

× ×

現在の北飄

出来る限り馬に自由を与えながら、かつ人間の扶助に従順に運動するのが最良だと思うのですが、今の彼女に自由を与え過ぎたのでは〃誰でも御する〃ことが出来なくなってしまう。徹底的な柔軟運動を行い、脚に対する従順性を養うと共に、十分なる後躯の踏み込み、又肋、顎を柔くする。又、障碍を少し恐れているようなので低障碍飛越を繰り返す。〃まず乗り易い馬〃〃誰が乗ってもひっかけない、落ち着いて障碍に向う馬〃その後に〃試合に

勝てる馬〃程度は低いかも知れないがこれがこの馬の調教の最大の課題であり、早道であると確信しています。

◇　◇

「離厩馬を惜しむ」

四十一年十月二十六日に北駒号（ジュピター）四十二年一月十九日に朝清・北涼・北楊の四頭が離厩致しました。彼等に皆でよせ書きを送ります。

朝清号（中半血、騙、栗毛、生年不詳）

僕の最とも恐れ、又尊敬した君。（四年目加藤）

馬ではなかったのです、彼は人間以上だったのです（三年目降旗）

老兵は死なず、只去りゆくのみ、お前も俺も（五年目　近藤）

キヨ、ごめんよ（三年目　阿部）

絶句!!（三年目五十嵐）

いろいろお世話になりました（二年目カツヲ）

別れる時は恐怖心もなかったジョー（一年目　岡田）

あの日に限っておとなしかったなあ（一年目　篠崎）

清！　おまえにケラれて良かったよ、さようなら（二年目　石田）

その律気者の大男の後姿に、五〇等、今、厚い（一年目　本田）

手を上げる

馬術部そのもの、馬術部の主、その君ももう（三年目　山本）

いない（二年目カクタ）

偉大なるかな（二年目　村井）

お前と洒がのめたらなあ

いつも悟り切った表情で、でも寂しそうでした（一年目　鍛）

清く、深く、広く、空虚……胃ぶくろまで　A・H

北涼号（三十五年二月入厩・中半血・牝・栗毛・二十七年四月生）

その涼しげな瞳と豊かな栗毛を僕は忘れません（三年目　阿部）

ああ……やだやだ（二年目　村井）

初めて馬に乗って、初めてひっかけられた（一年目　山下）

二度と馬になるな（一年目　篠崎）

己れのあさはかさを感じさせられましたすみません（四年目M・K）

デコと一諸に草を食んでいるグレースが目に浮かぶ（二年目　遠藤）

馬にもあんな美人がいたんだっけ（一年目佐々木）

金色は焼きついた。私の網膜に（三年目　降旗）

打ち明けないまにいっちゃった（名なしの権兵衛）

人馬二体だったけど、よくいっしょに走ったね（二年目　春田）

君と僕と子供の三人でよくポプラ並木を散歩したっけ（三年目五十嵐）

麗しきばあさん！俺が馬なら惚れていたろうに（本　田）

得も云われず　柔かき反衝、心地良さ

お前は去った、だがお前の姿は愛児に残っておるぞ（H・Y）

北　楊　号（中半血・牝・鹿毛・昭二十八年四月生）

春はポプラ、夏の勇気、秋は風、冬の孤独。そして北楊と僕
（一年目　浜野）

大好な北楊、かじってもあまり痛くしませんでした。
（一年目　高橋）

はねられて、落っこちて見たらきょとんとしていました。
（M・I）

やさしくて、親しみやすくってかわいい奴だった（三年目降旗）

しょっちゅう落されたけどやっぱり好きだった（一年目黄川田）

あの舌なめずり・・・・・思い出すねえ
（一年目　本田）

人生いろいろあらあな
（二年目カツオ）

親しみが湧いてきたころにお別れとなったか
（一年目　岡田）

「日高の高原から南十字星が見えたよ」「うそだろう」「でもほんとうだったよ・・・・」って君は言ったっけ
（二年目　村井）

君と歩いたポプラ並木、みどりの草原。今でもそこに君がいる。僕と今も歩いている君、一諸にたわむれた楽しかったあの日、可愛さと別離の悲しさを知ったあの日。疑いを知らぬ澄んだ瞳、そばにいる僕の心を豊かにしてくれた僕の君。忘れない、いつまでも
（二年目　浜岡）

北　駒　号（ジュピター、昭四十一年入厩）

ジュピターは一番大きくて　一番かみついて　一番けった馬
（H・E）

サラブレッドのへんりんを見せられた
（三年目　A・I）

私には彼は幻影でした
（三年目　降旗）

おっかなかったけど　かわいかったなあ
（一年目佐々木）

へんな馬
（二年目　春田）

人なつっこい瞳をしていた
（一年目　高橋）

愛し合えないままに別れたのよ
（本　田）

北駒は去った。それは馬場馬術の葬送曲であった（近　藤）

昔の栄誉を想わせる勇姿、短かい間の我等のあこがれ、不遇の名馬、さよなら幻の馬
（H・H）

「神は死んだ」って言葉があったけど、でもジュピター（神）は永遠に生きると信じてる
（H・Y）

朝清のこと

二年目　田中　力

老兵は死なず　唯去り逝くのみ
少年は思う　唯いにしえのこと　（力太）

朝清での出場が小生にとって出場競技のうちのほとんどであった。一年目の秋の部内競技会。二年目の春の部内競技会。夏季合宿あけ対抗試合。そして道大の小障に才四障碍で出場。失権ばかりであったが、これらは皆、朝清を駆っての出場であった。そして最後の機会は十月十六日の札幌自馬大会。このときはB馬場に出場。小生には初めて踏むB馬場であり、彼には最後のそれである。一週間ぐらい前に出場が決って以来、上級生の乗る北飄や北翔を向うにまわして、本気になって朝清に勝たせてやりたいと考えながら練習をした。それで他の馬と互角に勝負するには少しでも前進気勢をつけることだと考え、毎日水勒手綱で乗り、出来れば当日も水勒で出場するつもりだった。そして年のことを考えて運動量をなるべく減らし、勉めて外に出るようにした。これは今考えると全く当然と思われることだが、当時は一人で迷って決めたことでいつも不安だった。それでも日毎に清が元気になってゆくような気がして、馬繋場から馬場まで乗ってゆくとき何ともいいしれぬ喜びが湧いてくるのだった。

当日は先輩の指示に従って、練習のつもりで大勒を使った。準備運動は全て自分の意志通りにやった。清は全く素直に動いてくれた。「馬を信じるのだ。楽に楽に。」と自分に言い聞せて何とか胸の動悸を鎮めた。北飄と北翔が反対駈歩に失敗したのを見て、すっかり自信がついた。いよいよ出番だ。「よし行こう。」と声を出して後退から駈歩発進。皆の目が我々に注がれている。入口に向う。女子部員の一人が「しっかり」といってくれた。「点数はどうでも良い。楽しくやろう。」そう心でつぶやいた。A点の門番の一年目の部員の「お願いします」という声が聞えた。うれしかった。入場。何が何だか分らないうちに終った。といったら嘘になる。めずらしく落ちついていた。自分のやっている運動が批判出来た。そして概ね良好だと思いながら退場した。結果は七人中（一人失権）才五位。五十四点。

でもとにかく終った。結果は良くなかったが自分としては最大限努力したつもりだった。清の首を何度もたたいた。しかしあれだけの点しかもらえなかったのが清にすまなく思えた。

以上は他の人から見たら、さぞかしおおげさに移るでしょう。未熟な騎手が小さな競技会に出て負けた記録なのですから。でも願わくば僕のその時の感動を理解されんことを。十何年間の競技生活を送りその背中に何十人何百人の人を乗せて来たことか。その名馬朝清の最後の馬場競技。それに、その馬で最初に踏むB馬場。競技そのものは幼稚で内容は拙いものだが、自分は何か感動に似たものを経験しました。

朝清号は昭和四十二年一月十九日午後二時O、B、現役に見送られて遠い所へ行きました。聞く所では、一緒に離厩した北涼、北楊のうち北楊は或人のマスコットになっているとか。

北駒号の離厩について

責任者　近藤喜十郎

昨年五月下旬より同年十月二十五日に離厩するまで、北駒号の馬体管理と調教にあたりました。この期間、健康回復に全力をあげましたが、結局治らず、遂に部の財政問題や馬籍の事もあり、一年弱で北大を去る事になってしまいました。後援会の方々が馬場馬術の練習用にと尽力して入厩していただいたのに、部としてその期待に答えれなかった事は残念でなりません。特に私は、昨年希望に満ちて部報に命名由来を書き、今年、離厩報告を又部報に書かねばならないとは全く断腸の思いです。

入厩して初めての冬に腰が悪い為に肢を踏んでしまい、殆ど運動らしき事は出来ませんでした。春になり、馬場が乾いてから若干調子がよくなりましたが、依然として左後肢を引きずり、特に速歩は五分と続けれないありさまでした。六月初旬に十日ばかり思い切って休ませ、肢の腫れが引くのを待ち、下旬になって本格的に行なおうとしました。銜に対して出てゆこうとせず、馬が上に浮き上がってしまい、四月までの運動不足が悔まれました。二日続けて体の調子がよいという日はなく、体力のなさに驚いた次第です。とにかく、どんどん前に歩く事を重点とし、馬場外での逍遥騎乗を重視しました。七月初旬になっても後肢は完全によくならず、一進一退の日が続きました。中央競馬場の獣医の方が見えているので　診てもらう事にしました。獣医の方の話では原因は肢でなく、腰にあるとの事。いろいろの方と相談して、思い切って「針」を打ってもらう事に決定しました。もしこれで治らなかったらあきらめようと思いました。八月五日、ジリジリと真夏の陽の光が照る競馬場で、中山競馬場の上田さんに針を打ってもらい、その後一ケ月間騎乗出来なくなりましたが、問題は乗れる事よりも治ってくれる事です。八月の青々とした草を豊富に喰べさせ、次第に肉付きもよくなってきて、針を打った傷も日に日によくなってゆきました。下級生対象の合宿が終わり、国体予選が始まった時、三十五日ぶりに馬場に出しました。始めの一週間は前とあまり変わらない様でしたが、次第に調子がよくなり、脚を使うと銜を受け前に出てゆくようになりました。しかし速歩をすると翌日必ず後肢が腫れてしまい、踏み込みも極端に悪くなってしまいました。九月二十日に後援会の幹事会が開かれ、北駒号を廃馬にすることに殆ど決定されました。私としては再び騎乗出来るようになってからまだ十日程しかたっていなくてもう少し様子を見たかったのですが財政上の問題もあり、決定に従う事となりました。九月下旬になって驚く程好調となり、特に円運動に於いて、反抗せず内方姿勢をスムーズに取る様になってきました。しかし収縮運動はまだ無理らしく、脚を使ってもはげしく反抗して行なおうとしませんでした。輪乗り運動に重点を置き開閉を時々入れてあばらが柔らかくなる様に努力してみました。左は非常によくなってきましたが、右に対しては反抗気味で内方手綱にかかってくるのが仲々なおりませんでした。以上の様な状態で十月二十三日に離厩式を行ない、二十五日に離厩しました。私は彼に対して何もしてやれなかった事が誠に申し訳ないと思っています。北駒号を一番かわいがりめんどうを見てくれた二年目寺崎君と阿部さんに深く感謝する次第です。終わりに北駒号の入厩の為に尽

力して下さった池田、千葉両先輩を始めとして後援会の方々に御期待にそえなかった事を深くお詫び致します。

亭　北　軒

モ　ツ　ラ

札幌市北16条西4丁目

TEL　(71) 6450

おふくろのあじ

まことや

札幌市北14条西4丁目

TEL　(71) 7494

札幌陸運局認証工場

北大モータース

小野　忠

札幌市北18条西5丁目

TEL (71) 2076

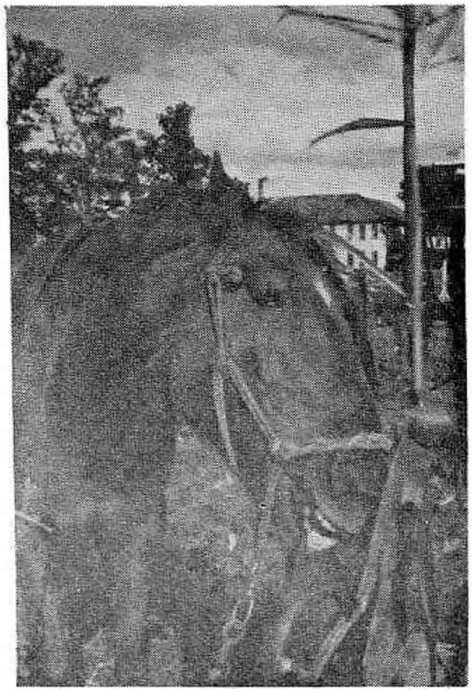
乗馬用ズボン専門店

松田屋

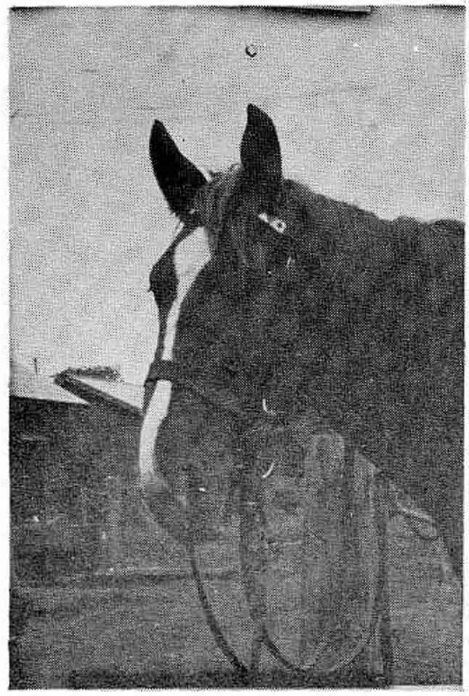
田辺洋服店

札幌市豊平四条六丁目平岸通り

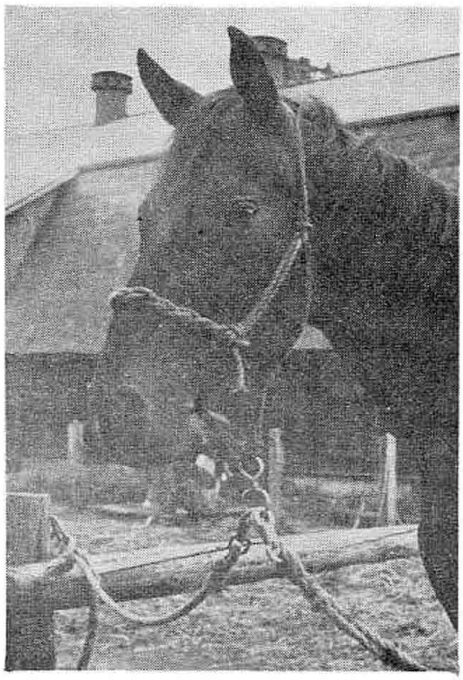
TEL (81) 7341



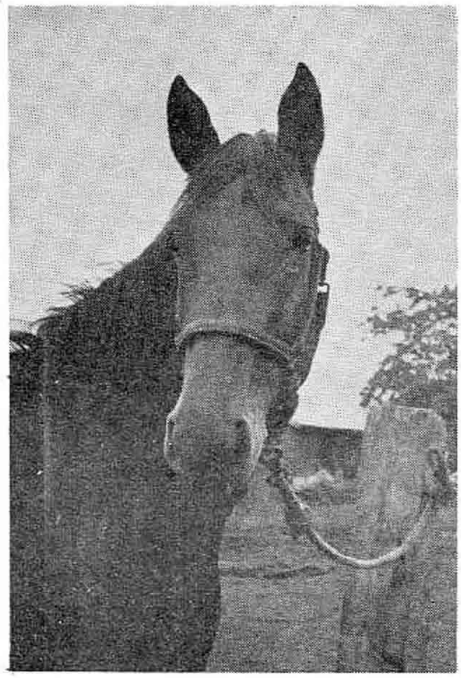
トウキビを噛む北凉号



朝　清　号



北駒号（ジュピター）



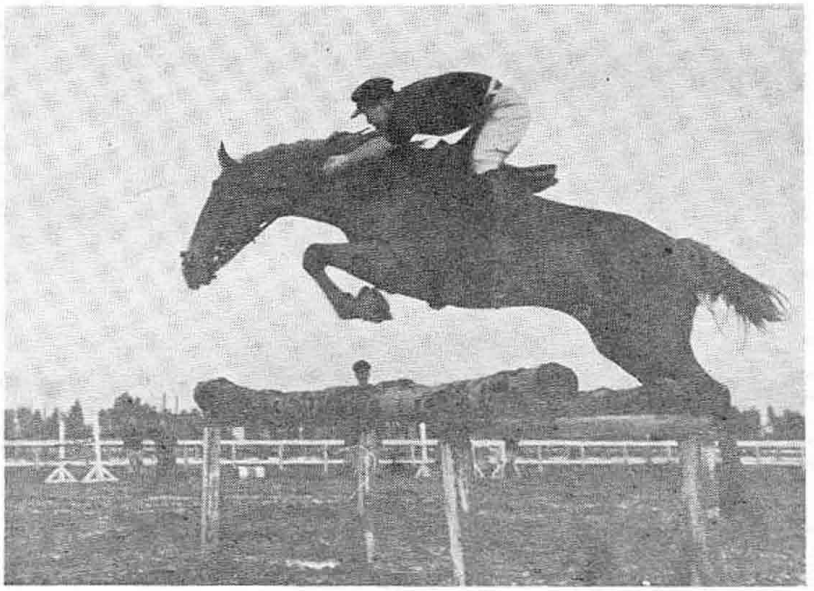
北　楊　号

北飄号と近藤兄

愛馬北楊に乗る八木沢守正兄

芒々たる北海道の原野にて
田　中　倬　兄

チビと高橋兄



山村勝兄　乗馬　北彗号

楽しいにつけ　悲しいにつけ
僕をささえてくれた　あなたに感謝します。

B馬場　伸長常歩　加藤正昭　兄

北　瓔　号

小栗兄と北晨号

卒業生のプロフィル

今年は七人の卒業生をこの四月に出すことになりました。四年間馬術部に尽していただき本当に有難うございました。部報の誌面を貸りて紹介致します。

小栗　紀彦　昭和三十七年入学・農学部畜産学科卒
大学院進学
三十九年度主将
主な戦積、四十年、七大戦にて優勝し最優秀選手となる。
四十年道大にて綜合競技四位（北晟）となり国体出場。四十一年東日本大会にてパルクールドシャス四位（北晟）

山村　勝　昭和三十七年入学・農学部林学科卒
大学院進学
三十九年度副将
地味な存在で、主な大会でのはでな戦積を上げられなかったが、小栗主将のアドバイサーとして活躍されました。兄の調教した北彗号はこれからの馬術部をになってゆく馬として期待されています。

高橋　昭夫　昭和三十七年入学・獣医学部
北海道農業共済組合に就職
眼り狂四郎といった異名をとりフトンをかついで点点と下宿を移り歩いたという大人物。その柔い乗りこなし様で北翔号を預り、鎌田先輩の下で二ケ月間教えを受けて来ました。心なしか鎌田先輩と物腰までそっくりとか。

近藤喜十郎　三十七年入学・文学部史学科卒
家　業
一番電車に乗った高野兄といっしょに北飆号に乗っていました。〇〇商会という営利と奉仕を兼ねたような写真の会社を作り部員から金をしぼりとった張本人。

八木沢守正　三十七年度入学・理学部植物学科卒
東大植物学科研究生として在学。
三十九年度主務、四十年北日本幹事長
美事なマネージングで馬術部の財政を救った。シェーカーを手に夜の街に消えていった「夜の男」。
東京で電話をすれば夜の街を案内してくれるとか。

加藤　正昭　昭和三十八年入学・工学部衛生工学科卒
大学院進学
四十年度主将
細心の注意と最大の努力を惜しまない人。うす汚れた白衣を着て絶対に盗まれないという折紙つきの自転車に乗り、雨がふろうとヤリがふろうと、自転車がパンクしようと、絶対に練習にくる。事ある度におしるこコンパという妙なコンパをやった。一時は廃馬とまでいわれた北瓔号を馬術部きっての満点馬にしてしまった。

田中　偉　昭和三十八年入学・医学部在学
昭和四十年度主務
加藤主将の女房役として活躍。高野兄から北飆を受けついで四十一年学生自馬に出場。加藤兄と並んで熱心な研究家であり、おんぼろ自転車で通った内の一人。医学部はあと二年あるからこれからも、我々にいろいろコーチしてくださることを期待いたします。

◇　◇　◇　◇

E さんへ

四年目　加藤正昭

手稲を吹きおろす寒風も気のせいかやわらぎ、二月と言っても道路には自動車の作るわだちが目だってきて道路騎乗がしにくくなると春が近いということでしょう。

Eさんお元気ですか、お会いしなくなってからもうずいぶんになりますね、小生も早四年で、卒業まじかです。振りかえってみますとこの四年間様々なことが思い出されますが、その中でいくつか書き出してお手紙をする気になりました。

何ということもなしに入部し先輩達の顔を恐ろしいと思いつつ部員として最低限の役目にしろのらりくらりとやっていましたが、いつか馬に魅せられたまらなく好きになってきたのです、がそれを自覚したのは二年目の夏以後のことでそれ以後は離れられないものとなりました。

何も知らない自分ではあるがと前置きして騎乗日誌（或いは調教日誌とでも言いましょうか。）を書き始めたのもこの頃です。それらのノートも今ではもう七、八冊になります。一年生においては全く出場できませんでしたが二年生になりときどき対外試合、競技会にも出場のチャンスが与えられました。

初めて入賞したのもこの頃----そうです旭川で行なわれた第九回の北海道馬術大会の一般貸与馬で三位に入り立派な賞状をいただき感激しましたが、本当のところは何がなんだかわからず六〇名も出場選手のある種目にただ用意してくれる馬に乗っただけのことでした。しかしこの競技会で北大の自馬競技の層の薄を暴露され上級生共々胸にぐっとこたえるものがありました。あまりよくわからぬ小生にも貸与馬から自馬へそして新馬調教もしくは調教という言葉について次第に考えるようになってきました。

二年目の冬は街乗をすることになりましたがもめた時いつも行っていないのにこんな時とばかり外にとび出して街の中を並んで走り回ったりしては危ないのではないかと二年目の分際で言ったりもしました。それでも初日に北涼号で行くことになり喜びいさんで出かけです。ご存じですかこのときのことを、出発してすぐに農学部のあたりで北飄が朝清にけられ前肢に負傷してひきかえし北翔が先頭になりどうやら円山まで行ったのですがここで北楊がはねて落馬。以前の外乗で放馬して彼女は厩舎に帰るつもりだったのでしょうがどこでどうまちがえたのかよその家へ迷いこみ警察から連絡がきてひきとりに行ったこともあるそうで、この時もどうか心配しましたが後でちゃんと帰ったことがわかりました。朝清も一諸に厩舎に戻ってしまい結局結局残ったのは北翔・北涼の二頭でこれ以上進むわけにもいかずひきかえし初日は終ったのですがこの時の街乗はこれで中止になりました。

この冬北涼号が交通事故にて負傷し三月迄休み四月より騎乗したのですがまったくうかつなことに腹部が大きいのを運動不足位にしか思っていなかったのです五十人もの部員皆疑ってもみなかったのです。その後獣医学部の先生の診断により全てはっきりしましたがこれにはびっくり北彗君とロマンスがあるなどと一度も知らなかったからです。六月に無事出産、仔馬を手近かにしたのはこれが初めてで、生まれて30分もすると立上がり乳をほしがるのですがどうもうまく乳房を見つけられず苦労をしているのを心

配げに皆でながめていたものです。前日など二晩厩舎で寝ワラの上にシュラフでもしものことがあってはと思いとまりこんだのですがすぐに寝込んでしまい役に立ちませんでした。父北彗、母北涼であるのはまちがいないのですが法律上は私生児となっています。御本人はそんなことも知らずに二、三日もするとグレースの後を追い回しそのやんちゃぶりにはずいぶんと手をやきました。この年の秋には苫小牧で預っていただき現在は日高におります。

これがため騎乗するのがずいぶん遅れ途中いろいろとまちがいを犯し秋頃からようやく騎乗いたしました。これは非常に大きな誤りであったことを反省します。その後以前よりもずっと乗りずらくなり、まよい又いらぬ葛藤もくりかえしました。

夏休みが終ってから役員の交代があり主将の役をひきついたのであります。たくさん失策もありましたがこの年の全日本馬術大会に小栗兄が北晟号で出場権を得たのですが、大半小生の不注意で申込みをせず、もめたのですが結局認められなかった事は深くわびなければなりません。

ずいぶん辛い時もありましたが退部したいと言われた時にはずいぶん困りました。一応ひきとめるよう言いますがなかなかその時考えついた信念めいた考えを翻すことはできません。しかし成功したこともありますこのときはなんともうれしい気持でした。又やめたい場合の大半はしぼんでいっていつかわからぬようになってから直接でなく申し出てくるのですこれにはなんとなくつまらなくなってきます。こんな気持は上級生になると何回か感ずることと思いますが主将として特に強く感じたのです。

春になってからは機会あるごとに競技会をもうけて試練の場を作り出すよう心がけましたがこれからも、競技会、記録会等は数多く開くと良いと思います。対酪農大定期戦・太奏杯馬術大会を初めて開催し記録会、札幌馬術大会等も何度か行いました。

六月には神奈川県淵野辺にておこなわれた第二回東日本馬術大会に北大より北飆、北翔、北晟の三頭が参加いたしました。流石一流の競技会だけあり施設もとても立派で感心しましたがこれは日馬連からかなりの援助がありますのでたまに北海道で開催しいつも連絡船で苦労する北海道の馬輸送を本州の人々にも味ってもらうのもおもしろかろうと思います。そのうちにできれば北大が責任をもって開催してはと期待しております。

ところでこれにて入賞は全て逸しましたが、翌日の指定馬選考会への出場権を得たのが北晟・北翔の二頭です。ここ問題だったのは北翔で出場予定の首藤君が就職試験の為出場できずかわりに小生にというので迷ったのですが（この頃あまり北翔に乗っておりませんでしたので）出場することに決め臨んだのですが何分にもあまり馴れていなかったので、強引な態度には出ずにある程度馬にまかせ決して邪魔をしないという気持でやることにしました。前競技の模様と首藤君から受けた注意を考えて比較的楽な気持ちで出場できました。結果等につきましては臨時部報に載っていましたので御覧になられたことと思います。

これから帰ってまもなく第一回の北海道自馬馬術大会が開かれ待望北瓔号にて出場いたしました。

八月には七帝戦が東京の馬事公苑で東大が当番校で行なわれましたが昨年の優勝校であった北大は惨敗を嚙しみじめな気持で戻ってきました。いくら貸与馬廃止論者といえども敗けてくやしくない筈がありません。それがいやなら出場しなければよいのですから。

九月の北海道馬術大会では北飆が六段にて優勝国体出場権を得るこれは久々の朗報でした。この翌々日の部員総会にて役員を交代し一年間の主将の任務をひきつぎました。まずい面も多々ありましたが小生にとっても苦しい試練の一年間でありました。女房役の田中君には筆舌に尽しがたい協力を受け感謝しているのですがなかなか、面と向っていえずに言いそびれてしまいました。

十月には王決が大阪杉谷馬事公苑にてあったのですがこれ又ずいぶんもめた結果北大より北飆北瓔の出場が決まり小生も貨車に乗って行きました。北大より村井君と二人、酪農大より杉山君の三人で楽しい旅でした。いつも馬達の側にいて退屈もせずに話をしたり寝たり水をくんだり青草や乾草をやったり駅員と話をしたり談判したり単純なことのくりかえしであきてもよさそうですが楽しい楽しい六日間の旅でした。ここで一番心配したのは北瓔の健康のことで札幌出発のときははでにプロテクター等をつけておりましたがじきにとってしまい肢巻もせずにおきました。おもしろいことに貨車の中は昼間でも薄暗いのですがトンネルの中ではまっくらになるので長いときは懐中電灯をつけますそうすると北瓔は人が恋しいのかヒヒーンと鳴くのです初めびっくりしましたが側に行って首をさすってやると鳴きやめましたがこんな声をきいたのは初めてのことでした。彼女はヤマトールが御気に入りで彼と同じ汽車なのでとっても気げんがよくおとなしくしていて前がきもせず手がかかりませんでした。大津でヤマトールだけが全日本出場のため途中下車するときのなんともやるせない目をみてかわいそうになってしまいました。

大阪についたのは札幌をたってから七日目立ち腫れはひどかったですがどこにもケガはなく下痢もせずに無事到着しました。

（経過、結果等につきましては北瓔号の欄を御覧下さい。

大阪より帰ってまもなく北驃号が離厩、そして今年一月三頭の愛馬達、北凉、北楊、朝清が離厩いたしました。朝清までが、寄る年波には勝てずとは言えかって貸与馬競技はなやかなりし頃北大の朝清と言えば知らぬものなしと言ってもよいほど知られていたことでしょう。農場との折衝の結果こうなってしまいました。

こう書きつづってきますとこの四年間にあったことが次々と走馬灯の如く頭の中をめぐります。もしこの他にお聞きになりたいことでもありましたらお知らせ下さい。喜んでお返事をいたします。

健康にはくれぐれも注意されますよう。

昭和四十二年二月　　敬具

卒論提出せまる今日も馬への未練が
絶ちきれず馬にのっている男より

F さんへ

回顧と希望

五年目　近藤喜十郎

遂に部卒業の論文（？）を書かねばならない時が来た。マネージャー氏の連日に亘る請求により締め切りギリギリになってやっと書く次第である。本物の卒業論文が終わってほっとしている所に続いての波状攻撃は全く論文ノイローゼにかかりそうだ。最初に断わっておくが、面白くない。一人の平凡な部員の死にそうに

なった時のたわ言にすぎないから。（どこの世の中で遺言で面白いのがあろうか。）本人としては自分が興味を持っている馬具の歴史や馬についての古い話等を調べて書こうと思っていた。所が、あと数時間、しかもカンヅメ状態なのでどうにもならず、これらは又の機会にして只、日頃感じてきた事を若干混じえて、部生活を振り返って書いてゆきたい。

馬術部にて俺が求めてやろうとした事は、「無限な可能性への挑戦」であった。これでもかこれでもかと自分をより厳しくする事により、自分自身が鍛えられると思った。それは運動部だけで得られるものであるし、運動部の持つ潔癖さ、純粋さを表わすものであると考える。以上の様な考えより試合というものを重視し、練習の目標とした。断わって置くが、単に試合に出て勝つ事により、あるいは有名な試合に単に出場する事により、ある役職に就いた者として自分を馬術部に名前を残してゆくとか、最上級生になったから試合に出るのは当然とか、自分が乗っている馬で出るのだからどんなに下手でもかまわないとかという考えから試合を見、又重視したのでは全くない。私は試合とは人間のむき出しの公平な闘争と考える。勝負（つまり試合）に勝つ事はすべてに優る事である。実力も、努力も、度胸も、人間性も、運も。だから試合こそ人間を鍛える一番の場所であるし、反面非常に厳しい状態に置いてくれるものである。以上の様に試合というものを考えていたので、試合に出れるだけの実力、勝てるだけの実力をつける為に最大の努力をし、自分を叱咤する事を主眼とした。俺にとって試合に出れることは名誉であった。しかし人間的に妥協性が強いのか、自分では必死になってやったと思っていても、はたから見ていたら大した事はなかった。その証拠として選んでもふって出してもらった、すべての試合に敗け続け、喰われ続けた。敗けるという事は自分がまだ努力不足、練習不足の為、実力もつかず、人間的にも弱く、そして肝心の馬に乗り切る事も出来なかった事が原因である。そんな自分をいろいろな機会を与えてくれ試合に出してくれた部には誠に申し訳ないと思っている。特に授業を休んでアルバイトをし、炎天下で、あるいは風が吹き、雨が降る中で愛馬を世話し乍ら影ながら応援してくれた下級生諸君に心からすまなかった。

馬術部でも部というものはどこでもそうだが、一番大切なのは、部員間の相互信頼と友情だと思う。機械文明や金銭がとめどもなく人間性を蝕み、狭めてゆく現代に於いて、人間性の最後の砦となる物が部の中にはあると思う。かって宮崎先輩が「部室に来ないと札幌に帰った気がしない。」と旅行バックを持ったまま、部室の古びた長椅子に座わってつぶやいた言葉が今でも思い出せる。名札を裏返えす時、何か寂しさを感じ、元に戻す時、ほっとした気持になるのは俺だけではあるまいと思う。先輩に会うと恐い様な感じだが、兄貴の様に甘えてみたいし、いろいろ相談したい気にもなる。又後輩には何か出来ることを何でも助けてやりたい気がする。同輩は正に苦楽を共にし、同じ生活をした仲間であり、自分のすべてを知っている大切な仲間である。考えてみれば実にいい仲間に囲まれて楽しく過した部生活であった。喧嘩をしたり、睨み合ったり、口をきかなかったり、遊んだり、飲んだり、ふざけたりした仲間が気付いた時には一番自分を導いてくれ、成長させてくれた。入部以来、鞍数を競い、上手になる事を競い、練習に於いては極めて厳しく、俺の持っている欠点や態度の甘さを絶えず指摘してくれ、俺は結局彼に鞍数も技術も負けてしまったが、

これからもいい目標であり、ライバルでありたい小栗。その人格からかもし出す独特のムードで我々の仲間を導いてくれ、いつもいい相談相手であり、特に今年度自己満足に陥ち入って、進歩への努力を怠っていた俺を叱咤して怠慢な状態から抜け出させてくれた村山。今年度春、病気が次第に回復しそうになった時、再発を恐れて馬に乗るのを、単に楽しむだけにしょうと思っていた時、「病気は乗って治せ」と云い、再び無限の可能性への挑戦に奮い起たせてくれた片寄。その朗らかさとバイタリティーでいつも楽しい雰囲気を作り、一番一緒によく共に馬に乗り、遊び、飲み、話し合った親友、試合に敗れてどうしていいのかわからないでいた時、激励してくれ、やる気を出させてくれた誰にでも好かれる高野。その淳朴さ、素直さで、すがすがしい生き方を見せてくれた里沢もよき仲間であり話し相手だった。飄飄として眠むっている様な態度から、鋭いかみそりの様な言葉を吐いて分析してくれた高橋。役員時代、鉄壁のチームワークを組み、部報発行、新聞、ダンスパーティー等の仕事を共に行ない、ある時は我々の索引車となり、ある時は冷静な分析者となった八木沢。そして表面的で非常に楽観的に物事を考えてしまう俺に対して、冷静に深く、根元から物を考え、いつもよく相談に乗ってくれ、よき話し相手であった八木さん。そして河合、藤井、加藤、大堀さんも忘れられない仲間である。これだけのいい仲間と共に部生活を過せた事は非常によかった。彼達が俺の部生活をいいものにし、支えてくれた様な気がする。

部員としてなりたかった目標は思田さんと八木さんだった。思田さんの北飄号の騎乗姿とあの柔軟さとテクニックが絶えず俺の理想であり、目標であった。そして同時に八木さんのどんな難馬でも飛ばし、強い騎座と強烈な意志を持ち、俺達を厳しいまでに鍛えてくれたあの「剛」という言葉で表わせる性格も目標であった。結局、そこまではとても到達出来なかったが、何時かはあれ程までに馬に乗れる様になり、人間的にも近か付きたいと思っている。

俺は出来なかったが、きっと下級生諸君の中から二人の先輩以上の技術を持った者が表われると信ずる。それには血を吐く様な練習をせねば駄目だと思うが、現在の下級生諸君を見ているときっと出るような気がしてならない。部員としてすばらしい人が多い。馬術部を何処までも愛し、それ以上に馬を愛し、決して不平を云わず、絶えず努力を続け、怠慢せず、上級生の横へいさにも不平をいわない模範的と云える部員寺崎君を始めとして、にぎやかではあるが馬術に対しては貪欲になろうとしている二年目諸君。馬術部に馴れ、いよいよ一心不乱に乗ろうとしている山下君を始めとする一年目諸君、彼達はすばらしい部員である。又その様になりつつある。彼達の中からきっとすばらしい学生馬術家があらわれることを俺は信じている。

馬術部に入って感じた事は伝統の深さと先輩の有難さであった。昨年度の七帝優勝の東京と札幌での先輩の人達の喜びの顔を忘れる事は出来ないし、又馬術的には、馬術というものを全く何も知らない我々が吐く突飛な言葉もよく聞いてくださり、本当の馬術というものを見せ、教えて下さった鎌田、千葉両先輩を始めとして大場、思田、八木、志水、市川、滝沢、野田先輩も忘れる事は出来ない。

自分自身の部生活を振り返えり、部員としての評価をするならば極めて成績の悪い生徒であった様だ。只一鞍でも多く乗り、一

日でも早くうまくなろうとし、次々と味わう勝利の美酒に感激してよった一年目。すべてが楽しかった二年目前半、そして苦しく寂しかった後半。むき出しの闘志と希望が重なり、すべてが開けてゆく様な三年目前半、それが次第に厳しい現実にぶっかり崩れかかった後半。すべてを忘れ、一丸となり目標に向かって邁進し、王決惨敗、七帝優勝と忘れられない感激を経験した四年目前半。そしてペットの中での闘病生活に浮かぶは馬上での姿と愛馬達の事、すべてが崩れ、すべてが流れ、絶望の谷間をさまよい、どうにもならなくなった四年目後半。再び馬上に帰った時のあの喜び、感激、そこからもう一度立ち直りいざ進まんとした時、もはや部の歯車からははみ出された存在となっていたが、それでも理想を追ったが、結果は厳しい敗戦という苛酷な非情な現実の連続、最後の目的、最大の目的であった馬場馬の調教も愛馬北鄕号の離厩と共に消え去った五年目。

学生生活の中心が馬術部であった。それだけにもっとやってみたかつた。もっと馬に乗りたかった。疲れて馬上にいるのが苦痛になる程乗ってみたかった。そして特に北海道の学生には無理だとか、不可能だとか云われた馬場馬を北大に一頭でもいいから育てたかった。それは三年の時四明号に京大で乗った時決意した事だが、それが出来なかったのは残念だ。しかし馬術への挑戦はたとえ部生活が終わろうと続ける積りだ。大学で馬に乗ったが馬術とは一体いかなる物か全くわからなかった。だから何とか馬術を極める所までやってみたい。絶えず理想を追い求め、決して満足する事のない目、無限の可能性へ挑戦し、毎日努力する姿を岩坪さんの馬上からみつける事が出来た。現在、巷に多いプロみたいなにせのアマチアと違い、仕事を持ち、充分働き、朝早く寒風を貫ぬいて馬上にある姿こそ本当のアマチュアスポーツだ。いつになるかわからないが、岩坪さんの様にやってゆきたい。

人の背よりもはるかに高い障害を飛び越したむこうに何かがある様な気がする。高等馬術の反動からきっと馬の言葉が、歌を歌うのが聞えてくるのではないだろうか。あの反動、あの手綱さばき、その中に何かがある様な気がしてならない。

最後に半沢先生を始めとして在札OBの方々ならびにお世話になった札幌の馬関係の方々、いろいろ技術的な事を教えていただいた皇宮警察の方々、パレス乗馬クラブの方々、そして後援会の皆様、現役諸君、長い間有難う御座居ました。

昭和四十二年二月十日

東日本馬術大会観戦記

二年目　春田恭彦

O氏は言った。「北晨のモクシはどこだ」小生もちょつと興奮気味あちこち探しまわった予備でも出すかと思ったら何のことはない。馬房で白目をむいている、彼女の頭にちゃんとモクシが掛っているではないか。試合の前日である。

当日は目がさめるということなく目がさめた。知らない間に起きていたのである。第一試合はパルクール。晨八番、チビ十七番の出番である。練習馬場の方でチビの練習風景を見ていた。チビも出番が近づき、馬場の方へ歩いてゆくと、向うから寺崎兄がニコニコしながら目じりを下げておでこにしわをよせて走ってくる。その後に汗びっしょりの北晨号まだ興奮さめやらぬ小栗兄。「満

点だ。満点だ。」と言いながら小躍りする寺崎兄の姿に思わず小生も走り出し何やらわめき散らした。北晟を胴上げしたくなった。人参を無精にやりたくなった。俺も一緒に食べたくなった。（生の人参というのは美味しいものだよ。）いよいよチビの出番が来て馬場に入る。敬礼をする。身振いがした。何故か知らぬが、ガタガタと震えた。僕が高校一年の時、無免許運転で捕まってパトカーに入れられた時の事を思い出した。馬場が広いせいか、他の馬が大きいせいか、障碍は余り大きく見えなかったがチビが入ったらやはり大きい。スタートを切った。猛然とダッシュ。北楊号の池田兄ではないが、　無意識に「跳べ」「跳べ」と口から出てしまう。一米十の垂直を飛んだ後、ツツーと左へ走り出した。あっと思つた時には切っていた。恐しい色、形のカマボコである前日から首藤兄も心配し馴致したつもりだったのだが。

第二試合は標準中障である。北飄はおしかったがヤマトールの見事な飛越ぶり、岩坪氏の見事なフォーム、落着き振りに見いった。平行を落したのは惜しかったが、終始落着いた飛越と技倆には全観衆が感心していた。チビが逃げたカマボコはヤマトールにとつても恐わいらしい。止まった！と思ったのは束の間飛んだのである。不思議な現象が起った。止まった馬が飛んだのだ。満場一致で拍手が起った。

第三試合は六段飛越である。北海道から十頭出場した。北晟も北飄もヤマトールも皆頑張った。一、四米を完飛した時は北海道馬術大会かと思う程ばかりで嬉しくなった。一、六米に残った馬は四頭であった。ダンディ・レラーニ、もう二頭と酪大のデーリーである。デーリーは奮闘した。最終出場であり六段のスターであった。五段まで無過失（他の馬は皆落下した）、優勝だと早合点してヒゲの肩を力まかせにたたいた。そうしたら意外にも止まったのである。あと一つなのに二回目も止まった。三回目中嶋さんの拍車が入った、デーリーの表情が変ったように思えた。跳んだ！跳んだ！又早合点した。又優勝だと思った。他の馬は皆二落又は二拒否一落。しかしながら二拒否は減点九点だと言う。

この試合をみて小生大いなる自信を得た。北海道に居ることの誇り。我達の師なる岩坪氏はどちらからみても日本一の馬術家である成績こそよくないが北大も畜大も酪大も一流の線である。十万の馬だって五万の馬だって馬車馬だって一千万の馬に十分対抗出来る。我達の仲間達、これから自信を持って練習に励んでゆこうではないか。我等が愛馬のために。

昭和四十一月七月

「落馬ノート」より転載

全日本馬術大会傍観記

二年目　角田卓彦

十一月五日、朝一寸雲が多かった空が、九時近くには晴れ上る。山腹のガケをけずって作った大津市営の乗馬練習所は広々としている。　時々琵琶湖から飛んで来るらしいフロートをつけた軽飛行機が見える。

九時、サンジョルジュが始まる。　一番金星馬が沈着せず運動が粗雑である。二番目若月、軽々と運動をし少しも困難を感じない。サンジョル程度なら馬はやるのがあたりまえのような気がしたりする。　六番浜千鳥、きれいな栗毛に光が反射し艶々として

いる。駆歩運動が美しい。続いて昨年優勝のライトスピリット、騎手は荒木さんではなく平木さん。スタイルの良い馬ではないが踏込がグンと大きい。二十頭のエントリーで十九頭が演技。上位三人が婦人であった。

続いてパルクール。使役の人間が前もって打ち合わせをしてないのか 障碍のソデを逆方向につけたり やけに時間がかゝる。北大の使役は良くやっているなと今更感心。 さて前回、前々回と北海道が勝っており、今回も、と期待したが、プログラムを見ると誰も参加していない。競技は一番金星が無過失であっさりゴール。相当なせり合いになるかと予想。が無過失通過ばかりでもない。 五番荒木雄毅氏騎乗のバロー。これは実に見事で、それまでは回転も大まわりで障碍には距離を充分とりまっすぐ向けていたが、バローは回転が実にスムーズに小さく障碍から障碍へ最短距離を走り、時には障碍を斜にとぶ。 パルクールの回転とはかくあるべしという見本のようなもので周囲から驚嘆の声があがる。 技術と自信があって始めて出来ることであろう。一分六秒でゴール。続いてタカハ。何でもこなすきれいな鹿毛の馬。これが八秒。次が早稲田の稲螢。 大柄でスピード感もそうあるようにはみえなかった。 前半ゆっくりとし第三の門扉ではつまり、一瞬止まりそうに見えたが、通過。次第にスピードをまし五秒でゴールしてしまった。この三頭がずばぬけていた。

標準中障。十七頭が参加し、無過失でのゴールは二頭のみ。北海道の期待する雲霧は三番目にスタート。速歩をまじえた走行でスイスイととんでいったが第八の平行 H110 W130 で拒止、こゝで三拒止失権。次の京大の濃青、ヒゲをはやした楠本騎乗。途中で帽子がとぶと長髪がフサフサ。一諸に見ていた村井兄、さぞうれしかったことだろう。濃青は無過失でゴール。荒木氏のレオは第9トリプルで一落。最後がマチレスアロー。国体で勝ってきた馬で、騎手の杉谷昌保氏が生産、飼育、調教をやったという栗毛の四才馬。若い馬らしくホッソリスマートでピョンピョンとはねながら入場し、経路走行中もはねながら、無過失ゴール。かくて二頭によるバラージュ。濃青は三落下。マチレスアローは最終を落下したが二落でゴールした。

この日最後は六段飛越。130cmで開始、斉藤兄が乗っていたという山透、どれほどこわれたか心配だったが、それほどでもないようで一安心。 十九頭の参加で130は十六人が完飛、四番の高嶺完飛したがゴールに直進せず、あわててゴールに入ったがそれを巻乗りにとられ一反坑。 あわれ前回の優勝馬はかくて去った。140は十四頭完飛マチレスアローは落下。150ヤマトール快調で、バーにふれもせず飛越。荒木氏のバローは落下。八頭が完飛。160となる。一番勝盛、村井兄曰く「とぶ筈ない」この馬は見事完飛。続くバリーナも鮮かな前肢のあげ、後肢のぬきで完飛。さてヤマトール、快調で第五の百五十迄落下もせず。よしやったと思ったが、最後の百六十の前でピタリと止まる。左方向より再行又もや拒止、岩坪さんこゝで翌日の大障のためか、むけなおさずゴールを通る。あそこまで行って止まるとは全く思いもよらなかった。帯畜の雲霧も第五で三拒止、「ゴメン」と一言板橋さん。女性只一人参加のレオ平木も落下。サイクロンが一拒止で棄権。続く麻月は130の時から前肢をバーにあてていて、150では横をみてとんでいたが、160も前肢をバーにあて、完全に落下と思ったが、不思議にも落下せず完飛。不思議な馬である。かくて三頭による170。勝盛は拒止で棄権。バリーナ一拒止一落。麻月第二

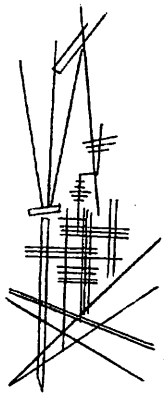
の130と最終を落下で、芦毛のバリーナが勝った。

十一月六日、中間馬場が九時に始まる。荒木氏のライトスピリットが最初に演技。さすがに呼出しをうけてもすぐには入場出来ず、予備馬場で充分馬を手中にして入場。伸長にスピード感がなく、駆歩の発進でつっかゝり気味にとび出す。タカハ、速歩が美事で伸長も美しい。速歩運動ではズバぬけているようだ。友竜良い馬で正確な運動をするが、時々騎手の拳があたったり、はずれたりする、もっと点数が出そうな馬。オープン参加の若月サンジョルで二位の馬、左右で手綱のとり方が違い左は普通の兵式保持法で右がフイリス式のように轡を交差せず平行をとる。右が固い馬なのかも知れぬ。ライトスピリットが二位の待月に約三〇点差で勝つ。続くグランプリは参加が非常に少ない。二頭のエントリーで浜千鳥が棄権し、荒木氏がライトスピリットで出る。ライトスピリット号グランプリをあまり踏んでない様で運動がギスギスしている。パッサージュは見事。一度経路を誤り、気付いてもどったが直進出来ずグニャリと曲った蹄跡となる。友竜は中間より良好。わずかに右後肢跛行。

選抜中障はピュイツサンス方式で最後まで高さのバラージュ。三回のバラージュで決る。二十頭が参加。雲霧はスイスイと飛んで行ったが最終130のレンガに後肢をひっかけ落下。残念なり。稲螢、昨日のバルクールに比し馬がつまり気味。第二の自然木、踏み込みすぎて障碍をこわして通過。第六の平行では騎手の久米片手に轡をとり鞭をいれたが、これでひどくおくれて落下。この落下は明らかに人間のミス。フクサカエ喜んで障碍をとぶ馬だが、騎手が最初から片手綱で鞭をもちおどりながら乗っている。すなおに乗っていたら満点だろうと思われるが、ハミをひかれたり、はずされたり、座骨をあてられたりで到々一落。馬がかわいそう。バーロー誘導が難しい馬。第五で落下、つまずき、そのまゝ第六に向ったが、良く立て直り短い距離から第六の平行を無事に飛んで行った。十一頭でバラージュ。広い馬場に四障碍で第一はノーカウント。障碍間の距離がズイブン長くなる。ヤマトール最終レンガをひっかけ落下。昨日の六段で障碍をなでながらとんだ麻月も今度は二落。七頭が残る。これで澱背、曇桜、マチレスアロー、バリーナ、いずれも最終レンガを落下。皆前肢にひっかけていたようで疲れて前肢があがらなくなってるような気がする。レオは二落下。タカハとサイクロンが残り、二頭で三度目のバラージュ。最終は160のレンガ。タカハみごと無過失。サイクロンは大きくたくましい鹿毛でドタドタと走りまわる。九州からの輸送中貨車の中で畜大の勇勝にかまれ鼻先に怪俄がある。良く健闘したがレンガに前肢があたり一落、さすが全日本の選抜は見事である。

最終競技は大障碍。十三障碍、十六飛越。ヤマトールが最初にスタート。選抜中障では北海道勢の応援の集まりに顔を向けて笑っていたが、今度は黙って前を見ている。「お願いします」「ガンバ」と声援がとぶ。第一の竹桷、第二の平行、右回転、第三垂直と平行のダブル。右回転から第四垂直。無過失。第五がドラム、平行、平行のトリプル。一落下。大きくまわって左へ。第六土べイ左回転、第七カマボコ。左に直角にまわり第八自然木。大きくふくれ右回転、第二のソデに馬がふれ、ソデが倒れる。第九レンガ　山透は拒止。岩坪さんはワズカに前に倒れる。右の鐙がはずれ、踏み直し、再行。とんだが落下左回転で第十平行。落下、第十一から最終までは直線上に配置。岩坪さんは左に馬をもって行き右回転、障碍への距離は十分にある。第十一が三段、ヤマトー

ルは止まる。慎重に岩坪さんはむけ直す。ドスドスと脚の音が聞こえる。ヤマトールは行かなかった。三拒止失権。続く芳月は五落下時間減点で−24、赤い乗馬服を着た李一揆は東京五輪の大障碍馬レーベルに乗り出場。第十一での一落でゴール。スピード感のある飛越であった。バリーナは一拒止三落。飛燕、今大会最年長の佐用氏騎乗。二落下でまわったが第十の平行前肢があがらず、障碍にぶっかり人馬転。佐用氏は左に転げ、大勒の轡を握っていた手から轡が離れる。すぐに人も馬も立ち上り、馬はトコトコと歩き出した。佐用氏は馬をチラと見、審判席に向い敬礼し、馬をつれて退場した。サイクロン、重そうな馬が良く飛ぶ。トリプルのaで踏み込みすぎb、cと間歩があわず踏切位置がズイブン近くなったが、落下もせずに通過。さすがにやるわいと思わせる。二落下と時間減で−86栄天は東京五輪の総合出場人馬一寸無造作に四落。タカハ、選抜中障から引続きで馬がばて気味。騎手はこの日八度目の飛越だがバテている様にも見えない。タカハは第六、第十三でそれぞれ拒止、第九と第十三で落下。時間減点も含め−22.75アナウンサーはこゝで競技終了と放送し、あわてて残る一頭澱青を呼出す。澱青見事に二落でゴール。かって優勝の経験あるこの馬は、レベールに次いで二位に入賞した。かくて第十八回の全日本馬術大会は終了した。



四十一年度 役員（学年は就任時）

主将	五十嵐	章	（法 三年）
副将	山本	紘明	（経 三年）
	池田	統洋	（工機三年）
マネジャー	山本	紘明	（経 三年）
	春田	恭彦	（農畜二年）
	田中	力	（獣 二年）
	浜岡	秀洋	（工機三年）
会計	入江	圭	（工衛三年）
飼育	高倉	宏輔	（獣 三年）
	寺崎	弘恭	（教養一年）
馬具	村井	引一	（農畜二年）
	橋口	甫	（教養一年）
記録	斉藤	勝雄	（農工二年）
	加藤	公敏	（教養一年）
体育会委員	安岡	徳三	（農林産二年）
女子部主任	遠藤	裕子	（理化二年）

広場

ずいそう

同好会幹事　佐合義弘

冬来たりなば、春遠からじ、毎年の事乍らやはり春が待ちどおしい、新入生を迎え四月の中旬になる迄は寒暖不順の天候が続き、それから本格的に暖かくなる、五月の始めには我が愛する馬達も冬仕度くをときはじめ草の新芽を食み乍らひなたぼっこをする時が来る、しかし私はもうこんな風景を見られないかも知れない、と云うのは、今度札幌市民生協の方へ勤務先が変ったから。

光陰如矢と云う言葉があるが本当に長い様で短いものだ、私が北大生協に入って中央食堂に居た頃、当時の主将大久保君を始め部員が皆んなで揃って食事をしに来た、丁度、国体が札幌であったあと、自馬七頭をせいぞろいさせた時だった。私も同好会に今前橋に居る渡植さんの紹介で加入させていただいてからもう十三年にもなる。　思い出もたくさん走馬灯の様に次から次へと出て来る。卒業した部員諸氏もきっと卒業して部をはなれる時にはこんな心況だろうと思う。

中でも私の心にしっかりと残っているのは北楡の事だ、彼女とのそもそもの始まりは、私が始めて馬場に出て、始めてまたいだ馬だった、練習が終って手入れを始めたが私が手入れをするのに誰も近づいて来ない、私は何も知らない、即ち「盲目蛇におじず」だった、あとで聞いたら何んと、かみつく、けるのナンバーワン、との事、これを聞いて私は「ヒヤツ」とすると同時に彼女が好きになった、以来彼女が函館に行くまでずーと仲よくして来た。

彼女は私の云う事を実によく聞いてくれたし、いまだかって一度も私をけったり、かんだりした事がない、もっともよく馴れていた時は声をかけておいてうしろから木馬の様にとびのる事も出来た。試合の時も良い成績でとんでくれた、何年の時か忘れたが、一度試合の時、最後の三段の飛越を失敗してひどい人馬転をやってしまったがあの時は馬の脚がおれたと思った、私は目の横と鼻の下を地球に「いやっ」と云う程こすりつけてしまった、又三十四年の夏だったと思うが大通り八丁目で全道大会をやった時、大腿の上部をけられて四針も縫った事もある。楽しい思い出では、月寒の種羊場とか石狩の浜へ遠乗りをした事など、今では車の洪水であぶなくて出来そうもない事がやれた。

いろいろと思い出もつきないが、部員が変り、馬も当時からいる朝清を除けば全部変ってしまった、北楡が居なくなっただけでも馬術部から一歩も二歩も遠くなった感じなのに、今度は北大からはなれる事になってしまい、更に勤務時間も変って日曜日が休みでないと来れば又、又、一歩遠くなる感じが強い。

しかし、馬の仲間は本当に良いもので、卒業した多くの部員から毎年年賀状をいたゞいている、私も勤務は変っても札幌に居るし、北大とも全く縁が切れたのではないから、出来る相談なら何時でも今までどうりやらせていただきたい。

最後に部に一言、前と違って対学校、対農場、いろいろと解決しなければならない課題もたくさんかゝえている現在、一番大切な事は、全部員の民主的な討議と、そこから出た決論で全部員が主将を中心に団結する事だと思う、そしてねばり強く一歩一歩着実に馬術部を向上させてほしい。

思うこと—北飄に再会して—

三十九年卒　恩田正臣

新しいシーズンを迎え、「今年こそは！」の意気に燃え、部活動を行っていることと思います。

昨年は大阪で久しぶりに学生自馬大会を見せてもらい懐しい気分にひたりました。その時、大阪に来ていた二年目部員と、福井県に行くことの決っていたセントベルに乗って、いっしょに練習を行ったので、それらの感想を書いてみようと思います。

北飄は、遠くから近寄ってくる私をみつけ、頭を伸ばし、耳を真直ぐ向けて嬉しそうに鼻をならし・・・て欲しかったが、その時は馬場競技終了後の手入中で、他にも人馬が沢山いたため、気付かなかったらしい。それでも、そばへ寄り頭をポン　とたゝけば、もう昔の間柄になっていた。

頬をすりよせる甘えかた。ポケットをさがしにくるしぐさ。歯をむき出して馬繋場のさくを噛むふざけかた。すこしも変っていない。

田中選手の騎乗をみた。たくましさは以前より優れている。よく前に出て行く。活達な歩様、前進気勢は衰えを見せてない。

調教者（あるいは自馬責任者）は何人かいれかわり、その都度それぞれの調教をされたのだろうが、扶助に対する従順さはそこなわれていなかった。特に脚の扶助に良く反応を示し、脚力の衰えたはずの自分でも、騎乗を終えてモモが痛くなることもなしに乗ることができた。

学生の馬術部では、毎年部員がいれかわって行き、そのたびにそれぞれの馬術理論と御法で、繋養馬を調教し乗りこなして行くことになるのはやむを得ないことでしょう。これは馬を中心に考えたら非常に危険なことに思われます。幸い北飄については、みんなに愛され、熱意ある人達の間で引継ぎもうまく行われているとみえて、少しずつ調教が進んでいる様子がみられてほっとしました。これは北飄という一頭の馬について喜ばしいことではなく部のありかたや、部員の心構えとして喜ぶべきことと思います。

部員は次々と変わり、部の運営方針が役員交代ごとに変わることになっても、三十余年の良き伝統は失われないし、失ってはならないからです。

時代が変わると考え方も変わり、競技会で求めることも変ってくるでしょう。部として積極的に情勢に適応する努力がされるべきだし、革新の先頭に立つことも必要なことかもしれません。その場合でも、古きを温めつゝ、新しきを求めて行くことがよいことだと思います。

このことは、御法についてもあてはまると思います。

一流の馬術家は、それぞれ自分の馬術を持っていると云えるでしょう。学生馬術部でも最上級生になると、それぞれ独自の方法で騎乗し、独自の馬術理論を持つようになるでしょう。しかし下級生に教える時には、これを表面に出してしまうのはどうかと思います。最初は正統派の基本馬術を充分身につけさせ、応用の段階で、一つの例として示してやるほうが良いと思います。その時期については、個人個人の練習量と、基本馬術をある程度修得し

たと思われるころで、一般的には、三年目からでも遅くはないと思われます。その時期から大きな競技会を見る機会も多くなり、いろいろな人の馬術理論を聞く機会も多くなるからです。基本馬術を身につけていなければ、折角のチャンスをモノにできないし表面的な、部分的な技術・理論しか理解しないで全てを理解したような誤りを犯すことになるでしょう。

何流の馬術でも、その原則においては一致するはずです。機械でなく、生きた馬を対照にするゆえに、馬術家それぞれの理論と御法が生れてくるわけですが、これからも、基本馬術の応用にすぎないと思われます。

部における上級生の役割としては、優秀な繁養馬をつくり、対外的には戦績をあげることと、それ以上に大切なことは、下級生の教育だと思います。下級生に基本馬術を教えながら練習を行うことによって、基本に立脚した自分の馬術が進歩していくことと思います。

この文章を書きながら、自分の現役時代にくらべて、ずいぶん保守反動の意見だと思います。敢えてこれを書こうと思ったのは、卒業後三年ぶりに北飄に会い、部員の練習するのをみて、北飄が変っていないのにくらべて、下級生の部員の乗り方について気がついたからです。

脚の位置、挙の位置、前傾のしかたなど外形的なものにとらわれすぎて、それらの本来の働きを見失ってはいなかったでしょうか。騎座は騎手の体重を支え、脚は落ちかけた時にしがみつくもの、手網は曲る方向に馬の顔を向けさせるもの・・・・・ではありません。どの程度の敬数なのか知りませんが、騎座、脚、手網の使い方にくらべて、格好ができすぎているような印象を受けました。部のふんいきは、年々の部員の顔ぶれで変わり、御法も何人かの「上手な」上級生に影響されるところが多いのは、北大馬術部の伝統といえるでしょう。開拓者精神も我が部の伝統といえるでしょう。こゝで思うのは、新しきを知るために先ず古きを学ぶ、この態度も伝統につけ加えて欲しいことです。

馬術には、くみ尽すことのできない深い魅力があります。扶助に対する反応が、一頭一頭の馬によって異るのを、応用力を発揮して乗りこなして行く喜びと、一頭乗るごとに、また一人の馬術家をみるたびに、自分の馬術が、より深くより大きくなって行く喜びがあるからです。これは基本がマスターできてこそ可能です。基本をしっかり身につけてから応用段階に至るよう、下級生も上級生も心掛けて欲しいと思います。

最近の部の練習を見たわけでないので、これが的はずれな心配であったら、むしろ幸いです。

懐しき札幌の友への手紙

昭和三十九年卒　小島　武

北国の懐しい日々に別れを告げてから、早いものでもう三年たってしまいました。若い青春の日々をエルムの学園に学び、愛馬逸と味った感戦の事々は純粋な喜びでありました。「朝霜」「北涼」「北揚」がまた部を去ったとか伝え聞き感慨またあらたなものがあります。

私が三十五年に入部した時、部班運動の馬順は北斗・北潭・北

翠・北嶺・北春・朝清・北楡そして新馬の北涼であったと思います。この八頭が全部離厩してしまった事になったわけです。僅かな才月にも、つぎ次おしよせる新しい力の息吹を感じさせられます。

私は就職して神戸に住んで三年になりますが馬に接することは全くなく、専ら独身寮と研究室（鐘化研究所）との往復の毎日を送っています。 Gemeinschaftlich な生活から Gesellschaftlich な世界に入り悩むことも度々あります。学生時代に得た友人・先輩が時々訪ねてくれたり、お便りをくれたりした時、「オイ元気ヵ」「おひさしぶりです」この短い挨拶だけで、会わなかった数年の空白は埋められ、昨日わかれて今日またあった、あの懐しい雑然とした部室での、そして馬場での語らいの日々に帰ることが出来ます。友あり、遠方より来る、また愉しからずや。けだし真実であると思います。

学生から社会人への移行としては私は非常に恵まれております。学生時代有機化学を学び、今この研究所の合成研究室で仕事をしていますが、好きで選んだ化学の分野で生きて行けるのですから、まずもって幸運であるといわねばなりません。仕事の関係上語学の必要性が痛感され、英語・独語だけで私の場合仕事が進まず、卒業してから露語と仏語を四苦八苦して学びました。O・Bとはいってもまだ若輩である私は修業時代であると心得えて勉強したいと思っています。天才はいざしらず凡人である私は、自分を成長させるには、それしか方法がないと思っています。

最近、部からの印刷物やその他から知る部の経済的苦労は大変なことと思っております。我々が現役時代九州・東京等への遠征等皆先輩からの援助でさせてもらったのですから、O・Bになった今微力でも援助したいと思っています。在札以外のO・B・OGに対する寄附依頼について、現役諸君に一つ提案致します。幸い部員諸君は全国から集っておられるようですから帰省の時を利用して直接奉賀帳をもってまわったらいかがでしょう。旅行を兼ねることにもなり、先輩諸氏から昔日の思い出を聞くことも出来、身をもって部の歴史を知ることにもなり、諸君の青春を全からしむるに益することが多いと信ずるのですが。そして先輩諸氏もまた諸君を喜んで迎えてくれることであると思います。

現役諸君の活躍があまり聞えてこないのは残念ですが貸与競技馬から自馬競技への移行期と考えればいたしかたがないのかも知れません。昨年遂に王座決定戦も自馬に変ったようですが、馬術本来の姿に帰りこのことだけを取り上げれば喜ばしい事かも知れません。しかし昨年のあの大会に対しては二つの疑問点が残っています。一つには王座決定戦の本来持っていたはずの地区代表校の決戦の場であるという意義が完全に消失していた点であります。更に一つには学生自馬対抗との関連性が極めてあいまいになってしまったことであります。幹事諸君がどのような意図で運営方法を決めたのか明らかでないから適格な批判は出来ませんが、単に時代が自馬によることを要求するという点から安易に決定したのであれば軽卒であることはなはだしいと思います。これは地方幹事の責任であります。特に北大の現役である諸君に王座決定戦に対する認識が不足していたのではないかと思います。曾ては関東の優勝校と関西の優勝校との間でやっていた王座決定戦を一昨年迄の形式、つまり北日本、中部、西日本地区を加え全国を五ブロックにして、新たに王座決定戦に改組したのは、実に北大の力であったことを想起すべきでした。招待全日本女子戦や馬連主

催にもっていったのは、後輩諸君の力であり敬意を表しますが、この大会もなぜ北大が苦労して育てあげて来たのか、その精神をわすれるべきではありません。日本の学生馬術界に常にリーダーシップを取り、またその意欲充分であった各々の時代の人々によって部の伝統は形成されて来た事実を、もって銘すべきであります。

伝え聞くに現在の練習に部班運動軽視の傾向ありとか、これが本当なら現役諸君の猛省を促します。各個乗りの長所は騎手の練達ある時にのみ発揮せらることを知るべきであります。全体の調和ある美しさが部班運動の最終目的であります。単なるサークルの場としてでなく、そこに青春の総てを傾注して悔いない場としての我らが北大馬術部の新しい伝統を、若い現役諸君の血と涙で形成してもらいたいと願っています。札幌にいる若いO・B諸氏は馬場に出て号令をするぐらいの意気を示してもらいたいと思います。東京からisoishimizu氏がのこのこ札幌に行ってその意気を示したとか、伝えききI氏の、いまだ健在なるを知り大いに愉快でした。

久しぶりにこの雑文を書きながら一人愉快になりました。現役諸君の健斗と先輩諸氏の御多幸を祈って擱筆します。

一九六六・一・三十

我が恋愛考

竜、　臼　馬

八木さん達の結婚式の準備をやっていた頃の話だ。何人かの人間に俺はこう聞かれた。「ところで竜さんは何時ですか？」俺は何の事か分らなくて「何が？」と聞かざるを得ない。すると決って相手は「結婚式ですよ。だって婚約したと云う話を聞きましたよ。」と答える。俺はびっくりしたな！。そして「シテ相手は誰だ？」なんぞとトンマな質問をしてしまう。だいたい自分の婚約者が誰かを知らない様な野郎めはめったに居ないだろう。だが実際俺は自分が婚約していた事すら知らなかったのだから仕方ない。そして俺の質問に対する答を聞いて又びっくりする。どうも、俺は三人位の女性と婚約してしまったらしい。何故って皆の答える俺の婚約者が皆違う人なのだから。俺はエライ事になったと思ったナ。一人でも仕末におえないかみさんを三人も持たされたんではかなわない。女は弱しサレドかみさんは強しと云う位だからナ。

ところでまじめな話、俺は婚約しているのか？否である。本人が云うのだから間違いない。婚約どころか、だらしない事に恋愛も未経験である。これも真実だ。全く世の中に真実程怖いものはないナ。ごまかしがきかない。俺は科学者の卵だ。だから真実はまげられない。

昔、堀川兄が「学生時代に恋愛しない奴は人間じゃない。」と言った事がある。この言葉の意味を考えると二つの意味が考えられるナ。

一、女に愛されない様な男は人間として何かに欠けている。

二、人の世は男と女で出来ている。だから人間は愛し合う異性を得て初めて完全となる。

以上の二つだ。これも或る意味では真実である。とすると俺はまだ人間ではないらしい。残念だナ。

ところで俺もこの年になるまで女にホレたりホレられたりした

事が無いとは云わない。然るに何故恋愛した事が無いと云うのか？答は簡単だ。俺がホレた女は俺にホレず、俺がホレない女が俺にホレたのだ。全くどうなっているんだろうねェーこれは。

思い起すと俺が最初の失恋をしたのは、大学三年目の時だ。その娘は高校の一級下で俺と同じクラブに入っていた。そして俺が大学二年の時に札幌の学校に来た。その頃俺は友人と放送研究会を作ろうとしていたのだ。それで彼女を会員に誘い、付き合いが始ったナ。付き合いといっても彼女とその友人、俺と俺の友人の四人で月に一回か二回会うのと、サークルの集りで週一回顔を合わせるぐらいで、彼女と二人だけで合ったのは三回位であった。そして三年目の秋、ケネデーが暗殺される三日前の夜、彼女に愛していると伝えた。ところが彼女には高校時代から好きな男が居たのだナ。それで俺の恋は実らなかった。然しその後も彼女との付き合いは続いた。何故かと云うと、俺は彼女に恋を受け入れられなかったにしても、彼女が好き（愛とか恋とかと云う感情を取り去っても。）な事に違いないし、彼女にしても他に愛する男が居るが、俺に好意を持っている事は確かであったから、二人が付き合いをやめる理由はどこにも無かったのだ。云わば性を離れた男と女の付き合いが成立した訳だナ。

彼女はその一ケ月後婚約し翌年三月卒業して旭川に帰り保母になった。俺がたまに旭川へ行くと高校のクラブの連中が集まり彼女も出て来た。又ある時は放送研究会で「子供の為の音楽会」をやる事になり俺が原稿から照明、演出迄考えたのだが、アナウンサーが足りず旭川から彼女と彼女の同期の女性を呼び一諸に舞台に上った。おまけに、その夜俺は彼女達に部屋を追われ友人の部屋に寝る事になったりしたナ。

彼女は昨年の四月結婚し、俺はその司会をたのまれたが残念な事に熊本へ帰省中だったので出席出来なかった。その代り5月に旭川へ行ったとき、旦那と一諸に出て来て、結婚式の写真を見せてくれた。俺は幸福そうな彼女を見てつくづく良かったなアーと思ったナ。好きな人間が幸せに暮しているのを見る事は全く嬉しい事なのだ。

こうして彼女との付き合いは続いている。その後学生時代に何人かの女が俺に近付いて来たが俺は皆ことわった。その中に十八才の女の子が居たナ。その子はまだ人間を表面的にだけ見て好き嫌いの判断を下していた。又高校が女子校だったから男と付き合った事がなかったのだ。そして放送研に入って来た。俺は一度その子と映画を見に行った。しばらくして手紙が来た。俺を好きだと云うのだ。俺は返事を書いたナ。「君はまだ表面的にしか人間を見ていない。サークルの中には多勢の男が居る。だからなるべく多勢の男と付き合ってみなさい。そうすればどんな人間も何か良いものを持っている事を発見するだろう。その上でもう一度私の事を考えてみなさい。もし君が今後僕とだけしか付き合わない気なら私は付き合いを断る。」とナ。

すると彼女は離れて行った。ところが昨年ひょんな事から彼女と再会した。彼女はこう云ったナ。「あれから一年たってみたらあの頃の私は、竜さんでも誰でも良かったのだと云う事が分りました。本当に申し訳ありませんでした。」と。

俺はそれを聞いて嬉しかったナ。やはり人間と云うものは時々刻々と進歩するものだ。

まあそんなこんなで今に到り、俺は恋愛を知らない。これも仕方の無い事だナ。

こんな俺でも皆は婚約させてくれた。きっとみるにみかねたのだろうナ。イヤありがとう。

もしかしたら、その内結婚式の案内状も俺の知らぬうちに送り出されるかも知れない。楽しみだナまったく。　おしまい

無題

三年目　阿部勝彦

以下は私が入部以来、いかに作業を楽しんだかの回想である……と書くと何人かは、ははぁさては作業のコマーシャルだなと、勘ぐる方がおられるかも知れない。しかしそれは、あらぬ疑いというもので、決してコマーシャルなんぞではない。作業にコマーシャルは不要である。コマーシャルをすべきは、むしろ部員諸君である。〃こんな仕事もありますよ〃〃こんな作業をしたらどうでしょう〃といった具合に、作業主任もしくはサブに対してコマーシャルをするのである。さて、ここまで読まれた方のうち何人かは、またもやははぁさては作業主任のため怠慢をきめ込むつもりだなと、思われる方がおられるに違いない。しかし、それもまた、あらぬ疑いである。仕事を探し出すのが私の役目であることは充分承知である。ただそうすることによって、私の気のつかない点も補われ、作業の効果は倍加するだろうという事である。さらに私のいいたい事は、部を動かしていくのは部員一人一人（かく言う私も含めて）なのだから、全く各役員にまかせっきりにするのではなく、その仕事ぶりを監視する意味も含めて、至らぬ点は補い合ってゆこうという事である。さて、ここまで読まれた方のうち何人の人が、次の事に気がつかれた事だろうか。話は本題をはるかにはずれてしまっていたのである。申し訳ございません。

私が初めて作業の楽しさを知ったのは、入部直後の炭ガラ運びであった。道往く人を眼下に見下ろして、今思えばばかない優越感にひたりながら、初めて馬車を動かす事の喜びに、小さな胸はぶるんぶるんと震えた。仕事の合間に芝生に寝そべって、これから数年間苦楽を共にするであろう新しい仲間と、将来のこと、故郷のこと等を語り合ったのも、その日が初めてであった。

次に待っていたのは、春の部内競技会に於ける全員作業であった。箱番についた私は、上級生の豪快な、あるいは華麗な飛越を目のあたりにして、よし俺もやがては、と秘かに心を燃やしたのだったが、不本意にも果たせずに今日に至っている。

八月の合宿は、練習と作業とトレーニングとに明け暮れ、上級生の目つきより一層きびしさを増した。しかし今にものびてしまいそうな新入生の疲れをいやしてくれたのは、上級生演ずるところの〃エンヤラヤ〃とその他諸々の歌声であった。その〃エンヤラヤ〃とその他諸々の歌との強烈な印象は、幸か不幸か後々まで我々の（ひょっとしたら私だけの）脳裏に焼きついて、電車の中や銭湯の中で、時々ふと無意識のうちに口をついて出た。さらにいま一つ、その歌声はそれまでは人間でなかった三年生を人間にひき戻す力を持っていた。鬼の三年目は、その時から人間として私の目に映ったのである。

ポプラの梢を秋風が払い、手稲の山々は高く澄んだ空に白く映えた。そんなある日、私達はバイントリー牧場へ乾草をとりに出かけた。広大な噂前山麓で走り回る馬達は、どれも皆生々として、

汗と乾草にまみれた私達の体に風は快く吹いた。

冬は雪降し作業。雪もろともドウと滑り落ちるその豪快さ！

春は氷割作業と共にやってくる。冬の間眠っていた馬場に再び活気はよみ返り、若いエネルギーを一点に集中してガンと氷をたたきつけるその音は、小気味よく響いた。

かくして最初の一年間は過ぎた。その翌年もさらに翌年も、作業は同じ事をくり返した。今年もまたそうであるに違いない。が、その事は必ずしも作業をつまらないものとはしなかったし、またしないだろう。作業をつまらないと感じた時、それは作業のくり返しに責任があったのではなかったし、あるいは作業自体の責任でもなかった。作業をつまらないと感じた時、その時私の心は部や馬達や仲間達からすでに遠く離れていたのである。そして再び私の心が部や馬達や仲間達の傍に戻った時、その時作業はつまらないものではなくなり、逆に最初の一年間に感じ得たあの新鮮味すらもって私の前に現われたのである。

馬丁道中記

一年目　橋口　庸

〇月×日千稲に日が沈む頃、お江戸日本橋ならぬ桑園を出発する。西暦二十年にならんとする現在、文明の力たる貨車に乗って九州の地へ行くのだ。乗ろうと思ってもそうたやすく乗れるシロモノではない。やっと座っておれる位の天井の低い住に、馬と同居するのが、我々馬丁に与えられた特権だ。特権といっても余りありがたいものではない。眼下には、絶ず食い物をねらっている四頭の馬がいる。一頭は少々騒しい奴で、手当りしだいにけっとばし、横の奴の顔といわず首といわず噛むのだ。次のは正反対に、図体だけは大きいが、食ってさえおればおとなしい。次は箱根の山ででも出てきそうないかがわしい馬相の持ち主だ。最後のは観念したのか又は角で孤独を楽しでいるのかおとなしい奴だ。夜立ちで別にすることもなく馬に飯食わして寝る。この寝るのが大変で、へたに馬の顔の前に、足でも置こうものなら、例の噛むのを好きな奴が、ガブリとくるから始末が悪い。鼻をならす時のシブキもすごく、麦ワラ帽をかぶって寝ることにする。馬君よ安眠させてくれ。

翌朝函館に着く。日本晴だ。一体貨車というのは気まぐれ者で、一旦停ると、てこでも一日中動こうとしない。朝清並だ。その夜渡し舟で対岸の青森へ向う。船倉で貨車から下りると、潮の臭いが、鼻に強く感じられる。非常に蒸し暑く、馬にとっては大変だ。馬達の苦しみをよそに、我等は客室に登って行く。深夜便の為、客が乗っていないので馬丁だけで客室に寝たわけだが、振返ってみると人並に安眠できたのは、この時だけだった。相棒にたたき起されしぶしぶ船倉へ戻り、陸に上るのを待つ。

青森では又貨車は、一日中動こうとしない。こうなれば我等も腰をすえて、青森をぶらつくことにする。人間は生活環境が変わると、美的臭的感覚がマヒしてしまう。馬ふんか何かがしみこんだ様な上着とズボンそれに破れ放題の麦ワラ帽といういでたちでぶらつくのだから、まさに異様なる姿だ。道中はろくに食えないから、この際とばかりに豚を食う。

秋田美人を横目に見ながらと言いたいところだが、気まぐれ貨車は、いっこうに停ろうとせず、快適にどんどん進んで行く。右

手に浪静かな灰色の日本海を見、左手には、山が海岸までせまっていて、その境を貨車が走る。トンネルが多い為にこの旅は、人馬共に難関で、トンネルにはいるたびに、苦しい思いをせねばならぬ。とうとう一頭のどをやられた。新潟まででると楽だ。食パンと鯨をかじりながら外を眺めると、水田が豊かに広がり、早くも稲刈りが始まっている。黄金の稲穂があるものは整然と波打って並んでいるし、又あるものは突風の何かで、たたきつぶされた様に他に伏している。

大阪を過ぎ、左手に須磨の美しい海岸を見ながら、山陽道を進む。同志は我等が天井が低いので窮屈なのに同情してか、顔前の乾草をがぶがぶ食って、天井を高くしてくれるではないか。なんとこの同志の親切なことよ。例のやたらに噛むやらける奴は、無性にエンバクが好きだ。一旦その臭いをかぎつけるや、それを得る為に涙ぐましい努力を払う。エン麦の袋をひっぱり出したり、とうてい届きそうもないのに、器用に顔を横にし、その長い首をできるだけ伸ばすが、こちらとしては渡すわけにはいかぬ。

下関より地下を通って門司に着く。もう大分は目と鼻の先だ。ところがここからの逃転がノロノロで、どんな小さい駅にも停っていくからすごい。単線だからかの遅くて有名な鈍行が通り過ぎるのを待つのだから、どれほど遅いかが、相像できると思う。その夜のことだ。どしんと下に落ちるや目前にかの図体の大きい奴の丸たん棒の様な足があるではないか。いやもっと悪いことに、我が相棒の上に乗っている。その相棒ときたらねぼけて、誰とはなしにぶつぶつ言っているのだ。とりあえずそこから脱出したが、とんだ災難だった。馬君は、ざまぁ見ろと言わんばかりに、ニンマリとしたのではなかろうか。まあそう言うなよ。明日からは好物のエン麦をたらふくやるからな。こうして夜が明けると、霧雨にくすんだ三重町に着いた。

馬と英雄

一年目　本田　徹

子供達は誰でも自分だけの英雄譚を持っている。彼等はヤマトタケル、義経、千一夜、巌窟王などの御伽噺から随意に、お好みの場面を剽窃してくる。

様々な戦闘、殺戮、拷問。王子と姫の恋。魔法使の没薬、香料、毒林檎。風と星の語る事。人魚の冒険。船の上から尿をする海賊キッド。

これらの童話的断片をあしらって、子供は彼自身が英雄を演ずるところの、素敵な物語をでっちあげる。ヒロインには大抵目下いかれているまりちゃんやさゆりちゃんを据えてしまう。彼女達の承諾も得ず勝手に！

そうして夜な夜なこの単調で矛盾に満ちたお話をみずからに語り聞かせながら、子供達は眠りにつくのである。

幼年の日々、この〝作業〟は私にとってもすこぶる楽しみの多いものであった。もちろん私をめぐる外的生活は余りにも見窄しかった。大人達はちゃらんぽらんで為体で、もうどうしようもなく見えた。その上私自身の生活だって、物語の英雄のそれに比べたら遜色著しいものがあった。それでも数々の英雄譚は少しも遠い世界の絵空事に思えないのだ。大きくなってからの自分を〝英雄〟として思い描いてみせる方が、〝情ない大人〟として描くことよりずっと容易であった。それだからこそ私にとっては英雄の

方が遙かに実在の色香が濃かったのだ。私の心は英雄だけでいっぱいだった。貧しい人々、不平等をかこつ人々、情ない大人、そんな者等を春顧してやる気持は毛頭なかった。

自分だけが豊かに生きる事を願い、弱い者には同情を払わず無関心を装う。他方では、こってりとした極彩色の世界の中で、嗜嚐を冒険の喜びを尽くしている……。

そんな私がファシストでなくて何であったろう。

ところが、一朝目醒みて「俺」は気付くのである。王子は姫を力で勝ちとった。それは良し、しかしあの美しい、雄渾な物語の影に消えていった人々は今どうしているだろう。可愛相な小人。王子の矢に射られた豪傑。いけにえの羊。物語の影にはかなく仆れていったあれらの脇役は今何処に？

王子は姫を両腕にかき抱きながら、そんな感慨に耽るのである。

他人に対する思いやり、俺ばかりがこんなに幸福であってよいのか？……そんな考えが子供心のうちにふと萌しはじめた時、彼はすでに老いたのである。

そんな風に俺は大きくなっていった。俺の心にはもはや幼年時代の飛翔の夢、戦闘の夢は名残をすら留めていない。俺はもう子供ではないのだから、人の迷惑を考えなければいけないのだ。俺が馬上豊かにサーベルを振りまわす光景を夢見んとすると、決ってそのために苦しむ人々の呻吟が聞えてくるのだ。

人類愛。社会主義……ああ、いまや譚詩の行間に埋れてゆくべきさまざまなものをこれらの有難い思想が救済に導く。王子様はもう要らん。殺戮はこれをしてはならない。と。　よしよし分った。この世が俺一人のためにあるのではないと知ったいま、もはやファシストである事は許されないのだ。

だがそれでも俺は忘れはしない。馬に乗りなし、蛮族や夷狄を切伏せたかっての英雄たちのことを。彼等とてやはり大人になれば、弱い者へのいたわりや愛情を持ったという。それでも彼等は英雄でありました。

一人の英雄が駿馬にまたがり太刀を振うだけで、世の中がひっくり返り、正邪の決着がつき、美しい姫君が手に入る時代がかって地上にあったのだと俺は聞いている。そんな時代のことを思いやるたびに、俺は思わず涙ぐんでいる。英雄たちの時代はもう甦ってはくれぬものだろうか。

もちろん滅んでゆくのが馬と英雄ばかりであるなら、さして悲しむこともない。俺にはしかし、彼等の没落がもっと大きな問題をはらんでいるような気がする。民主主義やヒューマニズムは確かに偉大な思想であろう。だがそれと引替に、人間は何かを失ったはずだ。

そう、今の世では人間そのものの偉さを目の当りにすることはない。人間の偉さを知るのはいつでも、核兵器や官僚組織や〝人民〟を通じてであって、単位としてこの人間はもはや英雄ではあり得ないのだ。大砲や軍艦がもうとうに英雄をなきものにしたのだから。

そこで俺は時々こんな風に思う。

「馬に乗っての戦さがかなわなくなったいま、人間よ、お前にどんな栄光が残っているというか。」と。

おわり

「女子戦に出て」

一年目　吉田順子

私が当たった馬は団体戦ではニュースタイルというまだら牛のようなもようの馬で満点馬だときかされていました。本当にうわさ通りいい馬で、その日最近に乗った人は軽く満点でかえってきました。ところが次の人あたりから失権が多くなり、私が乗った時など、二つしか飛ばず三つ目に失権。本当にあわれな最後でした。ところが結果を聞くと、相手の人も二つしか飛ばず、馬に乗ったという気がせずにいました。その日のうちに、個人戦の順番と、乗る馬が決められ、私は翌日の一番最後にフロスティーという、またまた満点馬にあたりました。当日、フロスティーにのる人はほとんど皆、満点にちかい点でゴール。私もあわよくば、ゴールくらいできるかもしれないと、胸をわくわくさせながら、順番を待ちました。五十嵐さんから最後の注意をされ、登場、スタートをきるともう何もわからなくなり、才一・才二……無我夢中でとんできました。自分ではわりといい調子で飛んでいるとおもっていたのに才八の二番目の障害でとまられ、ついにここで最後となりました。あとで五十嵐さんに脚の力が弱いといわれ、がっかりしました。

おもうに、重たい馬や難馬などでゴールできる人は技術的にももちろんしっかりしているが、絶対飛ばすんだという気迫がすごいと思いました。ほとんどの人が飛ぶ寸前でかけ声をかけたり、していました。試合が終わってみると、なんとなくむなしさがのこっていました。急に朝清の顔がみたくなり、やっぱり自分のクラブの馬はいいなぁと思いました。

「初詣」

一年目　佐藤潤子

一月三日、初詣。五時半集合。零下十四・七度の厳寒である。湿っていた手袋が凍りついてしまった。半沢先生もお見えになり、北瑛に乗られた。初詣はもちろん、街乗も初めての私だが、北晟に乗せてくれた。ふと見渡せば、他の四人は二年生で一年目は、私ただ一人。北晟、朝清、北凉の順。途中で北凉が先頭になってから、速歩の号令がかかった。前の馬が走り出すと、北晟も意外なスピードで走り出した。その速さに驚いて、ハミを引いたがスピードが落ちないので、このまま一頭でどんどん行ってしまったらどうしようと心配になった。しかし、まあ、ためしに、手綱をずっとゆるした。果たせるか、北晟はひっかけない。前の馬に近づくと、ちゃんと歩度を落すのである。不安は次才に去った。最後の星が消えてゆこうとし、街はまだひっそりと静まり返えっていた。早朝の街の速歩はすてきだった。しかし道は悪かった。近来まれな大雪が、車のミゾを形作って、カチン・カチンに凍りついている。電車線路を横切るとき等は、馬も人もひやひやした。ここで、前代北潭が事故死したという坂下グランドを過ぎ、神社の林を通っている時、北揚が例のようにさわぎ出して雪の中に入った。北晟もちょっと驚いたようだが、すぐおちついてくれた。北揚もまもなく、おちついた。私は、この間、北揚で落ちてい

るのでやっぱり二年生だなと感心した。神社の前で六頭が整列した。〝一同敬礼〟新年の新たな思いが感じられた。馬上での初詣は、何々風流であった。帰りは、裏山道に出た。落ち着きのない北揚が、北瑛の前に行ってくれてよかったが、今度は北瑛にけられないよう注意が必要だった。だまっていても、ちゃんと歩いてくれるので、脚の使い方を研究した。前から注意されているように、上体を振らずに、軽く使おうと努めた。常歩の時は、片方ずつ脚を使うと良いと教えられたが、むずかしくて続けられなかった。二十丁目を横断する時、向こうから、バスが来た。北晨は速歩で渡ろうとした。私も早く渡りたかったので、おさえなかったら、大分興奮してしまった。そこえ横から急に犬が吠えついてきた。北晨は驚き、非常に不安定になった。

こんな所で落ちたら大変だ。私は落馬を免れようと、全身の神経を集中して、バランスを保ち、馬に声をかけた。絶対に落ちられないと思えば、結構落ちないものである。北晨も落ち着いてくれた。正月のせいか、七時を過ぎても人通りがまばらで帰りも大分速歩をした。街乗始めての私も、最初の頃の不安は除々に去り、馬への信頼と少々の自信が生じたように思う。事故もなく、無事に馬繋場にもどった時、うれしくて、燕麦をいくらやっても足りなかった。

札幌市南二条西十二丁目
初代部長　永　井　一　夫

馬上道路を又山野を行く時の会心の気持、騎乗出来るもののみの知るものである。現今特に若い人の間に、自動車がブームを呼んで居るが願わくば、馬術部員諸兄軽々しく馬を車に乗り代える事勿れと祈る。

弘前大学農学部二十八年卒　斎　藤　善　一

前略、昭和四十年度部報有難く受け取りました。諸兄の御苦労、御活躍の程がしのばれ、大変楽しく読ませて戴きました。今年も尚一層の御活躍の程期待して居ります。当地では馬に乗るどころか馬を見ることも滅多になく、徒らに長靴をみがいて居る有様です。それでも今年は隣県秋田で北日本があるという話。準備不充分の為返上の可能性大ときいて最後に苦言。部報の名簿にミスプリントが多く、気になります。特に前部長の喜→善のミスは二ケ所にあります。

御健斗、御発展を祈ります。

千葉県茂原市早野三五五〇
誠和寮　松　永　武　彦

拝啓、多忙にまぎれ、卒業後初の便りが一年三ヶ月後。先日四十年度部報送付していただき、朝もやにかすむ手稲山や朝日に輝くたてがみが眼に見えるようにうかび、（不思議に自分の過ごした四年間がなつかしかった）馬術部という場にあって、力強い、

躍進的な時期を過しつつある、現役諸君が少しでも、予算面のわずらわしさから解放されるよう、自分の平素の怠慢をタナにあげて、後援会の発展を期待します。創立四十年の事業、新馬購入、技術面でのコーチの問題等、事務局一任、性今は若干ショボクレていますがそのうちなんとか、―。

昭十五年卒　西村雅吉

函館の水産学部へ移り、元気でいます。時々は、乗馬クラブで乗っています。教養時代に馬術部に籍をおいた学生もいますが、部の水産学部の出店はまだできていません。

昭和四年卒　中野友二郎

昭和三十九年三月新潟県立高田農業高校長を最後として退職、其間教職にあること三十三年、校長勤務十八年、主として農業高校（新潟県内のみ）に勤務、退職後、現住所で子供達の為港造りに専念、昨年六月、日本科学教育研究所、科学教育研修センター（八王子楢原町）の研修事務課に勤務、其道の一年生として再出発、先輩の御指導を頂いて驕座をしめて勤務に専念しております。

過ぎし日夢中になって馬に乗っていた頃を夢に画き乍ら。

昭和四二年一月二十九日

昭四十一卒　黒沢道雄

前略、会則改正案賛成致します。十一日に淵野辺に行き、東日本馬術大会を見てきました。現役部員の活躍振りを見て心強く思っています。寮からバスで五・六分の所に横浜乗馬クラブがありますが、時たま見に行く程度です。

小生四月より新たに社会人となったわけですが、五月一日付をもって、川崎製鉄所条鋼課大形係に配属が決り、今は実習中で作業員の人達と一諸に働いており、「作業」が思わぬところに役立っています。

草々

昭三十四卒　村山哲

皆様お元気のことと存じます。

小生今回左記の会社へ転職することになりました。今後ともどうぞよろしくお願い致します。

（本田技研工業株式会社　大阪支店営業課）

目下鈴鹿工場でオートバイの組立作業の実習中であります。

昭十三卒　高井久芳

盛夏の折、馬術部員は馬の調教練習と頑張ってることでしょう。後援会の一員として馬術というより特に飼うということについて種々困難な問題が多いと思いますが幹事の方々にも御苦労が多いことでしょう。
後援会事業の発展を祈ります。

昭十二卒　森山武雄

前略　後援会費改正の件異議ありません。四十周年に際しての行事についても原則的に賛成ですが、部との接触のない立場の者では具体案も持ち合せません。在札幹事縮氏一任で結構です。右取りあえずの返事まで。

昭三十九卒　荒木伸也

伸也君は昨年十一月三十日下関港を出航致しましてアフリカの漁業基地ラスパルマスに、一月上旬到着しまして其の後はその基地を根拠地として約二ケ月〜三ケ月間操業し基地に入港する予定で御座いますので郵便物は下記宛になさいますよう御報告致します。

尚、一年位の予定で日本へ帰って参りますことを申添へます。

記

MR. SHINYA ARAKI
TAIKO MARU No2
c/o MARITIMA VASC CANARIA, S. A.
P.O. BOX 2051
LASPALMAS DE GRAN CANARIA SPAIN

昭四十一卒　高野文彰

南国九州はホカホカと良い天気で札幌の寒さなんてちょっと想い出せない様、長崎出張のあと、二日ほど休みをとって九州横断し別府から大阪への瀬戸の海を渡っている所。長崎は国体開催の意気ものすごく、小生の設計している「亜熱帯植物園」も国体までに開園の予定。長崎から車で一時間半ほどの位置にあり天草の海を眼下に見下ろすとても良い所、その上、設計者がいいときているから……一人でも多く国体に出場し、見物に行って下さい。あれを見たら三年は長生きできるでしょう。
O・B会が一月二十九日に行われる予定、その他東京のOBにこれといったニュースはない様子。
札幌へも行きたい——と思いながらなかなか行けず、六月に

はぜひと思っています。五年目四年生の皆なも残りわづかになってきた様子、知っている顔の多いうちになるべく多く来札のチャンスを持ちたいもの。

風の便りによれば、ダンスパーテー・学生部、いつも難題をかかえて大変な事だろうと思いますが、愛する馬のためを想えばなんのその……。

北飄はじめ、八木夫妻、モロモロの諸君にヨロシク。

総合馬術について

五年目　山村　勝

実際に本当の総合馬術競技を経験していない私に、総合馬術について書く事は難しいし、馬歴も少ない私如きがこんな大それた事を書ける筈もないであろうが、私なりに考えている事を述べるつもりである。

①総合馬術競技というものについて

部で良く「総合」という言葉を耳にする。馬術部において考える場合、馬場馬術と障碍飛越があり、その各々の一つしかやらないものに対して、両者を併せてやるという意味での「総合」という風に考えられているようだ。この意味では我が馬術部では総合を全て総合馬といえよう。しかし上のような意味をつきつめて、ちょっと辛辣な見方をするならば、馬場馬術と障碍飛越の最高峰を極められない故に、両者を少し程度を落し、両者をやるのが「総合」だという事も出来よう。オリンピックを見て障碍と馬場のただミックスしたものだけではない。これらと全然異った、そしてそれらから離れ独立した種目であると私には感じられたのである。そして総合馬術競技の為に調教された馬によって争われるのが総合馬術競技であるという事を痛感した。であるから我々の言う「総合」はむしろ「複合」というべきであろう。まあオリンピックと我々の立場とを、混同したような感じはあるかも知れないが、以上が私の総合馬術に対する一つの考え方である。そして更に、オリンピックと我々の現在とは、あまりにも違いすぎるかも知れないが、学生自馬大会で行なわれる総合馬術競技を目指す上にも、従来の「総合」を脱した方が良いのではないか。総合馬術に必要なものは、旺盛な前進気勢と柔軟性・従順性・軽快性といわれている。これらの言葉の意味について、どうこうする事は私にはちょっと難しいのでここでは避ける事にしても、総合馬術のもつ口には言い表わせない素晴しさはこれこそ馬術だとも言えるのではあるまいか。そこにおいての馬場馬術は、純馬場馬術とは異った馬場馬術であり、障碍飛越においても、異負なものであるような気がする。最もオリンピックの純馬場馬術においては、私が今迄自分なりに考えていたイメージとは異っていた。そしてそれは優雅さというよりむしろずっと力強さを感じさせるものであり馬術というものが従来特権階級のものであったのからスポーツ馬術への脱皮でないかとみる。総合馬術においてこそこの要素が最も要求されるであろう。とにかく型にはまったような優雅さよりも内から滲み出してくるような力強さこそ、その生命ではないかと私は考えている。うまく具体的に言い現わせないが、私なりの総合馬術に対する考えである。

②学生自馬大会と部の現状

大それた事を言ったようであるが、現実の部が今最も力を入れ

ているものの一つである、全日本学生自馬大会と我部にしぼって述べてみたい。我々が毎年参加する、学生自馬大会は、今我々の手の届く所で最も総合的な競技会であるが、勝手な事を言いながら、北大の最近のこの試合における成績はどうかときかれると余り、芳しいものとはいえない。はっきり言ってまだ北大のレベルは低いといえよう。三日間行なわれたそのいずれも、大分差があるとはいえるが、主にその耐久における面をとらえてみたい。

最近の特に今年の自馬大会ではフル増点をもらう馬が多くなっている時、当然の事として我々もそうならなければならない。これをのり越えなければ、良い成績は上げ得ない。この大会のコースは五六Kmで決して特別に厳しいという程ではない。鎌田先輩はあの位のコースならば普段の練習によって、それ位の体力は養なわれる筈だという事を言っておられた。確かに五六Kmなら普通の馬は充分走れる距離であり、障碍があったとしてもまだ大丈夫な筈である。我部から今まで出場した自馬大会の成績は、ここ四・五年余り良いものではない。その原因はいろいろ上げられるであろう。一般に試合での報告を聞いても、人間のボコで負けるのはもっての外ではあるが、その他馬の調子が良くなかったとか、あそこの回転が失敗した、あそこでこうやればとかいろいろであるが、いやしくも、責任者としてその馬を任せられ部の代表として試合に出場するものが、人間のボコから等といっておれないだろうし、馬の調子etcの細かい失敗についても自馬の試合においては全てそれ以前の調教の失敗に帰するものである、という事を認識すべきだ。あそこでこうやっておればとか、あの時落下しなければとかよく聞かれるのであるが、結局それを言い始めたらきりがないし、誰でもそう考えるであろう。試合は全て調教の結果であり、出るべくしてその結果がでたのであり、そのような小さな事にこだわらず、調教の跡をふりかえってみるが良い。一落下、あるいは一拒止の差の大きさは、まだまだ大きいという事に気がつくであろう。であるからその失敗は馬には何ら責任がなく、たとえ馬自身が厭がって止ったり逃げたりしても馬転でも人間の責任であると私は考える。それは調教において馬にそのように教えたからこそあるいはそういう結果になったのである。さて話はそれたが自馬大会で余り良くない原因を皆で良く考え直す必要はあるが、私はその一つに体力の問題があると考えている。耐久力審査はゴールしたとしても余力審査で失権するという事にもある程度それがいえるのではないかと思う。去年この大会には北海が参加したが持久力審査はゴールしたが、余力審査で馬転し、失権した。これはただちょっとしたつまずきで馬転しただけだったのだろうか、それは私には判らないが……。その前年あるいは前々年にも同じようなケースだったがこれを一概に体力の問題とは言わない。たかが馬転位は馬場内でも時々やるが、しかし、それだけでもやはり、敗であり、私は調教の結果であり、野外を走り回る等の総合馬としての調教の欠如と考える。体力の問題からそれたが、馬というものはたかが五・六Kmは必ず走るものである。それはまあ明らかではある。そして普段の練習で充分なのだという鎌田氏の言葉をかみしめてみよう。かって北翔が騎手のボコはありながら、自馬大会で持久力・余力ともゴールした事があった。この夏に鎌田牧場に二ケ月北翔がおせ話になったのが大きな原因ではなかったかと考える。その間二度、鎌田氏の調教を見学し、又話を聞いた所では、そこに於ける氏の言われる普段の練習の内容は我々の普段の練習とは大きな違いがあることを感じた。技術の差

種々の条件により違うのは当り前だといえばそれまでだが、この差を我々の出来得る限り縮めるのが今後の課題ではないかと考える。この間の鎌田氏の調教は三十九年度の部報に高橋が書いているので省略するが、私が特に感じたのは運動量とそれを馬場内だけでやるのではなくいわゆる自然の中で行うという事である。なる程この普段の練習なら、自馬大会位と思ったことである。しかしそれまでやらなくても、五・六Kmならばという人もいるかも知れない。が試合に臨んで走ることは走ったが、それが精一杯の場合と、余裕を持って走ったという違いは大きいと思う。そして普段の練習において、これほどやらないでおいて精一杯で走り終えるというのは、やはり馬に無理をかける事になるのではないだろうか。何故なら、普段やらない事を馬に要求するのであるから。

③今後の問題

我々は必要以上に恐れているようだ。馬の運動量という面について。それは次第に馬を知らないという傾向が強くなって来たからではあるまいか。であるからもっと馬というものを知って欲しいというのが、まず第一の課題である。その上で、その馬に最も合理的な運動量と、それの配分を考えるべきである。一般的には今の我部の飼料の量から言ってもっと増やしても良いと思う。あとは各責任者が個体差を考慮して行えばよいのである。

次に運動量についてであるが、一つの指標として、持続駈歩（速度は忘れたが）二十分を得るには6ヶ月必要と、何かの本で読んだ。このうち現在も行っているのであるから、少し差引くとしても、少くとも短期間ではないといえよう。大体自馬大会ではそれ程の距離はないとしても、これ位は必要なのではないかと思う。実施に当っては、これを馬場内だけで行うのではなくて、総合馬なら種々の所を利用して行うのが最も良いと考える。北海道は馬産地で、馬の飼育の面でも環境にも恵まれているとは言われるが、札幌の街の真中にあっては、北海道もどこへやら、近年の自動車の増え方も著しく、その他をみても、決して恵まれていると、うぬぼれてはおれない。街へ出るには危険を伴い、伸び伸びと走り回れる所は仲々ないのが現状である。しかしこんな繰り言を述べても仕方がない。やらなければならないのではないか。ちょっと目を拡げて眺めてみると利用できる所も結構ある。最も手近に競馬場がある。練習時間中に週二回位行って、時計をみながら騎手の速度感覚を養うのも良いし、下級生の練習にも、馬は伸び伸びと真直ぐ走るであろうから、馬場の中で偶角通過がどうの、内方脚がどうのといわれ体が硬くなる事もなく速歩、駈歩について行くのも、すぐ感覚を得る事ができるだろう。これによって馬の方も肺心訓練となるだろう。調教は上級生でなければできないというものではなく、時間が足りなければ、下級生に右のような運動をやらせ、同時に騎坐感覚を養い、上級生はそれ以外の細かい運動をやれば良いのである。このように週二回位なら決して実行不可能とは考えられない。やらないのは人間の億劫と怠慢からではないかと思う。このように競馬場を利用する他に円山週辺、特に幌見峠、藻岩山や西の方、北方面などを歩き回るのも良いだろう。順致を兼ねた格好の場所といえよう。

中央道路のクラーク会館（八条）～教養部（十八条）約一Kmを準備運動に利用し、速度感覚を養うのも良い。冬は馬場が使えずどうしても準備運動の運動量が判りにくく中途半端に終っている傾向がみられるので、これによって、それを考えればよい。ただ人通りが多くなると危険であるが、早朝に実施するにはもってこ

いである。上に述べたのはいずれもその一例であり、いろいろ考えればまだもっとよいものがあるだろう。要はその馬を良く知りそれによって各自責任者が考えれば良い。

④おわりに

いろんな事を述べてきたが、全て現在の部の練習において実行可能な事と考える。

とにかく計画的に、着実に、億劫がらずに歩んで行けば、良い成績となって表れるであろう。各責任者は今年こその意気で練習に励んでいるだろうが、毎年同じ事を繰り返し、同じような失敗をしているように思えてならない。だから人だけではなく、上級生責任者間で良く話し合い一緒に計画を立て客観的に見てみる事も必要であろう。我々が雪の中で、シーズンオフ的な考え方に立っている間にも、雪のない所では、オフではないのである。更に去年から東日本大会にも出場するようになり、今迄のように春からシーズンインだという考え方では間に合わない。雪が消えた時にはもう最高調に近くしておかなければならない。しかし冬の間の厳しいコンディションを克服する事は我々に別の力をつけてくれるのではないだろうか。

これから書くことは、体力に関してではないが、気がついた事として読み流してもらえれば結構である。オリンピック以後全般的にレベルが上がって、各種大会における障碍の高さも上がってきた。そして色んな障碍が設置されるようになった。いわゆる奇抜なものも少なくない。このような物は、これからもどんどん用いられるであろうし、今迄のような画一的なものでなく、独創的になってくる。又変わったものも、多くなってくるだろう。これは、競技の質が上って来、その試合に出場しようとすれば否応なくこれを飛越せざるを得なくなる。それを飛越する馬がいる以上、何のかんのと云えない。翻って考えたなら、ここで差をつけるところでもあろう。×これに打ち勝つためには、どうすべきか。このようなレベルアップの時に、馬を人間が飛ばせるのだというやり方ではもう間にあわないのではないか、というのは、馬が厭がっていたりするのを人間が飛ばすより、人と馬とが一体となり飛越への指向する方がはるかに有利である事は論をもたないと思うのである。人馬一体とは、馬術の心随であり、小生如きが論ずる所ではないが、要するに、人と共に馬も旺盛な飛越意欲を持っている事だ。こんな事は、言うまでもなく、皆さん御承知であろう。しかし、私は畜大と北大の馬を比べてみると、北大の馬が障碍に向った時、見劣りがすると思う。もちろん馬の天性の気質の差異もある事と思われるが、畜大の馬はその旺盛なる前進飛越意欲を持っているといえるのではあるまいか。北大の馬は、その馬は、その天性のものについて見劣りする所ではなく、ずっと勝っているといえるのではないか。それなのに、畜大の馬は障碍に向って行き、飛越を敢然として完行する。そこに馬自身が根性とでもいうべきものを持っているかの如くに見受けられるような気がするのである。その気迫というべきものは、全く素晴らしいと思う。例えば、新潟の複合において、半分位失権した七m五〇の水濠を完全な飛越態勢をとって飛越を完行したのは鳥華ただ一頭だけであった。他は皆落っこちたともいうべき中で。これを僕は、ただ馬の性質だけの差ではないと考える。このような馬をつくることが本当の調教であろう。馬を精神的に調教するとでもいおうか。馬が自然の姿で行う所の各種の運動を人為の下で再混させる

のが、調教・馬術の目的であるとすれば、馬は決して機械視する事もなく、自然に還すとでもいおうか、自然の中にいる時のたくましさを失せないで、それを一層増してやるのが最とも良いのではないか。調教といえば、ともすれば馬体の柔軟性、従順性を求めるという事におち入り易いと思うのである。それだからこそ上級生が乗ると調教し、下級生には調教は出来ないのだという考えに陥り易い。上級生といってもたかが、三・四年の馬歴で何が出来るか。それでも我々が調教をやるという事になれば、やはり、技術的なものよりも、この精神面を我々はより重視しなければならないのではないか。千葉幹夫先輩が我々に、馬というものは、いくら下手でも一人の人間がコツコツと乗っていれば、結構良くなるものだ、という事を話してくれた。これこそ、調教とは技術のみではないという事を明示してくれたと思う。この事を考えるならば、下級生を乗せれば、くずれる等というケチな考えを一斉捨てて、下級生共々、調教に参加すべきであり、クラブの馬なら尚一層そうであるべきであろう。その時に、馬に苦痛を与える事なく、馬を可愛がって飼育してゆくなら、のびのびとした自然的な馬が出来るのではないか。馬場馬術においてもそれはいえるであろう。型にはまった馬の姿勢を脱して、馬が内からわき出してくるような前進気勢をもってのびのびと運動することが馬場馬術の真の意味であって、大勤によって馬に苦痛を与え、強引に行うのが馬場馬術なのではなく、馬に苦痛を与えることなく、自然の状態を再現させるのが馬場馬術だと思うのである。話はそれたが、畜大の練習をあまり知らない。しかし、話を聞くと、そこにはそれだけのものがあるような気がするのである。それを知り、我々なりに考えてみて、良い所は素直に認める事が必要であろう。

ただ盲従する必要はさらさらない。余談になるが去年の帯広での選大会を振り返ってみると、我々は試合の十日位前に乗り込んだ。僕は北瑛を連れて行かないつもりであったが、北翔の乗確により、一応連れて行く位のつもりで行った。そして毎日あの広い帯広の自然の中を走り回わったというより、歩き回った。障碍は大分新しいのも出来ていたが、その頃の部員全体の考えとして、北瑛はもうだめだというのが大勢であり僕としてはとにかく無理をしない主義で全然といって良い程飛越練習をしていなかった。しかし、いざ中障碍に出てみると、良く飛んでくれた。ここでもう終わりだろうと思い続けながら、飛んで行く複雑な気持であった。結局最後の三段で失権したが、あるいは騎手がこう弱気でなかったらと今考えると残念でばある。しかし、これによって得た自信は大きく、それ以後部の大勢を占める意見に反撥して獣医学的にダメだといわれた北瑛がまだ使えるという確信を持ったのであるが。この時の北瑛が示した見違えるようなたくましさはどこから出て来たのであろうかという事を考えてみてあの自然環境の中を歩き回ったのが原因ではなかったかと思う。そして帯広の環境がとてもうらやましく思った。とにかく、あの広々とした所で十日過ごしただけで、こうも違うものかと。このような恵まれた帯広に対抗して、我々がやれる事は野外の順致以外にないだろう。馬場を離れて、どんどん運動できるようになれはといつも考えている。かって岩坪氏が順致と従順性とは切り離して考えられるものではないが択一だったらどちらを選ぶかという問に対し、順致と答えられた。僕はその時、競技会に出てくる初めての障碍を全て順致する事は不可能であり、全然初めて見る障碍の場合、従順性さえあれば飛ばす事ができるであろうから、従順性の方ではない

かと考えていた。しかし、最近ようやくそうではないという事に気付いた。僕なりの解釈では、先にのべた、馬が飛ぶとの違いを考えたのである。従順性を重視すると、どうしても、馬を機械視する方向に入り易いのではないかと。しかし、この二つはどちらともいえず、両方を分離して考えるべき問題ではなく、表裏一体となって向上するものであるから、とにかく順致する事により、従順性が得られ、それによって、順致がやり易くなってくるのが本当であろう。

それから、これは実現できるかどうか判らないが、現在部で実施している夏の合宿は、そのまま馬場を使用している訳であるが、これを（せめてこの中の一回を）他所で行う事である。その場所はなるべくなら広い牧場等が最適と考えられるが、馬なら頓殺も何とかできようし、日高あたりに行けたらなあと考えていた。これは夢としても、これに近い事は、本当に不可能だろうか、真剣に探せば何かこれに近いものが浮び上がって来そうである。とにかく狭くるしい馬場を抜け出して、広々とした所にいつも飛び出し走り回りたいと考えていた。恐らく馬もそんな事を考えているのではないかと思う。

とにかく、馬と一緒に自然に還れといいたい。

伊太利方式と総合馬術との関連

岩坪　徹

総合馬術競技に於けるスチープル・チェースとクロスカントリーに於いて伊式の有利である事は今更言う迄もないことだ。問題は伊式の要求と、総合馬術調教審査の要求との間に矛盾はないか？の点に帰結する。之に就いて二つの相異る立場が考えられ夫々相異る解答が生ずる。

オ一の立場としては「総合馬の調教審査に於ても、或程度馬場馬術的屈撓収縮を必要とする」との前提に立つもの、オ二の立場としては「馬場馬術的屈撓収縮は不必要、只図形と運動及び野外馬的態勢の正確さのみ要求する」ものの二つが考えられる。オ一の立場から考えれば伊式はオリンピック総合馬術競準備のためには不適当な方式なり、と明瞭に断言出来る。それは無論スチープル・チェースとクロスカントリー用の訓練を別にしての話ではあるが、尤も之も程度の問題であって優透な馬匹に巧妙な騎手が在意して調教を施せば或程度迄は自然馬術馬としての性能を滅殺することなく、馬場馬術的態勢を保持させる事は出来る。或いは逆に馬場馬術馬に疑似自然馬術馬的態勢をとらせる事も出来よう。併しそれは馬匹の優秀、騎手巧妙の他に更にもう一つの事項、即ち一方式の調教を阻害せぬ程度に他方式のそれを制限する事が絶対に必要だ。両方式の理想を同一馬に於いて同一に具現する事は啻に現実の問題として困難であるのみならず、両方式の性格から言って理論的に不可能だ。馬は生物として個有の感覚と肉体とを持つ動物であって、鋼鉄やゴムやプラスチックで出来た機械ではない。人間の総意の儘に勝手に材料を変更したり、部品を取り代へたりする事は不可能だ。之を敢て為さんとする者は馬の性格と馬術の原則を無視するものと云う可く、到底馬術芸術の殿堂に入るを許されない。仮令競技家としての成功を一時的にかち得る事はあるとしても、まして馬場馬術馬としても優秀だ等と思うのは自然馬術に対する門外漢の考える事だ。虚だと思うなら馬場馬術

特有の収縮姿勢をもって山の中を、凹凸の多い丘陵地を石のゴロゴロした河原を、伸長駈歩で走り廻ってみるがいい。果してその姿勢が此の種騎乗に適して居るか否か一時間以内で了解出来るだろう。

次に才二の立場に於いて、即ち総合馬術調教調査には、馬場馬術的要素は不要なりとする立場について考えよう。

総合馬術の調教審査程度の運動ならば別に屈撓収縮（馬場馬術的の）しなくても、或程度生まれつき軽快で柔軟な馬匹ならば、つまり器用な温血馬ならば純然たる野外馬的態勢をもってしても充分やってのけ得るものだ。だから馬場馬術的要素さえ不要ならば伊式馬に総合用馬としての調教を施す事はさして困難な事ではない。尤も前述の通り或程度馬を選らばねばならないが、苟しくもオリンピックの総合用馬を仕込むとなれば方式の如何を問わず候補馬を敢選せねばならぬ事は当然なのだから此の事は別に問題にするに当らないとすると才二の立場に立つ限り伊式はオリンピックの総合用馬の馬場運動を仕込むのに何等矛盾撞着する処はない、といえる。併し若し才二の立場でも差支えはないけれど、馬馬術的要素をも備えて居なければ良い点が取れない。と云う事になれば、参加者として出来るだけ良い成績を上げるには更に冒険をしなければならなくなる。即ち伊式調教の有利性を減殺する事なく馬場馬術的要素をも或程度満足させ得る様な調教をせねばならなくなる。之は必ずしも不可能な事でもないし、又馬を選びさえすればさして困難と云うわけでもなかろう。併しその馬場馬術としての理想に到達すべき性質のものではない。競技出馬の必要から中途半端で打切ってしまったものだ。若しそれを理想のものに迄築き上げるとすれば野外馬としての性能を放棄するか或いはそれを才二義的のものとせねばならぬ。つまり野外馬たると共に馬場馬たらん事を求めるのは仮令それがオリンピック競技の要求であるとしても（オリンピック競技の要求は決してかかるドグマティクなものではないことはH・E・Tの性格から見ても明らかだが）馬術的に見れば邪道だと云わねばならない学問に正道がない如く馬術芸術にも近道は存在しない。否、只管馬術的に努力する事こそが理想への最短距離を辿る所以だと云えるだろう。目前の名利に眩惑されて利道に踏み入るが如きは馬術家としての自殺行為だと言わねばならぬ馬場馬の馬場運動と総合馬のそれとは単に調教程度の差のみならず質的に異るものがある筈だ。吾々が綜合馬術の準備をする場合には老練な野外馬の規定の必要とする程度の馬場調教を施してそれに慣熟させる様努めるべきであって（之すらも馬術的には無意味な事ではあるが）決して馬場馬術と自然馬術を無理矢理にくっつけ様としてはならぬ。両者は元々異質のものであり、全々別個の理想を持っているものだ。このことを理解しないで中途半端な折衷的の調教を施すことは単に馬術的にみて無意味無理想であるのみならず、かかる生半可な調教をもってしては困難な野外不斉地を突破する際、安心して騎手の生命を託し得るような野外馬を、すなわち、真の意味での綜合競技馬を作り上げることは出来ぬのではなかろうか。

（馬術情報より転載）

× × × × ×

「馬場馬術の教育方法」

卒業生　近藤　喜十郎

本文で述べた「馬場馬術」とは綜合競技の調教審査（いわゆる「国際馬場」）程度までの馬場的技術の事である。現在、部員の殆どが部生活で「綜合競技」に出場する事を目標としているが、残念な事に具体的な方法や手段をしっかりと把握せずに只、単に口で唱えているに過ぎない様に思われる。特に馬場馬術に対する研究不足と練習不足が目につく、いやしくも綜合競技を目標にするならば軽視してはならない。自然馬術方式に対する認識が高まり、積極的にその技術を学ばんと努力していた態度は喜ばしいが、自然場術方式で調教され、国際馬場を踏める馬がまだ北大に出来上がっていないし、全馬が上記の様な調教を受けた馬に変わるには今後数年の歳月が必要である。現実には、北飆・翔・瓔という自然馬場方式とは違った方法で馬場を調教された馬で試合に出て勝利を勝ちとらねばならない。これらの馬を御す事が出来なければ今年度、来年度の好成績は望めないのである。そこで本文でこれらの馬（他校の複合馬も含む）の乗り方をあえて具体的に述べ猛省を促したい。

まず教える者（以下「教官」と呼ぶ）と教わる者（以下「騎手」と呼ぶ）共に練習で今日は何をするかというはっきりした目的を持つ事が必要である。そして練習の始めと終わりをはっきり自覚する事である。いたずらな精神の弛緩は技術の向上に対して阻害となるばかりでなく、馬術に対する冒瀆であり、さらに悪いのは馬に対して悪影響を与える。「教わる」「教える」という意識と練習の目的を持てば相互に無言の教育を得るものである。教官は指導にあたり馬を最上の状態にしておいて騎手に渡す事に気を付けねばならない。騎手の技術が低い程この事はより重要となってくる。初心者にまず教える事は馬上で体を固くしない事である。一度固くなった体を柔かくする事は非常に多くの時間を必要とする。早く馬を一人で御せさせようとして、騎手のままにさせるとかえって馬にふり回わされ、悪い癖がつく場合が多い。

馬上である程度バランスが取れる様になるまで調馬索運動を行う方がよい。その際騎手の姿勢を細かく注意する事は、騎手に余分な所に力を入れさせる結果となり、固くなる原因となる。目的はバランスの獲得にある根本を忘れてはならない。バランスがある程度出来てきたならば、手網を取らせ教官の命じた蹄跡を正確に歩かせる。この際回転運動を入れないで直行進と直角方向変換のみとし、蹄跡の正確さを注意する。これは最初から絶えず蹄跡を考え乍ら馬を動かす心構えを最初から持たせる為にも必要な事である。ある程度出来る様になったら、次に輪乗り運動を行なわせる。輪乗りは内方姿勢の練習の為には重要である。輪乗り運動は上級技術者にとっても重要視すぎる事のない運動である。最初は半径を五メートル以上にし、騎手が正確な円を描く様にする為、教官は円の中心上に居て、円の歪みに注意する。内方姿勢を教える場合、最初にポイントに置く所は腰である。腰を内方に張る感覚は伸々つかめないものである。教官は騎手に馬上でいろいろ試みさせるとよい。例えば、内方脚をつゝばらせ内方の鐙に乗る様にさせてみる。その際、肩も内方が前出してしまうから、引かせる為に円の内側を見させる。教官のポイントは悪い所を指摘する

のでなく、矯正方法を教える事と、悪くなっている原因を探りそれを矯正するにある。内方姿勢に於いては腰の内方の張りが出来ているかどうかを注意すべきであって、拳・脚などは腰が定まれば次第に落ちついて来るものである。即ちあらゆる運動に於いて、馬場馬術では腰の安定が不可欠かつ根本の要素なのである。

一定の円弧が描ける様になったならば開閉運動に入る。開閉運動で注意すべき事は円を除々に小さくさせる事である。（丁度蚊取線香の型の様に）殆どの場合急激すぎて馬体が円弧の一部になっていない。円を閉じる時は内方の手網に注意する。内方を引くのでなく、外方の押し手網で　誘導させる様努める。円を開く時は内方脚で押し出す事を注意する。これにより騎手は内方の主動脚というものを知る事が出来る様になる。内方姿勢で教える重要な二点は外方手網の張り、（内方手網の緩み）と内方の主導脚である。多くの場合手網の状態が逆になっている。これが上級生になってもみられる。この輪乗り運動は大切な運動（馬術の基礎と言ってもよい　であるから、あらゆる技術の程度の騎手がもっと重視しなければならない。その際、左右の得手、不得手が生ずる騎手が多い。これは不得手な手前をより多く練習する様に努める必要はどんな運動でも同じである。又、外方手網の重要性と内方主導脚を知覚させる良方は輪線上での停止しない前肢旋回がよい。騎手に大鞍銜を持たせる時はまず教官が騎乗して銜を受けさせ、騎手に手網の持っていた所をすぐに持たせて交代すれば、騎手は大勒銜の感覚を簡単に知覚する事が出来る。輪乗りの開閉と併行してもよいが、騎手が馬をある程度自由に乗りこなせる様になったならば、（北大での程度で云えば二年目中頃）馬をつめたり、伸ばしたりする事を教える。これは最初は直線上の方がやりやすい。この時、反動についてゆけなくて腰を丸くするのが殆どであるが、教官は腰を張る以外に馬を手の内へ入れる事は出来ないが、反動が抜ける事はない事を厳しく騎手に教え、絶対に妥協させてはならない。馬を伸縮させるのは脚が主であって決して拳が主ではない事もしっかりと教えなければいけない。以上が出来る様になったならばいよいよ二蹄跡運動へと入る。二蹄跡運動を特別視してはならない。又未熟な騎手に行なわせて馬が壊れる等と紀憂してはならない。どんどん積極的に行なわせて、調教を保つだけの自信と勇気を教官は持つべきである。二蹄跡運動を行なわせる前に注意する事は、馬に充分の前進気勢をつけておく事と、馬体を柔軟にしておく事である。以上の二つが少しでもなくなったら直ちに運動を中止し、その回復に努める様にする。又、長時間連続して行なう事は調教上悪影響を与える。断続的な休みを必ず入れる様にする。特にある程度騎手が出来る様になってくると面白いので夢中になってしまう。この点を教官、騎手ともに気を付けねばならない。二蹄跡運動を行う場合、どこから始めて、どこを通り、どこで終るかという事をはっきり定めてから行なう様に心構ける事が必要である。二蹄跡運動の感覚は始めての者にとって取らえ難いものである。だから教師は馬に騎手に行なわせようとする運動を行なっておいて、直ちに生徒と交代する事が生徒に早く感覚を教えるポイントとなる。最初は騎手の姿勢にあまり注意せず、騎手が運動の感覚をとらえる事に重点を置く事が必要である。最初はらちにそって行なわせ、次第にらちから離れてゆく様にする。教える順としては以下述べる順が絶対ではないが、「肩を内へ」→「斜横歩」→「腰を内へ」→「横歩」というのが順当だと思う。その間に当然、前肢旋回、後肢旋回を入れてゆくの

である。「腰を内へ」は逆半巻きから入らせると行わせやすい。この場合極端に腰が入りすぎる場合が多いから（肩を内へでも同じ）、最初はほんの少しの体勢でよい。要は前に歩かせる事が大切だからである。横歩運動で大低の場合腰が先行するか、肩から逃げる。前者は腰の入りすぎ、（多くの場合主導脚の不足）であり、後者は内方姿勢の不足である。横歩は決して横に歩かせるものではなくて斜前方に歩かせるという事を騎手は知覚せねばいけない。ここまで出来る様になったら、体重の転移をスムーズに行なわせるべく、左右交互に短時間に連続して次の様な事を行なわせてみる。例えば「肩を内へ」と「腰を内へ」を交互にやらせてみるとか、横歩で山形を描かせてみる。すると騎手の扶助の誤まった点が明白に表われて馬が要求した運動をしない事を騎手は知覚する。それによって騎手は自分の欠点を知る。最初についた悪癖は仲々直らないものであるから、教官は気付いたら徹底的に矯正しなければいけない。

以上述べてきた事がスムーズに馬上で安定して行う事が出来る様になれば、「国際馬場」を充分踏める力がついたと云えるし、高等馬術への基礎が出来たと云える。馬場馬術で大切な二点は、「リズム」と「バランス」である。特に「リズム」は重視しなければいけない。観客があたかも馬場に於いて音楽が奏されている様な気持に入ってゆける様な運動は馬術が芸術である証明であろう。馬場馬術は一瞬によって決まるものではないし、騎手の技倆がはっきりあらわれるものである。だから騎手は不断の努力と練習が必要であり、又多くの馬術書を積極的に読み、自分のものとしてゆく様努力せねばならない。「銜受け」という言葉を言われても、感覚的に思い出せるには、理論と実際が一致していなければいけない。例えば現在多くの部員が銜受けというものを引っ張り合いと解釈しているのではないだろうか。「縮緬のしわ」という言葉を思い出すべきである。

教官は以上述べてきた運動を行なわせる時、騎手の自由に任せて馬を動す時間を時々作り、騎手の進歩の度合いを見るとよい。教官、騎手ともたとえ一頭でも部班運動である事を忘れてはならない。

以上きわめて簡単に注意点を述べてきたが、きわめて慨括的な文になってしまった。なにせ限られた枚数で国際馬術までの技術を述べたので、若干誤解を招く所もあると思う。疑問な点が生じたら直ちに質問していただきたい。私も今後、部を離れてもいつの日か又再び鞍上に帰らんと意図している。馬場馬術は非常に難かしいが、又その半面、何よりもかえ難い快感を伴なう運動であり、行きつく所を知らない芸術だと思う。私自身、一平生の時、思田先輩の華麗ともいうべきあの北飆号の鞍上の姿に憧れ、以来八木・野田・滝沢諸先輩を始めとしていろいろな方に教えていただいた。残念な事は夢であった馬場馬を後援会からいただき、後北鵬号を健康回復不可能の為に離厩させねばならなかった事である。しかし、何時の日か北大馬術部に国際馬場どころかサン・ジョルジュまで踏める馬が表われる事を期待している。

現役諸君、誇り高き芸術家として、無限の可能性へ共に挑戦しようではないか。

鮨　　栄

大小御宴会御会合にご利用下さい

札幌市南3条西5丁目
TEL (22) 0487
(22) 8773

パンの店

銀座屋
GIN—
—ZAYA

BAKERY

さつぽろ
Sapporo　南1西17　TEL ㊷0701

北海道大学馬術部名簿

歴代部長

氏名		住所	電話	勤務先
永井　一夫	初代部長	札幌市南２条西１２丁目	２１−２４３５	北大名誉教授
高松　正信	〃二代部長	（東京ＯＢ）		
黒沢　亮助	〃三代部長	札幌市北１条西２２丁目	６１−１０５７	江別市西野幌 酪農学園大学教授北大名誉教授
太森　康光	〃四代部長	函館市湯川町２の８		函館高専校長
松本　久喜	〃五代部長	物　故		
半沢　道郎	現部長	札幌市北６条西１２丁目	２２−２２６８	北大農学部教授

特別後援会員

氏名	住所	電話	勤務先	電話
野間口英喜	東京都杉並区永福町３３５	３２１−７６１７	中央区西銀座８−１日航ホテル 川崎市日進町１−１川崎日航ホテル	５７１−４９１１ 川崎４−５９４１
染谷　五郎	札幌市豊平３条４丁目	８１−８４５６	染谷商会（文具）	８１−８４５６
滝沢　政雄	旭川市パルプ町国策パルプオークラブ内		日本造材社長	
原島　つる	札幌市北２条西２７丁目	６２−１１５１	原島洋装院々長	
庄内　貞夫	〃　白石中央５３の３	８６−２５０４	歯科医	
武田　忠幸	〃　南６条西２０丁目２１３−４０１	５６−３２８６	市内北３０条東１丁目北都ハイヤー北都バス社長	７１−７２１４ ７３−４３２１
山本　智	〃　北１０条東６丁目国鉄アパート		市内北５条西３丁目札鉄公安室 機動隊公安主任（小隊長）	７１−１１１１ 内６２９
小野　忠	〃　北１８条西５丁目	７２−１５２６	北大モータース社長	
鎌田　鉄穂	〃北２１条西２丁目	７１−１８７１		
今井　正			札鉄電名部長	
布浦　敏一	札幌市新琴似町４４６の６	７３−４６９２	札鉄	
富樫　英治	〃　北３条西１６丁目	６２−３８４０		
諸隈　善吉				
阿部　広道			平岸郵便局保安部長	
鷲田　弥作			高大の[illegible]	

稲垣　新一	札幌市南７条西９丁目	23—5860	(札幌乗馬クラブ)	
高橋留次郎	〃　北１４条西１９丁目　札幌競馬場内			
石井喜八郎			石井メリヤス　ルミー[illegible]	
田中　昭志	札幌市北８条西９丁目	23—5860	札鉄	
岡沢　尹大	〃　北２５条東３丁目　八木方		北大理学部高分子溶液物理学教室	71—2111 内 2775
片寄　操			北大農~~芸化学科大学院~~ 教授	

会員（卒業生）

氏名	卒業年度	住所	電話	勤務先	電話
中野友二郎	昭4　農農	(東京ＯＢ会)			
平山　常介	4　工機	(　〃　)			
中谷　勝紀	5　工機	(　〃　)			
間　克市	6 農畜２	(　〃　)			
岩垣　駛夫	6　農農	(　〃　)			
河崎　秋三	6　農畜	(　〃　)			
藤井金太郎	7　農化	ブラジル・サンパウロ在住		漁業	
永松　四郎	7　農畜	(東京ＯＢ会)			
武田　朝男	8　農畜	(　〃　)			
東園　基文	9　農農	(　〃　)			
(7主) 田畑　武夫	１０　医	札幌市南５条西２丁目		田畑産婦人科病院長	
久葉　昇	１０　農畜	兵庫県多紀郡城篠山町郡家８７５の１		兵庫農大教授	
槙村　勘一	１０　農畜	(東京ＯＢ会)			
(8主) 本田　桓康	１０　工機	(　〃　)			
加藤　英夫	１１　医	札幌市南１条西２１丁目	62—6527	市内北２条西３丁目　朝日生命札幌支社	24—9231
高杉　直幹	１１　理化	〃　北７条西１３丁目	24—3720	北星学園大学教授	
(9主) 脇田代子郎	１１　農化	(東京ＯＢ会)			
(10主) 大迫　明徳	１１　理化	(　〃　)			
吉見　一郎	１１　農経	(　〃　)			
渋谷　周平	１１　農畜	(　〃　)			

森山　武夫	12　医	青森県南津軽郡浪岡町　国立岩木療養所		所長		
滋賀　秀明	12　医	（東京ＯＢ会）				
(11主)						
前野　正久	12　農畜	（　〃　）				
小村　達夫	13　農生	不明				
高井　久芳	13農畜1	札幌市北１条西１７丁目		道庁農務部改良課		
前川　静弥	13　理化	室蘭市新富町１丁目６番１４号		日本製鋼室蘭製作所研究所副所長 室蘭市茶津町４	2－2911 内　305	
山下　正亮	13農畜2	札幌市白石町本通８１８の１３５		江別市酪農学園大学教授		
(12主)						
石井　昌長	13　農化	石岡市元真地２７３		東京通商産業局石岡アルコール工場長		
小笠原義顕	13　工電	（東京ＯＢ会）				
桶本　勝登	13　農経	（　〃　）				
松平　悌	13　農農	（　〃　）				
黒沢　良雄	13　農経	（　〃　）				
小田　昇	14　農畜	静岡県伊東市宇佐美２７８７ホテルカスガ				
池内　武夫	14　農畜	（東京ＯＢ会）				
(13主)						
小田　昇	畜	（　〃　）				
中尾　敦司	15　工鉱	（　〃　）				
西村　雅吉	15　理化	函館市港町北大水産学部	2－0311	北大水産学部水産科学科教授	2－0311	
(14主)						
木谷清喜貞	15　農実	金沢市古寺町１２		瓦土建（自営）		
石井　和彦	16農畜2	鳥取市湯所町１の３０７		鳥取大学農学部助教授		
(15主)						
河原　清作	16　工土	小樽市忍路郡塩谷村				
熊沢　洸	農実	十勝国河東郡士幌町農協				
関　義人	医	秋田県湯沢市字西松沢２９２		関内科小児科医院	3200 3377	
高木　史郎	工鉱	茨城県東茨城町駒渡１０８３駒		県立水戸工業高校		
中曽根　賢	農実	根室市栄町１７		道庁農務部畜産課		
林　健爾	農実	札幌市琴似町２４軒９５		北海道生産農業協同組合連合会生産部次長		
半沢　宏	工機	札幌市北６条西１２丁目		北大工学部教授		
伊関　悦郎	工鉱	函館市宮前町２１３		函館水産高校		
門地　正夫	農実	名古屋市千種区丸山町２－２６		旭化学工業ＫＫ社長		

秋吉　照忠	16	農林	（東京ＯＢ会）			
福光　幸彦	17	医	札幌市南７条西４丁目	23—1843	福光延寺堂院小児科	
岡田　光夫		工土	〃　南７条西２２丁目	~~[illegible]~~	札幌市役所土木部長	25—3211 代
石川　恒（16主）		農畜	〃　北１８条西８丁目	36-4752	北大獣医学部教授	
白取　善三	17	農実	弘前市大字薬師堂熊本１９の２		大成軽ブロックＫＫ取締役社長	
小林　五郎		工電	神奈川県大磯町東町２の６４		沖電気工業ＫＫ有線研究所	
山根　乙彦		農畜	鳥取市湯所町２丁目４２２		鳥取大学農学部教授	
前田　義正	18	農実	神奈川県藤沢市 鵠沼海岸７—２１—２５		紋別郡興部雪印乳業工場長	
大戸　進		農林	名古屋市千種区大島町２丁目４６		三井木材工業名古屋支店名古屋工場次長	
小池　栄一		工土	札幌市南１４条西９丁目		北海道電力札幌支店土木課長	
平井　宏和		工電	（東京ＯＢ会）			
阿部　孝	19	工電				
坂井　弘		農化	福山市東深津町２９０		農林省中国農業試験所	
田口　暢茂		医	札幌市北２２条東１０丁目		千才市東雲町１丁目　道立千才病院	
稲葉　恵一		農化	大阪府高槻市天神町２丁目１６の１５	5—2759	日本油脂ＫＫ佃工場	
福岡　邦泰		農農	札幌市琴似町宮の森１９		道庁総合開発企画部開発計画課長	
大手　英夫	19	理化	（東京ＯＢ会）			
富塚　治郎	20	農畜	東京都青梅市新町都立種畜場内		東京都立種畜場	
岸田幸三郎		農化				
羽鳥　栄治		工木	兵庫県西宮市松山町国鉄甲子園アパート１の３０６		国鉄大阪工事局停車場課長	
小林　正英		農畜	（東京ＯＢ会）			
木全　幹雄	21	農化	東京都杉並区清水１丁目６番８号		自衛隊陸上幕僚監部オ４部研究班	
山崎　治夫		工冶	大阪市城東区放出町２１７９		狩勝石鹸工場長	
宇津見千之助		農畜	栃木県小山市横町２２０６			
上野　新次	22	農農	新潟県加茂市西加茂３丁目		県立加茂農業高校	
和田　晴	22	農畜			網走市網走支庁農務課畜産係	
宮崎　利昭		工機	在ペルー		オ一物産ＫＫ機械輸出部	
武田　祐幸		理地	（東京ＯＢ会）			
田之上家久	26	農水	東京都三鷹市牟礼公団住宅　三鷹台団地１０の１０４		日本放射線性同位元素協会	

後藤　義英	28	農獣	札幌市円山西町２の９７		札幌市西保健所衛生課長	
斉藤　善一		農畜	弘前市若党町７９		弘前大学農学部（弘前市文京町）	2－7241 内 359
鈴木　敏夫		農畜	空知郡江部乙町江部乙高校内		江部乙高校	
渡植貞一郎		農畜	前橋市岩神町２８０　郡馬大学医学部		郡馬大学	
鳥野　保			北海道標津郡中標津町　内分泌研究所内		北海道農業試験場　根室支場	
永井　重翁		農獣	岩手県水沢市新小路２番地　雪印乳業ＫＫ 水沢工場			
梶谷　晴男		農水産	大阪市生野区新今里町5の17		大阪化学合金ＫＫ研究課長（尼崎市西大物町４５）	481—4433
吉本　正		農畜	仙台市荒巻中才１３の７		宮城県宮城農業試験場（仙台市原町桝江２９）	
古谷　昌司 (26・27主)		農畜	（東京ＯＢ会）			
下飯坂　隆		農畜	（　〃　）			
佐藤　厳		農畜	（　〃　）			
福島　務	29	医	札幌市琴似町２２５（アメリカ留学中）		北大産婦人科教室	
阿部晃一郎	30	工鉱	紋別市鴻之舞　清明寮		住友金属鉱山鴻之舞鉱業所	
鎌田　正人 (28・29主)		農畜獣	浦河郡浦河町西幌別	浦河3—284	ＫＫ　鎌田牧場	
田中　浩		工冶	神戸市苅合区　神戸製鋼所熔接棒事業部			
正富　宏之		理動	釧路市春採６４番地		釧路市立郷土博物館長	
斉藤　成俊	31	農経	北海道信用農協連岩見沢支所			
佐伯　和夫 (旧姓石塚)		獣	白老郡白老町萩野第三石山		昭和工業ＫＫ	
大久保利彦 (30主)		獣	天塩郡豊富町公営住宅　２１の３		雪印乳業ＫＫ幌延工場酪農課豊富駐在	豊富７６
加藤昌太郎		理物	（東京ＯＢ会）			
加藤　元		獣	（　〃　）			
千田　哲生		獣	（　〃　）			
岡本　洸		農生	（　〃　）			
小長谷善行	35	水			ＮＨＫ—ＴＶ	
荒川　清	32	経	札幌市界川町４９５	22—4652	札幌トヨタ自動車ＫＫ	21—8191
榎本　幸人		理植	淡路島町岩屋　神戸大学理学部 岩屋臨海実験所			
岡部　満雄		農畜	豊平５条１０丁目　道営住宅８の８２		道庁畜産課	
斉藤　実		経	富山市高原本町９６		不二越鋼材工業ＫＫ	

宮沢　寛	32　林産	迎子市山の根3　—12—10		日本揮発油	
(31主) 伊藤　亮	33　獣	広島県加茂郡河内町入野		農林省中国種畜牧場	
松田　瓔	医薬	静岡県三島市谷田		国立遺伝学研究所	
乾　直道	理動	(東京ＯＢ会)			
栗原　康	工鉱	(　〃　)			
渡辺　俊弘	工応化	(　〃　)			
柴田　久男	34　工電	北海道江別市対雁1番地　北電アパート		北海道電力	
今田　哲	農化	西宮市甲東園2—85		武田薬品研究所	
生田　勝一	経	札幌市苗穂町43		読売新聞報道部	
(33主) 菅原　照雄	文哲	札幌市北4西6　北4条アパート903		毎日新聞北海道支社	24—3211
土井　敦	農畜	札幌市手稲町字前田		ホクレン農業協同組合連合会企画部	
山本　智	水	梅戸郡浦臼町字浦臼内14区		浦臼高校	
村山　哲	経	西宮市門戸町109　小百合荘		本田技研工業ＫＫ大阪支店営業課	361—5391
栗津健太郎	水	札幌市南1条西17丁目		銀座屋（製パン業）	
樋口　正明	法法	(東京ＯＢ会)			
(32主) 千葉　幹夫	獣	(　〃　)			
中村　美幸	経経	(　〃　)			
佐伯　雄二	35　農畜	徳島県名西郡石井町川原2221 森永住宅		森永乳業ＫＫ	
本橋　幹久	農畜				
奥野　静子	文英	札幌市北2条西23丁目　片山方	61—8414		
(旧姓 片山) 田中　紀介	農林産	(東京ＯＢ会)			
長谷川邦夫	法法	(　〃　)			
門奈　駿	医進	(　〃　)			
森本　悌次	農林産	(　〃　)			
(34主) 稲垣　修一	36　理化	愛知県知多郡横須賀町大字加木屋字南鹿持18　大同製鋼知多寮		大同製鋼ＫＫ	
佐藤　典子	医	札幌市北36条西3丁目栄久荘		北大医学部大学病院第二内科	71—1151
高杯　嬉子	医	(東京ＯＢ会)			
河原　紀之	理地	(　〃　)			

湯浅　正之		農畜	（　〃　）		
吉田　亨		工衛	（　〃　）		
千葉　祐記	37	農畜	福岡市呉服町20　第一生命ビル内		雪印乳業KK販売課
(36主) 広岡　暢夫		農畜	茨城県西茨城郡岩間町　全販連内		
森　弘幸		工精	名古屋市北区辻町1丁目大隈鉄工所第1寮		
四柳　智久		医薬	（東京OB会）		
木塚　信次		農畜	（　〃　）		
伊藤　公一		医	札幌市南25条西12丁目		北大医学部(帯広市帯広厚生病院インターン室)
大場　善明		文史	（東京OB会）		
(35主) 鶴見　好博		理化	（　〃　）		
小島　杏介		水	（　〃　）		
広岡　暢夫		農畜	（　〃　）		
小山　毅		教	（　〃　）		
市川　瑞彦	38	理物	札幌市北32条東6丁目　井上武志方	72—3921	北大大学院　71.2691
(37主) 小出　秀遠		医	札幌市北14条西5丁目　北大病院		
宮崎　健		文露	三重県四日市市栄町8—10	52—4417	産経新聞四日市通信部
玉沢　一晴		医薬	（東京OB会）		
岡田　征至		法	（　〃　）		
志水　一允		農林産	（　〃　）		
清水　洋		畜	（　〃　）		
原　重一		農	（　〃　）		
堀川　芳男		畜	（　〃　）		
実吉　峯郎		医薬	（　〃　）		
新原　輝久		理地	（　〃　）		
田中セツ子		農工	（　〃　）		
恩田　正臣	39	農畜	兵庫県竜野市楫西町土師　農林省兵庫種畜牧場内		農林省兵庫種畜牧場
入江喜美子		薬	東京都渋谷区西原町2—13—14鈴木浦方		

小杯　則子 (旧姓寺江)		農畜	札幌市北１１条東７丁目１３　すみれ荘	７２—０５２５	天使女子大	
高木　佑太		農畜	沼津市牛臥３００４—６		台糖ファイザー沼津出張所	
小島　　武		医薬	兵庫県神戸市兵庫区吉田町１の３２鐘化		鐘ケ淵化学	
荒木　伸也		水遠	Taiko maru NO 2 % Masitima 研究所和風寮 Vasc Canaria S A P O Box 2051 Las Palmas de Gran Canaria Spain		家事手伝（熊本県下益城郡南町隈庄）	城南局４９
三浦清一郎		教	札幌市北２９条西８丁目　福井方		北大大学院	
田村　雅英		工合化	(東京ＯＢ会)			
野田　行丈	40	獣	(　〃　)			
大木　誠示		理数	(　〃　)			
吉田　賢一 (旧姓御坊田)		工冶	(　〃　)			
守谷　　正			(　〃　)			
八木　正己 (38 主)		理生	札幌市北６条西１３丁目　紺野方			
萩原　雅典		経			定山渓鉄道	
滝沢南海雄 (39 主)		理植			北大理学部大学院	
松永　武彦		工電子	千葉県茂原市早野３５５０　誠和寮		日立製作所茂原工場	
水野　佑亮		理化			北大理学部大学院（山下研究所）	
横田　　肇		農化			北大農学部	
菅野　　弘		畜				
牧　　竜子	４０	薬	札幌市南１条西１９丁目		札幌医大中央検査室	
滝沢　迪子	４２	文独	札幌市北１１条西５丁目		札幌光星高校	
松尾　英彦	４１	水漁			日魯漁業	
八木多賀子 (旧姓八木)		文哲	八木先輩に同じ			
大堀　悲子		法	札幌市北１０条東８丁目			
黒沢　道雄		工機	(東京ＯＢ会)			
高野　文彰		農農	(　〃　)			
小栗　紀彦 (40 主)	４２	農畜	北大第１農場内		北大大学院	
近藤喜十郎		文史	名古屋市中区古渡町５丁目１６番地		自営	
高橋　昭夫		獣				
八木沢守正		理生	東京都目黒区１７雲２の１９の９			

加藤 正昭 (41 主)	工衛	札幌市北5条西25丁目		北大大学院	

東京OB会

氏名	卒業年度	住所	電話	勤務先	電話
高松 正信	才二代部長	世田谷区松原6丁目36—8	(331) 6752	北大名誉教授 玉川大学教授	
中野友二郎	昭4農一農	南多摩郡多摩町桜ケ丘3丁目33—4		私学教育研修センター	
平山 常介	〃工一機	三鷹市井の頭5丁目5—17		日本海事KK	
野間口英喜		杉並区水福町335	(321) 7617	日航ホテル社長	
中谷 勝紀	5工一機	杉並区桜井1—15—23			(571) 4911
間 克市	6農一畜2	千葉県葛飾郡鎌ケ谷町発豊522			
岩垣 駛夫	〃農一農	新宿区百人町4—420 新宿住宅RA—15		東京農工大学教授	
河崎 秋三	〃〃 畜	千葉県印幡郡印西町			(04262) 6797
永松 四郎	7〃 〃	大田区北千束町1—58—9	(717) 3484	永松商事	
武田 朝男	8〃 〃	品川区小山6—26—7		千葉畜産工業KK常務取締役	(04723) 9161
東園 基文	9〃 農	渋谷区八幡通2—23	(461) 6567	宮内庁待従職参事	(401) 0451
植村 勘一	10〃 畜	目黒区鷹番町45	(712) 0390		
本田 桓康	〃工一機	千代田区紀尾井町4—11	(332) 5524	プレス工業（株）常務取締役	(044) 26 2581
大迫 明徳	11理一化	世田谷区宮坂1丁目14—9		（株）バイエルン・ジャパン	(432) 4251
吉見 一郎	〃農一経	北多摩郡加江町小足立620	(415) 0491	雪印乳業（株）取締役	(357) 3111
渋谷 周平	〃〃 畜	渋谷区代々木1—22		（社）日本アイスクリーム協会	
脇田代子郎	〃〃 化	藤沢市辻堂636 6	(0466) 36 9258	三菱化成工業（株）常務取締役	
滋賀 秀明	12医一医	港区芝白金三光町364	(441) 7844	大同製鋼（株）東京診療所長	(701) 4169
前野 正久	12農 畜	目黒区中目黒1の852		森永乳業中央研究所長	
小笠原義顕	13工一電	川崎市宿河原2223	(044) 82—3609	日本電気（株）放送機事業部長代理	
桶本 勝登	〃農一経	杉並区上荻窪1—197	(391) 5383	人事院関東事務局長	(581) 1731
松平 悌	〃〃 農	渋谷区恵比寿4丁目19—24	(473) 3920	日本農産加工（株）白岡工場長	(0486) 2—0131
黒沢 良雄	〃〃 経	茅ケ崎市小和田4332	(046) 70—8676	日本長期信用銀行福岡支店長	
池田 武夫	14〃 畜	世田谷区若林4丁目22—5	(414) 1361	~~中央競馬会理事~~	
小田 昇	〃〃 〃	伊東市宇佐美2787 ホテルカスガ		自営	

中尾　敦司	15 工一鉱	杉並区天沼３－５８１		住友ビル大日本鉱業ＫＫ	(211) 2671
秋吉　照忠	16 農　林	杉並区馬橋２－２２５		北海道合板協会常務理事	
平井　宏和	18 工　電	町田市南大谷字玉川学園６４１		日本電気（株）衛星通信開発室	
大手　英夫	19 理　化	新宿区西大久保２－２１９		日華油脂ＫＫ企画課長	(571) 5681
小林　正英	20 農一畜	杉並区阿佐ケ谷北３－２６－１０	(385) 6241	東京都経済局農林部畜産課副主幹	(212) 5111
武田　裕幸	22 理一地	武蔵野境南４－２０－１１		国際航業（株）地質部長	(265) 3661
古谷　昌司	28 農一畜	浦和市別所３丁目３８－１０	(0482) 5073	古谷製菓（株）東京企画室町	(831) 2730
下飯沢　隆	〃〃　〃	中野区白鷺２－１７－３	和田方 (385) 3269	日本軽種馬登録協会	(429) 5684
佐藤　厳	〃〃　〃			雪印乳業（株）技術部	
加藤昌太郎	31 理一物	国分寺市西町４丁目けやき台３２－１０３	(0425)2－0596	陸上自衛隊防衛大学応用物理研究室	横須賀 (2) 5812
加藤　元	〃獣	杉並区善福寺３－１５－１３	(399) 4610	DAKTARI ANIMALHOSPITAL	
千田　哲生	〃〃　〃	世田谷区　玄巻町１５－２９		中央競馬会競走馬保健研究所	
岡本　洸	31 農一生	草加市草加松原団地Ｄ５８－２０４	(0489) －3－9407	十条製紙（株）東京事業所	
宮沢　寛	32 〃林産	逗子市山ノ根３－１２－１０		日本揮発油建設部	
乾　直道	33 理一動	藤沢市辻堂北町２５５７		癌研究所病理部	(984) 0161
栗原　康	〃工一鉱	板橋区下赤塚７６下赤塚公務員住宅１２		中小企業庁技術部	
渡辺　俊弘	〃〃応化	埼玉県戸田市下戸田３２５５		北炭化成工業（株）	(0484) 31－2880～4
樋口　正明	34 法一法	世田谷区上馬５－２３－８		東京都人事委員会試験課	(212) 5111 内 4082
千葉　幹夫	〃獣	世田谷区弦巻町５－２９		中央競馬会馬事公苑	
中村　美幸	〃経一経	中野区鷺宮６－１９－１９	(991) 4149		
田中　紀介	35 農林産	清水市宮代町６		富士合板（株）研究所	
長谷川邦夫	〃法一法	立川市砂川町６９２江の島東団地２５０		岩崎通信機（株）経理課	
門奈　駿	〃医一進	茅ケ崎市菱沼２５７９	(0467)82－5746	国際興業航空サービス部	
森本　悌次	〃農林産	春日部市大字中野字辺の発７３０		松下木材（株）営業部	(888) 0439
河原　紀夫	36 理一地	府中市白金台６－２－２８		アジア航測（株）	(501) 8476
湯浅　正之	〃農一畜	武蔵野市西窪４１１　伊藤忠三鷹寮	(0425) 5095	伊藤忠商事（株）畜産課	(661) 2171
吉田　亨	〃工一衛	八王子市子安町５６６　子安アパート		高砂熱学工業（株）技術部	(251) 7121
高林　嬉子	38 医	中野区道玄町１１　藤茂荘		虎ノ門病院内科	(781) 6871
大場　善明	37 文一史	練馬区桜台１－３６　上原方		読売新聞広告部	(561) 1111 内607
鶴見　好博	〃理一化	台東区上野桜木町２３江戸川化学寮	(641) 8048	三菱江戸川化学（株）	(251) 0191

小島　杏介	37 水	横浜市神奈川区菅田町２８７２		淀橋保健所	(３６８) ０１８６
四柳　智久	〃薬	目黒区大岡山２－５－２５　若竹荘		東京大学薬学部製剤学教室	(８１２) ２１１１ 内 ７２７１
木塚　信次	〃農一畜	杉並区久我山２－６３－７		湘南食品（株）	
広岡　暢夫	〃　〃	茨城県西茨城郡岩間町　全販連内			
小山　毅	37　教	大田区石川町２丁目１３番３－１０２号	(７２０) １５７０	専修大学	
玉沢　一晴	38 医一薬	浦和市南浦和１－１－１４　太田方	(０４８８) ８２－３４３６	山之内製薬（株）中央研究所	(９６０) ２１７１
岡田　征至	〃法	川崎市木月大町９８　拓銀寮		北海道拓殖銀行築地支店	(５４１) ５１４１
志水　一允	〃農林産	江東区三好町２－１６	(６４１) ８０４８	農林省林業試験場	(７１１) ５１７１ 内３０５
清水　洋	〃〃　畜	北多摩郡大和町清水８９６		畜産局食肉鶏卵課	
原　重一	〃〃　農	横浜市港北区日吉本町 2096 日吉第三コーポ４２	(044) 61 8226	東京大学工学部交通計画研究室	(８１２) ２１１１
堀川　芳男	〃〃　畜	目黒区東ケ丘２－７－２５		アメリカーナ・コーポレーション　日本支社	
実吉　峯郎	〃医一薬	渋谷区長谷戸４６	(４６１) ５５５０	国立ガンセンター研究所	(５４２) ２５１１
新原　輝久	〃理一地	北多摩郡狛江町泉１２８４		アジア航側（株）	
田中　セツ子	38 農一工	世田谷区玉川奥沢３－１２１			
田村　雅英	39 工合化	八王子市大和田町１４００小西六大和田寮	(０４２６) ４２－５０１４	小西六写真工業（株）日野工場	
野田　行文	〃獣	東村山市萩山町３－９４　中外製薬寮		中外製薬（株）	
大木　誠示	〃理一数	目黒区八雲町４－１９－１　雄魂寮		雪印乳業（株）	
吉田　賢一	〃工一冶	横浜市南区大久保町５５９－２才二北斗寮		日本揮発油	
守屋　正	40	大田区田園調布２－４０　才一桜ケ丘寮		三菱重工（株）東京製作所	
黒沢　道雄	41 工一機	横浜市保土ケ谷区常盤台３６２　鋼菅寮	(046)33－2023	日本鋼管（株）川崎製鉄所　条鋼課	(３３) ８１１１
髙野　文彰	〃農一農	三鷹市牟礼　日本技術開発三鷹寮	(０４２２) ４４－８０４６	日本技術開発（株）　大型係	(９４６) ５１１１

現　役　部　員

氏　名	学年	学部学	現　住　所	帰　省　先
田中　倬	3	医	札幌市北２３東４　石垣方７２－３８６０	岐阜県郡上郡八幡町尾崎
阿部　勝彦	4	農林	小樽市長橋町４５　(2) ８８７６	同上
五十嵐　章	4	法	札幌市北八西四　九和アパート	旭川市南４条２４丁目　(6) ０９７２

池田　統洋	4	工機	札幌市北２７西１０	同上
入江　圭	4	工衛	〃　北２２東２　成毛方（７２）２８２９	東京都世田谷区成城町８３
高倉　宏輔	4	獣医	〃　北２０西７　藤見荘（７３）０６６７	大阪府南河内郡美陵町藤井寺　１０８の６２
降旗　正忠	4	工電	〃　北７西１２　仙台寮（２３）１２５４	長野県松本市外浅間６５８
仙波　和子	4	教	〃　北１１西３渡辺方（７１）１７３４	秋田市八幡字一里塚２１０の１
山本　紘明	4	経	〃　南１１西２０　（５６）０９９０	同上
石田　秀人	3	農林産	〃　新琴似９１９　中原方	神戸市須磨区行幸町３の６の２
遠藤　裕子	3	理化	〃　北１１西３　渡辺方（７１）１７３４	旭川市春光町５区４条８６
角田　卓彦	3	農農	小樽市最上町１６　（４）０８５３	同上
斉藤　勝雄	3	農工	札幌市澄川１２　（８３）６２８１	同上
田中　力	3	獣医	〃　北１９東２　市島方	東京都三鷹市井の頭３丁目７の１０
寺崎　弘恭	2	教理	〃　北１７西８　恵迪寮	鹿児島県肝属郡高山町前田１４６１
浜岡　秀洋	4	工機	〃　琴似町新川４９７　吉原方	高知県土佐清水市旭町５の２
春田　恭彦	3	農畜	〃　北８西４　九和アパート	東京都葛飾区東金町２の５の１２　（６０８）１３８０
村井　弘一	3	農畜	〃　北７東４　南方	三笠市多賀町１８
安岡　徳三	3	農林産	〃　北２０西７　藤見荘（73）０６６７	大阪市南区笠屋町４８　（２７１）８３０２
山本　進	3	水化	亀田郡亀田町字中字　北農寮	北海道河東郡音更町東士狩
今井　雅子	2	教理	札幌市南１２西８　（５１）１８５１	同上
岡田　昌彦	2	医進	〃　北７西１２　米沢寮	山形県赤湯町栄二下
小野　政則	2	教理	〃　北１７東１　川田方　（７２）４７８1	岡山県倉敷市平和町４８６　（２２）１７５５
加藤　公敏	2	教理	〃　北２５東１　鎌田方	東京都大田区南馬込６丁目２９－１
黄川田　梓	3	工土	〃　北７西１３　進修学寮	東京都世田谷区岡本町１２９７
佐々木好子	2	教理	〃　北１９西４　鈴木方	青森県八戸市鮫町字古馬屋２３
佐藤　潤子	2	教理	〃　南４西８　（５１）００４７	同上

72 5876

篠崎　正樹	2	医進	札幌市北１２東１　窪田方 (72) 0058	千葉県山武郡土気町土気１６３２
髙橋　馨	2	教理	〃　北１９西４　鈴木方 (73) 1672	夕張市若菜八番地
橋口　庸	2	医進	〃　北２３西７　土田方	福岡市三宅堂ノ原
浜野　厚	2	教理	〃　北１９西３　涌井方	千葉市懐橋町５５７
本田　徹	2	医進	〃　北２８西２　加藤方 (72) 0667	東京都豊島区高田南町１の３６
八木　裕徳	3	医進	〃　北７西８　エルム荘 (71) 5602	北海道山越郡八雲町末広町２１３
吉田　順子	2	医進	〃　北９西４	同上
山下　邦康	2	医進	〃　北１９東１３　春名方	高知県土佐清水市窪津
千場　信子	2	水産	〃　北６西１３　女子寮 (24) 1991	

ジンギス専門店

義　　経

宴会、コンパにご利用下さい

本　店　北18条西5丁目　T 71—6801
支　店　北7条西5丁目　T 71—2359

お酒飲みたし　おチョコなし
ビール飲みたし　グラスなし
カクテルしたし　器具はなし

酒類の御相談は

沢　田　商　店

正門前　TEL 71—0828

日本中央競馬会

札幌競馬場

北14条西19丁目

TEL (72) 0461～5

場長 松山義朗

庄内歯科

院長 庄内真夫

札幌市白石中央 五三の三

TEL (86) 2504

コーヒーならリビアに
おいで下さい。
靴下を差し上げて居ります。
ストレートコーヒーも御座居ます。

北8西4北向　TEL ㉓5450

コーヒーショップ　リ　ビ　ア

御会合御会食に御利用下さい。

北の誉直営

ほ　ま　れ　第　五

狸小路7丁目
TEL ㉒—1648

専門コーナーで
洗練された
お買物！

SUN サン デパート

TEL 24・5131

狸小路 3丁目

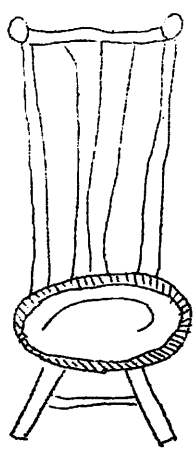
開店 10:30 ～ 閉店 8:00

札幌トーヨペット

本社　札幌市南6条西6丁目

TEL (22) 8181・(24) 3241

Music & Coffee



トリコロール

さっぽろ　北8 西4（北大正門前）

TEL (71) 9219

ハイセンスの店

画廊喫茶

クラーク

北13西4

N17・W5

(73) 6497

珈琲の店

アロア

清酒

金富士直営

てっぽ

さっぽろ　北17西5

並で一皿一合

(73) 1025

◇おわりに当って◇

○COIOPにて田中兄の原稿の出来るのを待っている所、追いつめられた兄は私の前で必死になって書いている。

「〆切は今日の何時までだ？」

「まだ〆切っていないのか、それじゃ書くか。」

「どうしても夕方までか。」

「仕方ない彼女の事でも書くか。」

○今年の部報こそ、と力んでみたのですが、出来ばえは如何でしょうか。O・Bの寄稿が増えてバラエティに富んだと思ったのですが、私達の怠慢の故か、部員の原稿の集いが悪く苦労しました。

○しかし部報の目的にとかく疎縁になりがちなO・Bとの交歓というのもあるのだから、その意味では良かったと思う。

○試験とちょうどぶつかってしまい、満足のゆく部報にはなりませんでしたが、初めての仕事故と御容謝願います。

○広告取りに走して下さった部員諸兄、お忙しい所寄稿して下さいました、O・B諸兄姉に深く感謝致します。（春田）

部報作製小委員会

春田恭彦　田中力

加藤公敏　高橋霞

部報第十二号

昭和四十二年四月発行

発行者　北海道大学体育会馬術部

（札幌市北十七条西六丁目

北大体育会内）

編集者　部報作製小委員会

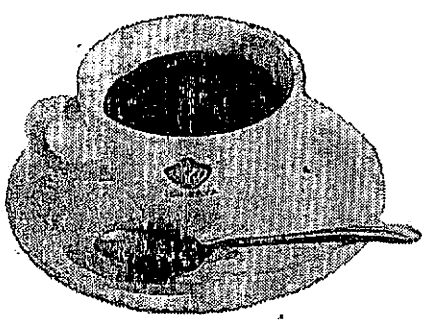
春田恭彦

印刷所　札幌市南二条東五丁目

（有）邦文社

電話二五―一六〇六番

世界のコーヒを味わえる店



和洋菓子と珈琲の店
ご会合、ご宴会、クラス会に
サービスの行き届いた当店をご利用下さい。

洋菓子とコーヒー　階上レストラン
パーラー 石田屋
北3西3道庁前T㉓3005㉒1872